

---

MONSTER ECOLOGIST **新たなる大地と生命～火の国の住人達～**

三ノ城

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MONSTER ECOLOGIST 新たなる大地と生命の国の住人達

### 【Nコード】

N90080

### 【作者名】

三ノ城

### 【あらすじ】

ここはモンスターと呼ばれる生物たちが生息し、彼らを狩猟するハンターと呼ばれる人々が存在する世界。そして、この世界にある新大陸と呼ばれ、その名の浸透が待たれる大陸に大砂漠と呼ばれる場所がある。

そこには巨大な一枚岩があり、その上にはこの大陸でも有数の交易都市『ロククラック』が存在している。

そしてこの都市に、一人の青年が訪れようとしていた。

## Q u e s t o 砂漠に浮かぶ街（前書き）

この作品は『モンスターハンター3（トライ）』を基本設定に、その他のモンスターハンターシリーズで構成されております。そのため、一部の設定で違いが出ますがご了承ください。

## Q u e s t o 砂漠に浮かぶ街

突き抜ける様な青い空と目を刺激する黄砂の砂漠……青と黄、二色しかない砂漠の中を一隻の小さな帆船、砂上船と呼ばれる船が砂漠を海のごとく軽快に駆けていた。

その砂上船が目指すは大砂漠の中央にある、とある貿易都市である。

この砂上船に乗ってどのくらいの日にちが経ったのだろうか？

長旅に慣れているとはいえ、さすがにこつ何日も砂漠だけというのは堪えてくる……

薄暗い船内でそんな事を考えていると軽い衝撃が走る。

何事かと思ったがそれは杞憂に終わった。

というのも耳を澄ますと、ザワザワと喧騒が聞こえてきたからである、どうやら目的地に着いたようだ。僅かに指す光を頼りに自分の荷物を手早くまとめ終えると、薄暗かった船内が急に明るくなった。

「よう、あんちゃん！ついたぜ！」

そう言うのはここまで自分を運んでくれたこの船の船長ともいうべき人である。

自分が礼を述べると船長は首を振った。

「気にすんなって。それより荷物は纏まって……いるみたいだな」  
荷物が纏まっている事を確認すると船長は体をよける。

すると乾燥した空気の中に少しばかり水のおいがした。

「まずは街門の観光案内所に行きな、あそこなら誰よりも親切、丁寧かつ確実だ」

二本の柱が目立つ場所を指差して笑い飛ばす船長に深々と頭を下げ、自分は街門へと足を運ぶ。

途中、自分が乗って来た砂上船よりもはるかに大きい砂上船が目に入ってきた。

船首に巨大な槍を備えたその船は修繕しているのか、足場が組み立

てられ何人も船大工が作業をしている。

この船は何に使われるのかに興味を持ったが、今は急いでいるのでとりあえず見聞きは我慢した。

そして、最初の目的地……いや、これからお世話になる街の街門へとたどり着くと、思わず二本の天高くへと延びる門柱を見上げた。雲ひとつない青空を飛ぶ無数の飛行船とそこへ伸びる二本の門柱。そして、この街の顔ともいえるこの門柱の間を一隻の飛行船が飛んでいくのを目で追っていると声を掛けられた。

「ホウ、珍しいですかのう」

声のした方へ視線を向けると二本ある門柱、その向かって左側根元の所に『観光案内所』と書かれたカウンターがあり、竜人族と思われる老人がいた。

「ここへは観光ですかな？」

観光……確かに私服姿ではそうとしかとられないだろう。

苦笑いをしながら自分は懐から一枚の書状を取り出した。

老人は掛けていた老眼鏡を指で直すと、書状の文面を一読する。

「ホウ……これは失礼しました」

老人は失礼を詫びるが、自分は首を振った。

それでも老人は申し訳ないと思ったのか、近くに二本脚で立つ猫の様な獣人族のモンスター、アイルーを呼び寄せた。

アイルーはモンスターでありながらも人語を理解でき、一部のアイルーは人共に生活している。

この街でも例外ではないらしく、呼ばれたアイルーは羽がついた赤い帽子と黄色い蝶ネクタイが目を引き赤いコートを着ていた。

観光案内をするアイルーの制服と思われるそれは、きれいな毛を砂漠の細かい砂から守る意味もあるのだろう。

「すまないがこの人をマスターの所へ案内してくれないかのお？」

「分かりましたニヤ！」

アイルーは元気よく頷くとこちらへ近づいてきて一礼した。

「こちらですニヤ」

アイルーは愛想よく街の中央、街門よりも更に高い塔の様なモニユメントがそびえたつ方へと誘導する。

そこからは、いくつもの幌ほろの屋根が見え、遠くには闘技場と思しきドーム状の檻のような施設も見えた。

その時、カチャリと金属がぶつかる音がした。

振り返るとそこには腰に剣を差し、右腕に盾を装備し、鎧を着込んだ一人の若者が立っていた。

自分もやはりいつもの格好であればよかったと思いつつカウンターから離れ、アイルーについていく。

その背後で先ほどの若者に老人が声を掛けた。

「ようこそ、『大砂漠の宝石』ロックラックへ」

## Q u e s t 1 夜の酒場へ出会い

日が暮れはじめた頃、ロククラックの酒場では一日で最も忙しい時間帯を迎えようとしていた。

「かんぱーい！」

ある者たちは成功を祝い、またある者たちは労をねぎらって……それぞれここに居る理由は違えど、始まりの音頭は同じものであった。

ロククラック……大砂漠のほぼ中央にある巨大な一枚岩の上にあるオアシスに作られた交易都市である。

大砂漠と言う名の通り見渡す限り砂漠が広がる過酷な場所でありながら、ロククラックが栄えたのは一重にこの街を統治するギルドマスターのおかげであった。

彼は、砂漠を海の様にする砂上船と飛行船をうまく使い、貿易拠点としてこの街を大陸で一、二を争う程の大都市へと発展させたのである。

また、この過酷な環境もある意味、ここの発展に一役買ったといっても良い。

何故なら、過酷な環境であるという事はヒトだけではなく、ヒトの驚異となるモンスターにも当てはまる。

そのため、周囲に生息するモンスターの種類も数も必然と限られる事となっていた。

そのため他大陸の都市である、ミナガルデやドンドルマの様な堅牢な砦や強力な城塞兵器を作る必要もなかったのである。

もちろん、全くいないというわけでもないが、大砂漠からのモンスターは街の基礎でもある巨大な岩の岩盤が天然の砦となって守っている。

また、岩盤の低い場所には昔からこの地で育てられた木材で作った壁ともいえる巨大な柵で立てられていた。一見、不安にも思える守

りだが、たかが木材と括ってはいけない。

この地で古来より育てられた木で造られたそれは、十分な強度と柔軟性を持っており、超大型と言われる種類のモンスターでも、その壁を破壊する事は難しい。

この様な理由からロックラックは過酷な大砂漠の中央に位置しながらも、ここまで発展したのであった。

「『達人ビール』4つお願いしま〜す」

「特別メニュー。『ボルボ・ローズ』2人前入りました〜！」

「3番テーブル注文の『ブリカブトの煮込み ポツケポテト添え』  
出来たぞ〜！」

「は〜い！」

注文を受けたギルド嬢達や厨房のコックの声が酒場に響く。

しかし、酒場と言ってもロックラックの場合、日よけの幌ほろがある程度でほとんど屋外である。

ロックラックの酒場は街の最も奥まったところ、ちょうどオアシスを眺める事が出来る場所にあった。

そしてその奥、ちょうど酒場とオアシスの間にはクエストを受注したハンター達が目的地に向かうための砂上船の基地があり、そこを起点にこの街のハンターたちは活動していた。

そしてオアシスの中央には、はるか昔に突き刺さったと言い伝えられ、今ではロックラックのモニュメントともいえるモンスターの大きな牙が突き刺さっているのが良く見える。

そんなほとんど屋外と言える酒場の一角、ちょうどオアシスを見下ろす四人掛けの席に、酒場とは無縁と思われる巨大な書物の山が出来る上がっていた。

その巨大な書物の山には、さしものハンター達も誰ひとり近寄らない。

理由としては、その席がカウンターのほぼ裏で、酒場の隅にあるためである。

そして、何よりその巨大な書物の間から『鳥盤目』ちようばんめくだの『鎚尾亜目』ついでめく



など、ハンターには聞き慣れない単語がブツブツと漏れ出ていた。そんな誰もよりつかない席にフラフラと近づく二人のハンターがいた。

「なんだ？きよの山は……ヒック」

「さあ？……ツク！」

酔っぱらっているのか二人のハンターは臆せず、ズカズカとその書物の山に近づく。

二人は酔っぱらっているため気がつかない様であったが、そこに積み上げられていた書物のほとんどに『おうりつこせいぶつじよしたい王立古生物書士隊 著』の箔が押されていた。書物の山に近づいた酔っ払いの一人が、書物の中にいる一人の青年に気がついた。

年はまだ若く、眼鏡を掛けており、体つきもそれほどいいわけではないが、レウスレイヤーと呼ばれる髪型にされている、青みがかつた銀髪が自然と彼らの目を引いた。

「ん、ガキ？……ヒック」

その青年は何か書いていた様子であったが、酔っ払いに気づいたのかその手を止め、顔を酔っ払いの方へと動かす。

青年はしばらく酔っ払いを見ていたが、興味がなくなったのか止めていた手を再び動かした。

その態度が気に入らなかつたのか、酔っ払いの一人が怒鳴り声をあげた。

「なに、無視しとんじゃー！！」

そのハンターは青年に向かって拳を振り上げる。

ハンターは自分の武器を相手に向けることはタブーとされているが、素手ならばまず何も言われる事はない。

ましてここは酔っ払った荒くれ者の集まる酒場である。ギルドも多少の乱闘ケンカは黙認している。

むしろ、一部のギルド嬢は乱闘大歓迎などと言う噂もある。

拳を振り上げた男はそのまま振りおろそうとしたが、急にその手を止めた。いや、止めざるを得なかつた。

「オイ、どうしたんだよ？……ック」

後ろにいた仲間が話しかけるが、そのハンターは腕を振り上げたまま止まっている。

不審に思った仲間が前に出ようとすると、後ろから酒臭い酒場とは程遠い、明るく幼稚な声が飛んできた。

「ハイハイ！お二人さんは席に戻りましょうね」

その声に、二人の酔っ払ったハンターは固まり、恐る恐る振り返る。そこには、ロツクラックのギルドの制服で、スカラーシリーズと呼ばれる服装に身を包んだ一人の女性が笑顔で立っていた。

年は20代前半くらいで砂漠の日照りによって小麦色に日に焼けた肌が目を引いた。

その上、体の線は細く、酔っ払った二人のハンターと比べれば、か弱い印象がある。

しかし、二人のハンターの反応は今までの勢いが吹き飛ばすほど極端であった。

「オ、オウ！分かった！」

「だからサメだけは止めてくれ！」

そう言いながら、二人のハンターは慌ててその場から去って行った。完全に二人のハンターが去ったのを確認すると女性はため息をついた。

「アキラさんも、鋸もりを人に向けないでくださいね」

そう言っつて送る視線の先には一本の鋸があった。

元が何の骨か分からなくなった骨に、欠けて鋭くなった貝殻を矢尻とした鋸で、一般には『漁獲ぎよかくモリ』と呼ばれている物である。

アキラと呼ばれた青年は女性を不満そうに見る。

「先に吹っ掛けてきたのは向こうですよ」

あくまで非は相手方にあると言いなながらも、アキラは漁獲モリをテーブルの少し離れた場所に立て掛けた。

「それに少なくとも武器は向けてませんよ」

話をしながらアキラは手際よく山積みになった書物を片付け、自分

の反対側の席にスペースを作る。

「第一、使う気はありませんでしたよ……って、それくらい知っていますよね、ナギさん」

空いたスペースを軽く拭くと、アキラはナギと呼んだギルド嬢に席を薦める。

ナギはその薦めに素直に席に腰を下ろした。

「分かっているけど、あまり騒ぎを起こして欲しくないのよ」

テーブルに肘を置き、やれやれといった様子で首を振ってみせた。

アキラはその反応がおもしろいのか苦笑いを浮かべるが、ナギの言う通り騒ぎが起きればこちらも何かと面倒であると思ひ直す。

「確かにそうですね……」

アキラはそう呟くと本と本の間隙から、ミルクの入ったジョッキを取り出し口をつける。

注文してからだいぶ時間がたっていたが、気にすることなくアキラは無言でジョッキを傾けた。

その様子を見ていたナギはふと興味深そうに尋ねる。

「そういえば、次はどこに行くの？」

その言葉にアキラは反応し、ジョッキを口からはなす。

そして、積み上げられた本から一際、大きな一冊の本を取り出す。

しっかりと鉾つばが打たれ、それなりの装飾が施されたそれは、この大陸の地図であった。

アキラは先ほど片づけた時にできたスペースに、あるページを開いた本を置きナギに見せた。

「一応……ここ、トリニーサ火山ですね。できれば……」

アキラが説明しようとした時、喧騒で満ちる酒場に声が響いた。

「たっただいま〜！」

喧騒でも聞こえた声に、酒場の視線が集まる。

それはアキラも例外ではなく、声の主に視線を向けた。

酒場の視線が集まった先には手を振る一人の少女と頭を押さえる女性のハンターがいた。

最初は何気なく見ていたが、少女がこちらに手を振っていることに気がついた。

しかし、少女が手を振っている位置から、アキラ達がいる位置までは誰もおらず、その後ろは砂漠。

この町で、アキラに対してあのような行動をとる知り合いはいない。周囲の視線が徐々にこちらに向き始めたのを感じながら、アキラはナギを訪ねた。

「もしかして、ナギさんの知り合いですか？」

「は、はい……」

不信感を醸し出しながらのアキラの問いに、ナギは少し恥ずかしそうにうなずく。

するとナギは席を立ち、手を振り続けている少女へ駆け寄って何かを話始めた。

そして、ナギが現れたことにより、酒場の視線も興味を無くしたのか徐々に散り始める。

アキラもナギのやり取りをしばらく見ていたが、視線を手前に広げられた地図へと戻し他にも広げていた書物と一緒に片付け始めた。

ここにいたらまたナギにつかまりそうなので撤退する事にしたのだ。しかし、アキラが机の3分の2ほど片付け終えた頃に心配していたナギが戻って来た。

しかも、先ほどの少女を引き連れて……

「彼はアキラ・ウェナートルさん。半年前にロククラックにやって来たの」

ナギの紹介にアキラは恭しく頭を下げるが、二人に気がつかれない様にナギを睨む。

睨みつけられたナギは苦笑いしながら誤魔化す。

アキラは言いたいことが山ほどあったが、この場で言えるような内容ではないので出かかった言葉を呑み込み顔をあげた。

すると、先ほど手を振ってきていた少女がアキラを興味深そうに見ながら近づいてきた。

兜から見える顔立ちとは、その体系もあつてか幼く見え、兜との間からは青い目と髪が覗く。

そして、その身に纏っているのはアキラがこの街に来てから何度か見ている物で、かつて見ていたものとは違い左右対称の物あつた。新緑の様な緑色の鱗を基調に金属で要所、要所を固め、女性用の場合、腰防具をスカート状に仕上げているのが特徴である、レイアシリーズと呼ばれる防具一式であつた。

この防具はその名の通り、『陸の女王』こと、雌火竜『リオレイア』の素材が必要なのももちろん、『凍土』と呼ばれる極寒の地でしか産出されない貴金属<sup>レアメタル</sup>の一種である『アイシスメタル』や『ライトクリスタル』と言つたもので加工する必要があり、現在のロックラックでは中流ハンターになつた者が身につける事が多い。

しかし、一部の上位ハンターも愛用していることも少なくないので、あくまで目安である。

「ウエナートルさんですか……」

「はい。えっと……」

アキラの言いたい事を察し、少女は一步下がると、腰防具であるレイアワールドの先をスカートのようにつまみ仰々しく礼をした。

「ルーメン・エクリクシスと言います。ルーメンもしくはルーと呼んでください」

その仕草は先ほどまで手を振っていた時とは違い、上品な態度と挨拶であり、ドレスと鎧を間違えているのではと思えるほどである。

しかし、それ以上にアキラを驚かせるものがルーメンの背中にあつた。

「スラツシユアックス……」

その言葉にルーメンは頭をあげると、おもむろに背中に背負っていた折り畳み式の大斧型の武器、スラツシユアックスを展開し、苦もなく構えて見せた。

「意外ですか？」

「少し……それに、スラツシユアックスその物もゆっくり見たこと

がなかったのだ」

そう言いながらアキラは、ルーメンが持つスラッシュアックスを見る。『スラッシュアックス』とはこの大陸のハンターが使う武器の一つで、大きさや形状は大剣と似ており、複雑ながらも斬新な機構により、破壊力のある『斧モード』と手数が多い『剣モード』を使い分ける事のできる武器である。

機構を組み込んでいる関係で強い衝撃を受けるガードは出来ないが、使いこなす事ができれば火力と手数、双方の組み合わせによりモンスターに大きなダメージを与える事ができる。

しばらくの間、アキラは興味深くスラッシュアックスを見ていたが視線を感じ、顔を上げた。

するとそこには、アキラの髪先から爪先まで見つめているルーメンがいた。

「何かおかしいですか？」

アキラは自分の服を見ながらルーメンに尋ねるが、当のルーメンはしばし何かを考え始めている。

どうしたものかとアキラが視線をそらすと、ルーメンと共にいた女性の顔が曇っている。

その隣ではナギも何かを感じたのか、苦笑いをしている。

二人の様子から何か嫌なものを感じ取り、アキラはルーメンから距離を取ろうとするが遅かった。

ルーメンはいきなりアキラの袖を掴むと、真剣な顔を目の前まで、近づけ問いかけてきた。

「彼女いるんですか!？」

「はいっ!？」

いきなりの少女の言葉の意味に、アキラの目が点になり、すっとんきよんな声をあげた。

「いるんですか? いないんですか?」

「えーと……」

「考えるってことはいるんですね! そうですね!」

「いや、その……」

「本当の事を言ってください！いるんですか？いないんですか？」  
ルーメンに気迫に押されアキラはすいすいと後ずさりし、ついには  
近くの手すりにまで押されてきた。

ちなみにここは前述したように砂漠が見渡せる場所であり、当然な  
がら高い位置にある。

手すり下には一応、砂漠の砂があるのでクッションにはなるだろう  
が落ちるのは避けたい。

それ以前にアキラには彼女なんて存在はいないので、素直に「いな  
い」と言えばいいのだが、ルーメンのいきなりの質問の性が、はた  
または気迫の性なのかどうかは分からないがまったく言えない。

「どうなんですか？いるんですか？それとも、いないんです……ふ  
ぎゃっ！！」

「ルー、いい加減にしないで！」

更にはすいすいと迫りながら、たたみかけてくる少女であったが、女  
性からの一括を受けその場につづくまった。

女性はまったく、と言った様子で肩を落とすがすぐに姿勢を直し、  
兜を脱ぎアキラに振りかえった。

「申し遅れました。私はイーリス・ヒュエトス、見ての通りガンナ  
ーをしております」

背中に背をつけている銃型の武器である『ボウガン』を指すと、イー  
リスは自己紹介と共に礼をすると紺色の髪が頬に沿って滑り落ちた。  
その身なこなしは、先ほどのルーメンとも通ずるところがあるが、  
こちらの方が品格があるように感じられる。

それは、彼女がすらっとした長身であり、鎧越してもわかるモデル  
体系ともいえるからであろう。

その彼女が纏うのは、両肩部分が異様に飛び出ており、全体を真鍮  
色で覆われた鎧でガンキンシリーズと呼ばれるものである。

そして、この装備を身に纏っている事は、イーリス本人の腕の良さを  
物語っている。

と言うのも、ガンキンシリーズの素材となる『爆鎚竜』はくすいじゅうこと、『ウラガンキン』は、この周辺でも強敵の部類に入るモンスターであり、『爆鎚竜』名が示す通り、鎚ハンマーの様な顎から繰り出される最大級の攻撃は、この大陸で最も破壊力があると言われている。

一方、彼女が身に纏う防具に対し、火器である『ボウガン』は比較的細身であり、一見すると頼りなさそうである。

アキラはボウガンを詳しく見ようとしたが、ルーメンが顔をあげてしまったため、ボウガンが見えなくなってしまった。

仕方がないので、アキラは先ほどのルーメンとのやり取りについてイリスに質問した。

「ルーメンさんとは仲がいいみたいですが、付き合いが長いのですか？」

アキラの質問にイリスは少し悩むと、先ほどからずっと頭を抱えているルーメンを見る。

そして、軽くため息をつくと苦笑しながら答えた。

「ええ、恥ずかしながら……ルーがハンターを始めたところからずっと一緒です」

「そうなんですか」

思ったよりも二人の付き合いが長かった事にアキラは内心驚きながらも、平静を装って頷いた。

すると今度は、イリスがアキラに質問してきた。

「ところで、ウエナートルさんはこの辺の方ではありませんよね？」  
今までの、わずかなやり取りでの意外な質問にアキラは素直に驚く。

「そうですね……よくわかりましたね」

アキラの答えながらの質問に、イリスはしまったと口元を押さえながら、申し訳なさそうに答える。

「名前がこのあたりだと、あまり聞かない名前だったので……」  
その答えにアキラは、なるほど、と納得した。

確かに、自分の性であるウエナートルという名前は、このあたりでは珍しいかもしれない。



しかし、そう考える一方で、アキラはふと気になりルーメンとイリスを見比べる。

ルーメンがハンターを始めた時のからの付き合いならば、何らかの特別な感情を持っているのかもしれない。

さすがに、それ以上は詮索するわけにもいけないので、アキラは自分の事について話す事にした。

「元々はシュレイド大陸のドンドルマと言う所なのですが、分け合って半年前からこちらに来ています」

「ドンドルマ？」

アキラの説明に真っ先に食いついてきたのは、頭の痛みが引いたらしいルーメンであった。

首を傾けながらも、ルーメンは何度も「ドンドルマ」を呟いている。どうやら、どこかで名前だけは聞いたことがあるらしい。

確かに、ドンドルマの規模を考えればこの大陸でも聞いたことは無い事はないだろう。

ドンドルマ……シュレイド大陸の中央部付近に発展した都市で、ロツクラック同様、交易都市として栄えており、更には周辺都市の中軸的役割も行っている。

三方を山で囲まれているため、自然の砦としての地理を生かし発展してきたドンドルマの特徴としては、その工業製の高さが上げられるであろう。

ここロツクラックにも立派な炉があるが、ドンドルマの炉はそれ以上である。

また、今では移転されたいが、近年まではハンター達の交流の場として『メゼポルタ広場』と言う場所が作られていた。

このような場所ができたのも、それだけ多くのハンターが集まる大都市である事を現している。

アキラがそんな事を考えていると、今度はナギが口を開いた。

「アキラさんはこう見えてもモンスターの生態に詳しいのよ、今回は調査のためにわざわざドンドルマから来てもらっているのよ」

「ナギさん！」

ナギの説明に思わずアキラは叫んだものの、すぐに口を押さえる。幸い、この席は他の席から離れている上、風通しも良く、他の席では宴会状態なのでアキラの叫びはほとんど響かなかった。

アキラは深呼吸すると、明らかに避難した目でナギを睨む。

先ほどまで、あまり表沙汰にしたいくないと言っておきながら、この状況である。

「調査？」

そう漏らしたのはルーメンで、隣にいるイーリスも首をかしげている。

これでは下手に誤魔化す事も出来ないなので、アキラはしぶしぶ自分の目的を説明することにした。

「……ここだけの話にしてほしいのですが、自分はここにモンスターの生態調査にやって来たんです」

そう言いながら、アキラは山住の書物の中から、一冊の本を取り出し開いて見せた。

そこには、ハンター達が持つモンスター図鑑よりも詳細なモンスターのスケッチが、体の部分、部分で細かく書かれている。

「へえ〜」

ルーメンは初めて見る、詳細なモンスターのスケッチに目を輝かせている。

確かに、普通のハンターにとってはモンスターのスケッチなど、図鑑で見るだけなので、この様なものに興味が持てないわけでもない。そして、隣にいたイーリスもまた興味深げに覗いていたが、ある事に気づいたらしく質問して来た。

「でも、そう言うのは書士隊の仕事では？」

再び放たれたイーリスの鋭い質問に、アキラは少し困った。

イーリスの言う『書士隊』とは、王国の調査機関である、『王立古生物書士隊』の通称で、国王の命でモンスターの生態調査を行っている。

書士隊が調査してまとめられた情報は、ギルドやハンター達が使うモンスター図鑑に使われたり、ロククラックには無いが古龍観測所にも情報を提供している。

もつとも、発見されて間もなかったり、危険度が高いモンスターについては、ギルドの直轄ハンターであるギルドナイトや腕の立つハンターが調査、もしくはそれらの護衛付きでの調査を行う事もあるが、基本的には書士隊の隊員が調査をしている。

そう考えると、書士隊でもないアキラがここに調査に来るのは不自然なものがある。

アキラはしばし沈黙したのち、少しずつ理由を言い話し始めた。

「確かにそうですが……、このギルドから……その……人手が多いほうが良いという事で来たんです」

かなり、ちぐはぐな説明にイーリスは不審そうな目線を向けるが、ルーメンは全く気にした様子はなかった。

むしろ、興味深々と言った様子で先ほどのスケッチ同様、目を輝かせている。

「やっぱり、この辺のモンスターは向こうの大陸のモンスターと違うの!？」

若干、興奮した様子でルーメンは、再び身を乗り出して問いかけてくる。

しかし、今回は後ろで、イーリスがレイアワールドを押さえているため、ルーメンはアキラの前まで来ることが出来ない。

それでも、キラキラと光るルーメンの目に気押されながら、アキラは何とか答え始める。

「え、ええ……まだ、半年しか経っていませんがそうと言えますね。同じモンスターでも結構違いますし……」

「どんなところが違うの!？」

説明の途中でもズバツ!と切り込んできたため、アキラはため息をつくと本の山を再びあさりだす。

そして、先ほどとは違う表紙ががちりした一冊の大きめの本と、

ノートらしき少し大きめの手帳サイズの本を取り出し、それぞれのページをペラペラとめくりながら説明を再開した。

「そうですね……たとえばルーメンさんの防具の元であるリオレイアの場合だと、同種でありながらも、骨格や肉付きが違います。また、そのためかもしれませんが、攻撃方法も違いますね」

アキラはそう言うと、大きめの本とノートを比べやすいように広げて置いて見せた。

大きめの本のそこには大きな翼をもっている事から一目で飛竜わかる絵が描かれており、その上には「じゅうばんまぐ 竜盤目 じゅうきゃくあまぐ 竜脚亜目 こうかくりゅうまぐ 甲殻竜科目 ひじゅうじょうつか 飛竜上科 リオス科 リオレイア」と名前が書かれていた。

大きく書かれた絵にはアキラがいた大陸では馴染みのあるリオレイアの姿が事細かに各部分ごとに描かれており、ノートの方には、ルーメンやイーリスにも馴染みのあるリオレイアの姿が、アキラの手描きで描いてあった。

手書きであるとはいえ、アキラの書いたレイアはその特徴をよく捉えられており、ルーメンやイーリスが見ても違和感は全くなかった。そして、実際にレイアの絵を比べると、その違いが良くわかる。

アキラがいた大陸のレイアに比べ、この大陸のレイアの方が首や足、尻尾が太く、体全体の重心が低く感じられた。

また、足の形については向こうの大陸のレイアの爪が全て前向きに生えているのに対し、この大陸のレイアは第一指が逆方向、要は踵側かかとがわに生えており、獲物を捕まえやすい骨格になっている。

他にも、首の付けに生えている棘の位置が付け根全体か、翼側だけかなど細かなところが違ったりした。

更にアキラは補足の説明で、戦闘時の姿勢がこの大陸の種の方はかなりの前傾姿勢で、向こうの大陸の種と比べると、片手剣などのリーチの短い武器では斬りにくかったり、低空で飛び回ったり、高出力のブレスを吐いたりするなど、向こうの大陸ではしてこないような行動があるという説明もしたりした。

一方、アキラがレイアについて説明をしている間、ルーメンとイー

リスの方は驚いたりしながらも楽しく聞きいつており、その様子を見たナギは満足そうに笑みを浮かべていた。

そして、アキラは説明を終え、一息ついていると少し興味を持ったのか、イーリスが声を掛けてきた。

「次はどこに行くつもりなんですか？」「一応、火山にしようかと考えているんですけど……」

先ほどナギと話していた事を思い出しながら、アキラが話している。

待っていたと言わんばかりに、ナギが声をあげた。

「そうだ！アキラさん、ルーメンちゃん達と一緒にいったらどうです？」

ナギの発言に、このテーブル全体が一瞬、静かになる。

そして次の瞬間、2種類の驚きの声が上がった。

「いいの!？」

「ナギさん!!」

前者はルーメンで、後者がアキラである。

声をあげた後、ルーメンはニコニコとしているが、その隣ではアキラがあからさまに不機嫌な雰囲気醸し出している。

そして、イーリスは声こそあげなかったものの、複雑そうな表情をしている。

三人の様子、特にアキラの様子をうかがいながら、ナギが話を進める。

「大丈夫、大丈夫。ルーメンちゃんとイーリスさん腕は私が保証するわ」

「しかし……」

確かに、二人の装備やナギの対応からして、ルーメンとイーリスの実力は確かなものである。

しかし、だからと言っていきなり、自分の見ず知らずのハンターと一緒に出かけるのは御免である。

そう思い、アキラが文句を言おうとした時、別な声が割って入って

来た。

「フォツ、フォツ、フォツ。別に、かまいませんじゃる」  
「……マスター！」

その声に、アキラを除く三人が声をあげ、全員の視線がすぐそばまでやって来た小柄な老人に向けられる。

頭にぴったりとつく赤い帽子に同色のチョッキ、アキラ達とは違い長く尖った耳。

彼こそ、商人としてここロツクラックを発展、統治しながら、さらにハンターズギルドを纏めているギルドマスターである。

ちなみにナギなどのギルド嬢が身につけているスカラーシリーズは、彼の趣味に合わせてデザインされたらしいとのこと。

マスターはヒョコヒョコと歩いてくると、テーブルの上に飛び乗り腰をかけた。

「話は大体聞かせてもらいましたがアキラ殿。その御二方ならナギの言う通り問題ありません」

そう言いながらマスターは懐から、愛用の筆と短冊を取り出す。

一方、いくら雇い主ギルドマスターとはいえ、アキラはそう簡単に引く事は出来ない。

「しかし、自分の調査は……」

「だから大丈夫じゃって！ ジャギイ達 みんなで居れば 怖くない  
じゃ！」

反対し拒み続けるアキラに対しマスターは『大丈夫』の一点張り、更にはお得意の川柳まで飛び出して来た。

ちなみに『ジャギイ』と言うのは鳥竜種の一つで、群れで狩りをするモンスターである。アキラが居た大陸で言うランポスなどの鳥竜種のモンスターと考えていいが、『ジャギイ』と言うのはジャギイ科のオスの事だけを示している。

尚、同科において『ジャギイ』より一回り大きいメスの個体は『ジャギイノス』、群れから独立したのち、強大な力を得てリーダーとなったオスの個体を『ドスジャギイ』と言う。

自信たっぷりげに川柳を詠みあげるマスターであるが、普段でも反応が微妙だというのに、本日は更に切れが悪かったらしく皆無反応である。

その上でおそらく無意識であろうルーメンが一言。

「火山にジャギイっていないよね？」

ルーメンの言う通り、火山にジャギイはいない。

あくまでたとえの話なので仕方がないのかもしれないが、さすがにだらもそれには触れなかった。

更に気まづくなる雰囲気、イーリスは頭を抱えたため息と共に、ルーメンの頭を先ほどよりも幾分か強めに叩く。

「少し、黙ってなさい」

「うううう……………」

頭を押さえ涙目になりながら、ルーメンはその場にしゃがみこんだ。ルーメンとイーリスのやり取りが終わったので、アキラは改めてマスターと視線を合わせる。

鋭い視線を送るアキラと、細目のまま視線を送るマスター。

二人は視線を合わせたまま動きを止めている。

視線を合わせたままの二人の様子にルーメンとイーリスの表情が曇り始めるが、ナギは表情を変えずに見守っている。

いつまでも続きそうなアキラとマスターのやり取りであるが、その終わりは唐突に訪れた。

「……………分かりました」

アキラは骨が折れたかのようにそれだけ言うかと広げていた本をしまい始め、マスターは満足げにナギを呼びだして何かを耳元で囁いている。

一方、ルーメンとイーリスは突然の出来事に何が起こったのか分からない様子であったが、次第に落ち着いてくるとジワジワとアキラの言葉の意味を感じ始めた。

そして、堪りかねたルーメンが大声を出した。

「やったあああ……………わわわわわわわわ!!！」

また、大音量が響くと思われたが、運よく流れてきた突風に背を伸ばしたルーメンが煽られた。

何人かがこちらに視線を向けるが、すぐに突風に煽られたものだと考え視線を戻していく。

その何とも言えないイーリスは殴る気力も失せたのか、頭を抱えながらルーメンに対しただ一言、注意するだけだった。

「……もう少し、静かにしなさい」

まったくだと言わんばかりの周りの様子を知ってか知らずか、ルーメンはコクコクと何度もうなずく。

しかし、アキラの顔には判断が軽率すぎたと早くも後悔の色が見え隠れしている。

とはいっても、言ってしまった以上は仕方がないのでアキラは二人に自分の調査について説明を始める事にした。

「まず始めに言っておきますが、自分の調査は二人がいつもしているクエストとは違いますからね」

真剣なアキラの言葉に二人とも表情が多少強張る。

二人の表情を見ながら、アキラは一枚の羊皮紙を取り出し調査の概要を書き出し始めた。

「まず、制限時間……正しくは調査時間が普通のクエストよりも長い事です」

通常、ハンターがクエストを受ける際には必ず制限時間が設けられている。

これはハンターが無理をして命を落としたりするを防ぐため、大抵の場合は二日ほどである。

しかし、今回はモンスターの生態調査のためこれには当てはまらない。

「どのくらいですか？」

イーリスが基本的な事を聞いてくる。

確かに、行くとなればそれなりの覚悟が必要である以上、その点はきちんと確認しておきたいのだろう。



そして、アキラは少し考えてから質問に答えた。

「1週間は普通ですね、早い時は4、5日で終わる時もありますが、長い時は1カ月以上調査した事もありますね」

「1カ月!？」

驚きの声をあげたのはルーメンであり、質問したイーリス自身も驚いている様子である。

いくらハンターと言えどこまで長期間、狩りに出る事はまずない。移動を含めればないこともないだろうが、アキラが話しているのは現場に着いてからの話である。

当然ながらそれだけの長期間過ごすとなれば、問題もいくつか出てくる。

「食料とかは大丈夫なんですか？」

その質問をしたのは先ほど同様、イーリスであった。

一週間以上いるとなれば、最初の問題は食料と飲み水である。

現場で取れる食料は限られている上、栄養状の事を考えれば少々きつく、水にしても飲み水に適した水が必ずあるとは限らない。

不安そうなイーリスの質問に答えたのは、アキラではなくナギであった。

「大丈夫よ、3日に一度はギルドから補給が送られるわ」

「あくまで飛行船で運べる量ですけどね」  
補足するようにアキラが付け加える。

ナギが言う様に今回の様な長期間の調査の際には、ギルドから補給物資が供給される。

内容は生鮮食品や飲み水が主で、応急薬や武器の手入れに必要な携帯砥石もそれほど多くはないが補給される。

また、今回の様に火山などの過酷な場所の場合はクーラードリンクなども補給される。

もっとも、アキラが言う様にそれらの物資を運んでくるのは小型の飛行船であり、せいぜいハンター4人分で三日間の量である。

一応、補給の飛行船が来た際に必要なものを頼めなくもないが時間

がかかってしまう。

そのため、補給が難しいものは最初から持っていく必要があるのである。

アキラはそのような注意点を二人に話しながら、調査時の注意点、調査対象のモンスターへの対応など普段の狩りとは異なる点について説明していった。

あらかたの説明を終え、アキラがそろそろ解散させようとした時、ルーメンが手をあげた。

「今回はどのくらいかかるの？」

その質問にアキラは少し悩み、言葉を選びながら答えた。

「行かないと分からないので、今は何とも……すみません」

アキラの答えがモンスターの調査その物の難しさを物語っている。

相手は自然である。行けばからならず目的のモンスターに会えるとは限らない。

一応、ギルドを通しているがこれは調査する場所が狩場と重なっているためである。

自然な状態での観察も調査においては重要であるため、狩りに来たハンターと出くわすと何かと面倒な事になってしまう。

そのため、今のところ狩りの依頼が来ていなかったり、依頼があっても重要性が差し迫った状態でない様な狩場を選び調査しているのである。

礼までして申し訳なさそうに答えるアキラに対し、ルーメンは少し慌てて首を振った。

「別にそこまで謝らなくても……ただ、単に気になっただけですから」

少しテンションを下げ謝るルーメンに対し、アキラは「そうですね」と言い、安心したのか少しだけ笑みを浮かべる。

すると、ルーメンは少し頬を赤くするとそのまま俯うつむいた。

当のアキラは気が付いていない様子であるが、その様子に気づいた

イーリスはため息をつくど、アキラの意識を自分自身に移すため話しかけた。

「では、出発は何時ごろですか？ 私達も準備をしないとイケませんから」

この質問に対しアキラはナギへと視線を向けた。

イーリスもつられナギへと視線を向けると、ナギは「少し待ってください」と言つて腰にあるポーチから一冊の本を取り出し、ペラペラとめくりだす。

そして目的のページを見つけたらしく、フムフムと頷くとパンと小気味の良い音を立て閉じた。

「3日後に、トリニーサ火山付近の狩場なら出来ると思っています」それを聞いたアキラはマスターを見る。

ギルドを通して調査する以上、彼の許可が絶対である。

マスターは細目の内、片方だけ少し開くとアキラ、ナギ、ルーメン、イーリスを見渡し「フム」と唸ると懐から一枚の羊皮紙を取り出し、何やらサインを書きナギに手渡した。

「3日後の正午に砂上船の手配をしました、後はごゆるりと」

そのマスターの言葉を合図に羊皮紙を受け取ったナギは手続きのためカウンターへと戻っていた。

そして、思わぬ形で生態調査に同行する事になったルーメンとイーリスは未だに信じられないと言つた様子である。

「そんなに緊張しなくていいですよ」

そう言いながら、アキラは机の上で広げていた書物を片づけ始めていた。

出発日時が決まった以上、いつまでも資料をまとめたりしているわけにもいかないのである。

そして、手を動かしながらもアキラは二人に話しかける。

「お二人は普段、狩りに出るような感じで準備をしてください」  
そこまで言つてアキラは二人を見た。

ルーメンは徐々に落ち着いて来ているようだが、イーリスはどこか

不安がぬぐえないようだった。

その様子にアキラはやはりといった表情を一瞬見せるが、その直前で二人に背を向けたので隣にいたマスター以外は見る事は出来なかった。

「……大丈夫、いざとなれば自分が何とかしますよ」

「え？」

少し間をおいてアキラの口から出た言葉に、ルーメンが反応する。その語気は今まで話して来たアキラとはどこか違っていた。

当然、その様子はイーリスも感じており、むしろ警戒感を抱かせていた。

そして再び振り返ったアキラは口元に笑みを浮かべていた。

「いざとなれば自分がうまい逃げ方を教えますよ。逃げるのは十八番なので安心してください」

先ほどの語気はどこへやら、今までと同じ口調で放たれた言葉は二人が想像したのとは違ったものであった。

堂々と言い切ったアキラにさしものルーメンも呆気にとられ、イーリスの警戒感もどこかへ飛んでしまった。

その様子に、今までジツと様子を見ていたマスターが大声で笑い出した。

「カア、カツ、カツ！確かに、アキラ殿は逃げるのがうまいですからのぉ〜！」

笑いだしたマスターにアキラも「伊達に調査はしていませんよ」と言つて、軽く笑いだした。

その二人のルーメンも笑みを浮かべ笑いだし、整った顔立ちのイーリスもその口元が笑みを浮かべていた。

それからしばらくは和やかな空気が続いたが、一段落したのを確認したルーメンが口を開いた。

「では、私達はこの辺で失礼します」

イーリスはそう言つて席を立った。

狩りを終えて戻ってきてからずっとここにいたので、そろそろ戻ら

ないといけなかった。

まして、三日後には再び出発するのだ、少しでも休めるうちに休んでいた方がいい。

しかし、そんな考えのイーリスとは違い、ルーメンは顔を膨らませた「ええ、もう少し話していきましょう」

駄々をこねるルーメンにイーリスはため息をつく、ペシッとルーメンの頭を叩いた。

「今の内に休んでおかないと、ウェナートルさんの調査に寝坊するかもしれないわよ」

その言葉に、頭を押さえていたルーメンはすぐに立ち上がり、アキラとマスターにゆっくりと頭を下げた。

「3日後はよろしく願います」

その様に話すルーメンの隣では、イーリスもまた頭を下げていた。すると、二人にあわせアキラも頭を下げる。

「こちらこそ、よろしく願います」

その言葉を受けるとルーメンとイーリスは顔をあげ、軽く会釈して宿場方面につながる酒場の出口へと歩いていった。

そして、アキラは二人が居なくなったのを確認すると机の上に残っている本の片づけを開始した。

「先ほどは、ありがとうございます」

アキラは誰に対してもなく礼を述べながら、山積みの本をいくつかの山に綺麗に分け始めた。

一方、アキラが声を掛けたであろうマスターは面白そうに返す。

「はて？先ほどの話は間違ってはおりませんじゃろ？」

その回答にアキラの手が一瞬止めマスターを見る。

「確かに……そうですね」

それから二人とも終始無言であったが、山のように積まれた本をアキラが紐でまとめ始めるとマスターが何かに気づき一枚の封筒取り出す。

「危なく忘れるとこでしたな」

するとアキラはこれと言った反応もせず、取り出された封筒を躊躇なく受け取り懐へとしまった。

そして、全ての本を纏め終え、風呂敷で6つはありそうな本の山を包むと、アキラは懐を叩きながらマスターの耳元で囁いた。

「もしもの時は……」

アキラの囁きに対し、マスターはピクリと眉を動かしたが何もなかったようにただ頷く。

当のアキラもそれで満足したらしく、何食わぬ顔で風呂敷でまとめた本を背中に背負い、立てかけられていた漁獲モリを持って酒場を後にした。

アキラを見送り、その場に一人残されたマスターはおもむろに短冊を取り出し、一句詠み上げた。

「噴煙の 先に見ゆるは なんじやるな」

## Q u e s t 1 夜の酒場へ出会い（後書き）

### 次回予告

ギルドマスターとナギの策略（？）により、ルーメンとイーリスと共にトリニーサ火山へ調査へと向かう事になったアキラ。しかし、臆することなくアキラはトリニーサ火山での調査を始める。

## Q u e s t 2 調査開始

## Quest 2 調査開始（前書き）

この作品の基本設定について指摘があったので、再び注意書きを書かせていただきます。

この作品は『モンスターハンター3（トライ）』を基本設定に、その他のモンスターハンターシリーズで構成されております。

そのため、一部の設定で違いが（特に3rdで）出ますがご了承ください。



## Quest 2 調査開始

「よいしょっと！」

掛け声とともに荷台から荷物を下ろすと、アキラは大きく息を吐き出した。

この荷物で、今回の調査に始めに持ってきた荷物は全て下ろしたはずである。

大小様々な荷物を確認しながら額ににじむ汗をふき、少しずれた眼鏡を直して轟音と共に火の粉と噴煙を上げる山を見上げた。

トリニーサ火山……海沿いの森に突如としてそびえたつこの火山は大陸でも有数の活火山であり、流れ出す溶岩はすぐ隣の海へと流れ込み水蒸気を噴きあげ、噴煙と共に山を覆っている。

また、周りの森の木々も火山性ガスによって葉が落ちてしまっているが、それでも植物たちは緑を茂らせながら生き続けている。このベースキャンプはトリニーサ火山を見ることができる小高い丘の上あり、火山性ガスにより枯れた木々の枝が針のようになってベースキャンプを覆っていた。

ロックラックからトリニーサ火山に一番近い村を経由して、ベースキャンプに付いたのは夜が明けてすぐであったが、雲と噴煙の切れ目から覗く陽はすでに高く登っている。

しかし、アキラは先ほどからほぼ一定の周期で小規模の噴火を繰り返す火山の情景を見ながら、今回はどのようなモンスターに出会えるのであるとか、とワクワクしていた。

そんな事をアキラが考えていると凜とした声がかげられた。

「ウエナートルさん、この荷物はどうします？」

アキラが振り返ると、降ろした荷物を整理しているイーリスとルーメンの姿があった。

その手には二個の程の木箱があるが、ルーメンは更に大きな箱を持っている。

どうやら、大きな荷物はルーメンが担当して、比較的小さなものはイーリスの担当らしい。

「それはテントの中で邪魔のならないところに、ルーメンさんのは脇にでも置いておいてください」

指示をしつつ、アキラは整理を手伝うためテントの方へと歩みよった。

今回はアキラを含め三人いるという事で荷物がいつも以上になっていたが、その分の人手も増えていたのでまだ良かった。

現に、アキラが荷物を下ろしているうちにルーメン達がそのほとんどを邪魔にならない場所に移しておいてくれたのである。

二人に感謝しながらアキラは、持ってきた回復薬などの薬品類などの道具のチェックを始める事にしたが、ふとある事を思い出した。

「そう言えば……お昼ごろに一度目の出発をしますので、後はそれぞれの準備をしてください」

残りは道具のチェックなのでアキラ一人でもできるので、二人には準備するように言う事にしたのである。

しかし、置いてある荷物を見てルーメンは首をかしげる。

「まだ、結構荷物がありますけど……」

「後は道具をチェックするだけなので自分一人で出来ますし、お二人は今回の様な調査は初めてなのでゆっくり準備してください」

アキラは今後の事を考えて先に準備するように言うとルーメンは嬉しそうに返事をした。

「わっかかりましたあ！」

ピシッと、敬礼しながら出されたルーメンの声にアキラは驚いた。

また、その声の大きいさにはイーリスも多少驚いた様子であったが、すぐに表情を戻し軽く頭を叩いた。

「少しは、落ち着きなさいって言っているでしょ」

「はあ〜い」

頭を叩かれたルーメンは少し不機嫌そうに返事をして自分たちのテントに入って行った。

イーリスはルーメンがテントに入って行ったのを見てそつとアキラに視線を向ける。

その視線にはアキラを何処か警戒している感じがしたが、その感じはすぐに消え、イーリスは一礼してテントに入って行った。

それを確認すると、アキラは気づかれない様にこつそりため息をついた。

と言うのも、今回の調査においてルーメンとイーリスは実質、ギルドマスターとナギの二人の策略によって来ているのである。

無論、本人たちに自覚は無いが……

「いや、ヒュエトスさんは何か感じているみたいだなあ」

ここに来るまでの間、イーリスの視線にきつい物が入っているのアカラは感じていた。

また、ルーメンがここに来るまでに名前と呼ぶようになってからも少々鋭くなった気もする。

そのため、未だにアキラはイーリスの事を名前では呼ぶことは出来ていない。

思わずもれる本音と意思に改めてため息をつきながら、アキラは道具の確認を再開した。

支給された応急薬はもちろん、回復薬に回復薬グレートなどの体力回復系、この火山には毒を使うモンスターは殆どいないらしいが、念のために解毒薬も持って来ていた。

食料は携帯食料に作り置きのごんがり肉、生肉類は補給されるし、いざとなれば手頃なモンスターを狩って手に入れる手もある。また、念のために生命の粉塵や秘薬といった、それなりの回復系のアイテムも持ってきている。

秘薬を除くこれらの道具は3人分なので量は多いが、基本的な道具は全て一緒なのですぐ終わった。

後は各々道具であるが、これは手を付けられないほうがいいだろう。

確認を終え、アキラ自身も調査へ向かうための準備を始めるために、ルーメン達が入ったテントとは別に作った一人用のテントに入っている。

普通の狩りの場合は男女関係なくテント一つであるが今回は調査したことを纏めたり、簡単な研究作業もしたりするのでアキラは専用のテントを持ってきていたのだ。

そして、測定用のメジャーや簡易秤かんいばかり、調査の結果を書くメモなど、いつも最初の調査に向かう際の荷物を纏めながら着替えをしているとテントの外からルーメンの声がした。

「アキラさ〜ん！これ何ですか？」

ルーメンの声にアキラは着替えを手早く終わらせ、準備した荷物が入った袋を持ってテントから出た。

するとそこには、すでにレイアシリーズとガンキンシリーズで、それぞれ身を固めたルーメンとイーリスの姿があった。

「どれですか？」

声を掛けると二人は振り返ったが、それと同時に驚いた様子である。一瞬、アキラも何故驚いたのかわからなかったが、すぐに何に驚いているのかが分かった。

「この格好は意外ですか？」

そう言い、苦笑いしながらアキラは自分の姿を見る。

右腕以外の全身を体に沿って密着し、若草色や黄色で統一したそれは毛皮をなめした物で出来ている。

そして、露出した右腕も首や肘、膝と言った要所部分には何重にも重ね丈夫にした物が使われており最低限の守りは確保されている。

また、頭にはゴーグルが付いているため、ある程度の視界を守る事が出来る。

実は、アキラが身に纏っているのはレザーシリーズと呼ばれる初心者ハンターも良く使う防具であった。

つまり、二人が驚いていたのはアキラがハンターの防具を身に纏っていたからであると、アキラは考えた。

「そんなに驚かないでください。調査とはいえ、さすがに危険ですから身につけているんですよ」

そう語りながらアキラはレザーシリーズに覆われていない露出した

右腕を見せると、そこには包帯が巻かれていた。

それこそ、レザーシリーズが仮にもハンターの防具である以上、あ  
るのとないのとは大きな違いである事を示している。

しかし、二人はアキラの声が聞こえていないのか依然として驚いた  
ままである。

と言うのも二人が驚いた本当の理由はアキラの引き締まった体格で  
あった。

街やキャンプに来て準備をしていたさつきまでは、薄手の長そでと  
ジーパンだったため一般の青年の標準体型のように思っていたのだ  
が、レザーシリーズを纏うアキラの姿はまさにハンターその物と言  
った感じである。

そんな二人の思いも知らず、首をかしげるアキラであるが、二人の  
後ろにある大きな木箱に気がつき指を差した。

「もしかしてそれですか？」

「え、ええ。少なくとも私達のではないのでアキラさんのかと……」  
徐々に慣れてきたのかイリスが頷き、説明する。

アキラはそれだけで納得し、大人が一人は入りそうな木箱に近づくとその蓋を開けた。

すると、ルーメンがまた驚いた様子で声をあげた。

「あ、ランスだ！」

ルーメンの声に頷きながら、アキラは箱の中に横たわる青白く輝く  
槍を手に取ると、手元をいじりながら振った。

すると、槍の中にある機構が作動し槍の先が伸び、柄の部分も若干  
伸びた。

「確か……『ランパート』ですよね」

問い掛けるイリスにアキラは頷き、新品の槍を見上げた。

ランパートは鉄鉱石やマカライト鉱石、アイシスメタルと言った鉱  
石のみで作れるランスの一種で、塔を思わせる槍とその名の由来と  
なった城壁の様な巨大な盾が特徴である。

「この前、凍土の調査を行った際にアイシスメタルがいくつか取れ

たので作ったのですが……以外ですかね？」

苦笑いしながらのアキラの問いにイーリスが不審そうに答える。

「ええ……」

アキラとイーリスの間に微妙な空気が流れるが、そこにルーメンが割って入って来た。

「アキラさんってランスを使うんですね」

「まあ、人並み程度ですけどね」

そう言うと、アキラはランスを水平に構え前へと突き出し、ルーメンもその様子を面白そうにみている。

そんな二人の様子を見ながら、イーリスは探るような視線をアキラに向ける。

防具は初心者用のレザーシリーズであるが、その体格と武器の扱い方、種類から考えると彼はただの生態調査員とは考えづらい。

と言つのも、ランスは盾を含めれば大剣などと同じ重量級の武器である。

槍だけでもそれなりの重量があるが、アキラはそれほどの苦も無く扱っている。

慣れていると考えればそれまでだが、彼が手に持っているランパート手に入れるためにはそれなりの実力が必要である。

ランパートの強化の1つ手前であるナイトランスは鍛冶屋で買う事が出来るが、それはギルドからある程度の実力を認められたハンターしか買う事は出来ない。

しかし、先日様子からマスターが了承しているという事は本当の様であるし、相当の信頼を受けていることから変な輩やかいではないということであろう。

その様にイーリスが色々とアキラについて考えている間も、アキラとルーメンの二人は話を続けている

『……ルーに忠告すべきかしらね』

いくらマスターが了承しているとはいえ、得体のしれない輩アキラにルーを近づけて置くわけにはいけないとイーリスは思わず考えてしまう。

そんな、過保護ともいえるイーリスの心配をよそにルーメンはアキラに声を掛ける。

「ランスって使いにくくありませんか？」

ルーメンの質問に、アキラはランスの基本の型である『突き』をしていた手を止め、少し困った様子で答えた。

「ん……、この世界に入ってからずっとランスだったので何とも言えませんね」

以前に一度、小回りが利いて重量も少ない片手剣を進められた事があつたが、しつくりこなかつた事があつたのを覚えている。

それ以降、体がすでにランスの扱いに慣れてしまっているのだろうと考え、アキラは他の武器に触れる事はなかつた。

実際、困ると言っても狭い所に入るのに少々難儀する程度で、それ以外の事では特別困ることはない。

むしろ、強靱な盾のおかげで突発的な攻撃を防ぎ、生存率を高める事が出来るのでアキラはランスを使い続けている。

ちなみに、本当はドンドルマで使っていた頃の武器の一部を持ってこようと考えていたのだが、それらの荷物を乗せた砂上船がモンスタに襲われ届く事が無くなったため、ロックラックで新調したのがこのランパートである。

アキラはそんな事を話しながら何度か突きの動作をしたのち、納得したのかアキラはランパートを構え直し、手元をいじってランパートの長さを元に戻した。

「これで、武器についての準備は終わりです。お二人は終わりましたか？」

軽く深呼吸をしながら問い掛けてくるアキラに、ルーメンは頷いた。「はい！……とは言っても私の武器はこれしかありませんので」

そう言つてルーメンは、初めて会った時と同じスラッシュアックスを構えて見せた。

全体的に茶色っぽい甲殻が使われ、むき出しの金属性の変形機構部分に赤いラインが入っているそれは『バンカーバスター攻』と呼ば

れるスラッシュアックスである。

アキラがあの後調べたところ、スラッシュアックスの基本であるボーンアックスを砂原に生息する獣竜種である『ボルボロス』の甲殻や爪などで強化のち、イーリスの防具の元であるウラガンキンの甲殻などを使って完成するらしい。

尚、甲殻などをほとんどそのまま使っているため狙いが狂いやすが、スラッシュアックスの中でも有数の攻撃力があるのも特徴である。

また、スラッシュアックスには属性ビンと呼ばれるビンがそれぞれに付いており、攻撃力をあげる強撃ビンや属性攻撃をあげる強属性ビンなどがある。

バンカーバスター攻の場合は麻痺ビンが使われているとのことであるが、これらのビンの効果は『剣モード』でしかその効果を発揮しない。

しかも、他の状態異常効果のある武器同様、状態異常の毒が攻撃のたびに必ず入り込むわけではないので、スラッシュアックス以外の麻痺属性武器を比べると若干見劣りする。

そう言った事を思い出し、アキラは思わず顔をしかめた。

すると、ルーメンは頬を大きく膨らませ、物すごい剣幕で抗議した。「そんな顔しないでくださいよ！仕方がないんですよ、私のハンターランクじゃ作ることのできるスラッシュアックスは限られるんですから！！」

それだけ言うと、ルーメンはプイッとアキラから顔をそむけた。

ルーメンの言う通り、実はスラッシュアックスの種類をそろえられるハンターは限られている。

その複雑な機構のせいには分らないが、現在のところ初期製作可能なスラッシュアックスの約半分は上質な素材が必要とされているため、かなりの実力が無ければその数をそろえる事は出来ないのである。

完全にご機嫌斜めになったルーメンの機嫌を直そうと、アキラはル



ーメンの肩を叩き謝罪の言葉を掛ける。

「い、いや、そう言うわけではなくて……」

その瞬間、『パフツ』とラツパのような音がベースキャンプに響いた。

アキラとルーメンの二人は驚き、慌てて音のした方に目を向ける。その視線の先には、何やら不機嫌な様子のイーリスが、ボウガンの銃口を真上に向けていた。

上に向けられた銃口はまるでラツパの様な形をしており、その下には銃剣の様な嘴が付き銃口からは白煙があがっている。

「イ、イーリス!？」

驚いた様子のルーメンがイーリスの名を呼ぶ。

と言うのもハンターを始めてからイーリスとずっといたが、イーリスが用もなくボウガン撃つ事は無かったのでルーメンは何事かと驚いたのである。

するとイーリスは、ルーメンに声を掛けられるとまるで気がついたかのようにハツとして、次の瞬間から顔がみるみる青くなっていた。

その様子にあキラが少し驚いた様子で声を掛ける。

「あの……大丈夫ですか？」

「は、はい」

アキラの問いかけにイーリスは戸惑いながらも答えた。

そして、何度か深呼吸をすまなそうに理由を話す。

「……少し、緊張していたみたいで、その……ぼーっとしていたみたいです。ごめんなさい!」

誤魔化すように、そう言ってイーリスは頭を下げた。

まさか、ルーメンの肩にあキラが触れた瞬間、頭に血が上ったなどとは言えるわけがない。

イーリスの行動にあキラはどうしたものかと悩んでいると、ルーメンがそつとイーリスに近寄り心配そうに声を掛けた。

「イーリス、本当に大丈夫？」

ルーメンの声にイーリスは顔をあげると、ホッと安心したように優しい笑みを浮かべる。

そして軽くルーメンの頬を撫でた。

「ええ、心配かけてごめんなさい」

そう言うと、イーリスは手に持っていたボウガンを背負い直す。

するとアキラが声を掛けてきた。

「あの……」

「はい？」

首をかしげるイーリスに、アキラはボウガンを指差しながら尋ねた。

「ヒュエトスさんのボウガンは……」

「あ、そう言えば私のボウガンの説明をしていませんでしたね」

アキラの指摘に、イーリスは思い出したようにボウガンを構えて見せる。

その姿は、アキラがドンドルマにいた頃によく見ていたボウガンとはどこか様子が異なっていた。

と言うのも、一般にバレルと呼ばれる部分が他の部分と比べると形状が異なっているのである。

理由はこのボウガンが、銃身に当たるバレル、弾丸の発射機構を備えたフレーム、発射時の衝撃を押さえるストックの三つに分割できるためである。

知っているがこうして改めてみると違和感があるとアキラは感じた。「バレルはトロペクルガン、フレームとストックはポイズンギフトの組み合わせで、重量から言って種類はミドルボウガンですね」「イーリスはボウガンの説明しながら、ポイズンギフトフレームの不気味な皮の部分を撫でる。

フレームとストックを構成するポイズンギフトは凍土に生息する飛竜種のモンスター、『ギギネブラ』の素材から作られている。

ギギネブラは毒による攻撃を主とするため、ポイズンギフトもまた毒弾の運用に長ける設計になっている。

一方、バレルを構成するトロペクルガンは彩鳥と呼ばれる鳥竜種の

モンスター、『クルペッコ』の素材でできている。

そして、先ほどの独特の発砲音や形状は素材元のクルペッコのくちばしを意識して設計されていると考えられる。

「持ってきた弾は何ですか？」

アキラの問いに、イーリスはボウガンを背負い直しながら答える。

「一応、通常攻撃用に通常弾全種類とLv2、3貫通弾、サポート用に回復弾、麻痺弾、睡眠弾のLv1と毒弾はLv2まで持っています」

そう答えるとイーリスは少し残念そうな顔をした。

「どうかしたんですか？」

「一応、先ほどの弾は撃てるのですが、装填数に難があって……」  
アキラの問いに申し訳なさそうに答えながら、イーリスは背負っているボウガンに目をやる。

道具がある程度補給できるとしても使えるボウガンは一組だけなので、どの様なタイプの組み合わせで行くのか悩んでいたのである。  
イーリスは悩んだ末、攻撃重視よりもサポート重視の組み合わせにしたのであった。

しかし、この組み合わせは現在イーリスが持っている中で組み合わせた物なので、先ほどイーリスが説明したように各種類の装填数が少なかったり、麻痺弾や睡眠弾のLv・2が撃てないなどの問題もあった。

「上級者になればもっと汎用性の高い組み合わせが出来るのですが……すみません」

謝るイーリスにアキラは首を振った。

アキラとしてもイーリスのボウガンの様に状態異常サポートの組み合わせに重点を置いてもらった方が良かったのである。

すると、今度は今まで話を聞いていたルーメンが口を挟んだ。

「あれ？そう言えば、いつものアレは？」

「アレ？」

ルーメンの質問にアキラが何かと首をかしげるが、イーリスはアキ

ラを気にせず笑顔でうなづく。

「当然持ってきているわよ」

「あの……アレとは？」

アキラの質問にイーリスは少し意味深げに答えながら、持ってきたもう一つのサポート用の弾丸の名を言った。

「私の奥の手です。あ、減気弾げんきだんも持ってきました」

『減気弾』の名を聞いて、アキラの意識もそちらへと傾く。

この大陸に来て見た種類の弾であるが、その効果にアキラも興味を持っていた。

「それはありがたいですね。実は勝手ながら減気弾も持ってきていたので……」

そう言いながらアキラはポーチから一発の減気弾を取り出して見せた。

すると今度はルーメンが首をかしげた。

「何に使うの？」

ルーメンは減気弾の効果を知っていたが、その効果を得るには1発では無理のほずである。

一方アキラは、そのまま減気弾をしまうと不敵な笑みを浮かべた。

「それは今からすぐに分かりますよ」

「？」

頭にクエスチョンマークを浮かべるルーメンを横目に、アキラは支給品である携帯食料を口に放り込んだ。

乾燥した携帯食料は慣れない人物にとっては食べにくい物であるが、アキラはそのような手つきは見せず、むしろ慣れているという感じである。

口の中の携帯食料を呑み込むとアキラはポーチの蓋を閉じ、ランスを背負い直した上で調査に必要な道具の入った袋を肩にかけると二人に声を掛けた。

「では、行きますか」

「分かりました」

「あ、待つてください！」

アキラの掛け声にイーリスはすぐに従い、ルーメンも慌てて手に荷物を持って二人の後に続いた。

最初にアキラ達はベースキャンプの東側を降りる斜面へと足を向けた。

枯れた木々がトンネル状に枝をはった道を進むと、いくつかの巨木に囲まれた場所に出た。

ここは狩場の地図ではエリア1と表示されており、草の生えたゆるい傾斜とエリアの中央にある朽ち落ちた木の目立つ場所であった。

エリアに入った直後は全員警戒していたが、モンスターの気配は全くなかった。

そのため、どのようなモンスターに会えるか楽しみにしていたアキラにとつて少々残念であった。

「何もいませんね」

なんとも残念そうに言葉を漏らすアキラであったが、それでもエリアの中央まで最低限の警戒しながらアキラはゆっくりと足を進めると、おもむろに腰をおろし地面に手をついた。

その行動に、何かあった際にすぐに行動できるように武器に手を当てていたルーメンとイーリスは少し驚いた。

当のアキラは気にすることもなく手をついた地面を優しく撫でていたが、今度は指を立て軽く土を掘り返したり、叩いたりした。

「どうしたんですか？」

「ちよつと気になりました……」

不思議そうに質問するルーメンに対しアキラは曖昧に答えた。

しばらく土を弄っていたが、何かに納得したらしくアキラは土を元に戻し手に付いた土を払った。

そして、アキラは立ち上がると周囲を見渡す。

ここからエリア3と呼ばれる北につく道の脇には、獣人族でロックラックでも見かけるアイルーが作ったと思われるモニュメント、通称『アイルー地蔵』と呼ばれるものがあった。

それを確認すると、アキラは若干顔を歪めたがそのまま視線を若干下げる。

すると、比較的近くにいくつかの木の实や種が転がっているのがあった。

「えっと、これは……」

アキラはメモを取り出すと落ちている実を一つ一つ確認し始めた。モンスターの位置を確認したり追跡する道具の素材に使われるペイントの実、一時的に攻撃力を高める怪力の種。そして……

「え、龍殺しの実？」

なんと、ボウガンの弾としてつかわれる龍殺しの実が落ちていたのだ。

すると、龍殺しの実を見て驚いているアキラにルーメンが声を掛けた。

「どうかしたんですか？」

「ええ、この様なところに龍殺しの実があったのでつい……」

そう言いながら、気を取り直したアキラはいくつかの龍殺しの実を採取しながら、話しを続ける。

「シュレイドでは、龍殺しの実は野生では火山の山頂付近でしかあまり見ないのでちょっと驚いたんです」

アキラの説明にルーメンは「へえ〜」と感嘆し、イーリスも興味深そうに話を聞いていた。

二人の反応を見て一通りの採取を終えたアキラはある事を思い出した。

それは、シュレイド大陸では龍殺しの実をボウガンの弾の素材としてしか使わないが、この大陸では龍殺しの実を食す事があるという事である。

何でも、龍が嫌う龍殺しの実を食す事により龍への耐性を付けるためらしい。

確かに、この様な平地で比較的簡単に見つけることが出来ればその

ように考えるのもわかる気がする。

そんな事を考えながら採取を終えたアキラはポーチの蓋を締め立ち上がり口を開いた。

「次に移動しましょう」

「もう、ですか？」

「はい。今日中に少なくとも火山帯エリア以外を見て回りたいので驚くイーリスにそう言うと、アキラはここから西側あるエリア2へと続く道へと向かう。

山肌の道に沿って進んでいたアキラ達であったが、しばらくすると少し開けた場所、ちょうど丘の中腹にある広場の様な所にでた。

ここの広場がエリア2とされており、そこそこ広いこのエリアにはケルビと呼ばれる小型モンスターが時折、周囲を警戒しながら草を食んでいた。

広場の外周にはいくつかの倒木があり、特に外に面した倒木は柵の役割をしているようだった。

先ほどと同じ様にアキラは土いじりをしたのちケルビの姿を確認する。

そして少し思案すると、おもむろにイーリスに話しかけた。

「ヒュエトスさん、ここから減気弾であそこにいるケルビを狙えますか？」

アキラの質問に、イーリスはアキラが指さす先にいる一頭のケルビを見た。

現在、アキラ達がいるのはこのエリアに入って少し進んだところで、ケルビはこのエリアのほぼ中央にいた。

イーリスはすぐにケルビとの距離、ボウガンの有効射程、減気弾の特性を頭の中で考え1つの結論を出した。

「有効射程ギリギリですが、出来ますね」

話をしながらイーリスは、アキラから先ほどの減気弾を受け取り装填した。

「お願いします」

「頑張つて、イーリス」

アキラとルーメンの声に静かにうなずくと、イーリスは備え付けのスコープを覗きこんだ。

スコープの倍率を調整しながら、目標であるケルビの姿と動きを確認する。

目標のケルビは角の大きさや耳の形状からオスだということが分かり、ちょうど警戒を解き、草を食み始めていた。

『今なら……』

イーリスはスコープ内の照準を僅かに上にずらすと引き金を引いた。すると、トロペクルガンのバレルから独特の発砲音と共に減気弾が打ち出され、緩やかな放物線を描く。

発砲音に気づいたケルビであったが、その場から動き出すよりも早く減気弾が命中し、ケルビは『キュッ』と力の抜けるような悲鳴をあげ、その場にパタリと倒れた。

ケルビが倒れたのを確認するとイーリスはフウと息をつき、スコープから目を離れた。

何とか命中させ安心するイーリスに、ルーメンが後ろから抱きついた。

「さすがイーリス！お見事！！」

「なんとかだけどね……ありがとう、ルー」

「でも、一発で命中させるなんてお見事ですよ」

ルーメンの称賛にイーリスは謙虚に答えるが、その様子を見ていたアキラも同様に称賛する。

イーリスは恥ずかしそうに頭を下げると、アキラ達は倒れたケルビの元へと向かった。

他にもケルビはいたがそれらは雌で、突然の事に遠く離れた場所からこちらを見ている。

もし他に雄がいれば襲ってきた可能性があるが、いなかったのは幸いであった。

そのまま、倒れたケルビに近づくとアキラは腰をおろし、ケルビの



様子を見る。

減気弾が命中した背中の部分にキズはあるもののそれほど深くはなく、ケルビは気絶しているだけである。

これこそが、減気弾の効果であった。

減気弾はカラ骨【小】の中にモンスターのフンを詰めた物で、命中させるとその強烈な臭いなどでモンスターのスタミナを削り、頭部に当たった場合はハンマーなどの打撃系の武器で攻撃した際と同じ効果をj得る事が出来る弾である。

そして今回のケルビ様な小型モンスターの場合、大型モンスターよりも簡単に気絶状態にする事が出来るのである。

しかし、減気弾は他のボウガンの弾と比べると特殊で、先ほどのような放物線を描く弾道をとるため今回の用な距離で命中させるには慣れが必要である。

そのようなことを考えると、イーリスの腕は決して悪くないということが言えた。

気絶したケルビの様子を確認しながらアキラはメジャーを取り出し、足の大きさや体高、簡易秤<sup>かんいばかり</sup>使つての体重の測定など、一つ一つ調査しメモに書き記していく。

そして大体の計測を終えようとした時、アキラはふと顔をしかめた。「どうかしたんですか？」

声を掛けてきたのは周りを警戒しているルーメンで、アキラは少し考えながら話し始めた。

「トリニ―サ火山では一体だけしか測定していないので何とも言えません、どうもこの大陸のモンスターは若干小さいですね」

「小さい？」

ルーメンは少し驚いた様子で気絶しているケルビを見る。ぱつと見、このケルビは普通のケルビと何ら変わりない。

時折、ケルビが大繁殖した時期に大型のケルビの姿を見ることがあるとルーメンは聞いたことがあるがそれは例外である。

不思議そうにしているルーメンに、アキラは使った道具を少しずつ

片付けながら理由を話し始める。

「以前、モガ村という漁村がある孤島の調査を行ったのですが、その時に調べた何頭かのケルビの体高の平均値もシュレイドのケルビの平均値よりも小さかったんです」

最初は何かの偶然かと思っていたのだが、その後調査に訪れた砂原に生息するケルビもまた同じ様な結果で、今回も一体だけではないが同じ様な結果が出ている。

また、他にもアプトノスやアイルーなどの体高もシュレイドのよりも小さかった。

そのため、この大陸のモンスターはシュレイドにいる同種のモンスターよりも若干ではあるが、小さく進化したのかもしれないと今のところアキラは考えている。

尚、アイルーは野生だけではなくロックラックにいるアイルーにも、マタタビを報酬として手伝ってもらっていたりする。

そのような事を軽く笑いながら話しているうちに、アキラは出していた道具のほとんどをしまっていた。

「あとはこのケルビはどうするの？」

「測定は終わったので、角を少しだけ取ってサンプルにします」  
「気絶したままのケルビを見ながらのルーメンの問いに、アキラはそう言いいハンターが倒したモンスターから素材をはぎ取る際に使う大ぶりのナイフを取り出した。」

そして、アキラは気絶しているケルビの角先にナイフの刃を立てた。ナイフがつき立てられ角はアキラが力を加えると、パキツと言う音を立て簡単に折れた。

一般に薬の材料としてつかわれる『ケルビの角』と呼ばれる角よりは小ぶりであるが、サンプルとしては十分の大きさであった。

ちなみに、この大陸では今回の様に気絶させて、要は生きたままのケルビからとれる『ケルビの角』は殺して取った角よりも薬としての効能が高いとされ。

この事が知れ渡った時期には殺して取られたケルビの角の価格が大

暴落したらしい。

今回の角のサンプルはその点も踏まえての採取であった。

そして全てを終えたアキラは気絶したケルビをそっと抱き起した。

「よし、もう帰っていいよ」

優しく声を掛けながらアキラがケルビの頭を軽く叩くと、ケルビの意識が戻り首を軽く振って、そのまま様子を見ていた雌と共に隣のエリアへとその姿を消す。

「元気でね」

姿を消すケルビに声を掛けながらルーメンが手を振ると、その姿を見てアキラはイーリスに声を掛けた。

「ルーメンさんって、優しいですね」

「ウエナートルさんも優しいじゃないですか、それにルーは普段はやりませんよ」

「え？」

イーリスの言葉にアキラは驚いた。

今のルーメンの様子はごく自然で、いつもしている事の様にアキラには見えたからである。

すると、イーリスは笑みを浮かべ話し始めた。

「きつと、あなたの様子を見ていてしようと思ったのでしょうか」

そう言っつてルーメンを見るイーリスの目は優しくかった。

それは、それだけイーリスがルーメンの事を気にしているということにとてもあった。

「あの子は良い事だと思つた事はすぐに実行するんです。でも悪い所は中々……そこさえ治せればいいんですけどね」

「そうですね」

本音を交えた話しを苦笑して締めくくるイーリスにアキラは同意しながら、手を振り続けるルーメンに声を掛けた。

「ルーメンさん、そろそろ次のエリアに行きますよ」

「はい！」

それから、アキラ達はケルビ達が去ったのとは違う道を選び、エリア4と呼ばれるエリアに向かった。

エリア4は海辺にあり少し離れた場所では、流れ出た溶岩と海水が水蒸気をあげながら死闘を演じていた。

そこにはモンスターのはなく釣りが出来るポイントがあったものの、その調査は後回しにする事にした。

エリア4からは火山の熱気が伝わってくるエリア7に行く洞窟への道と、岩場を登るエリア3に行く二つの道があったがアキラ達は後者を選んだ。

あくまで今日の目的は簡単な調査なので、いきなり熱気渦巻く火山地帯へ入るには早いと考えたのである。

人が一人、通れるような岩場を進んでいくと先ほどのエリア2ほどの広さではないが、開けた場所にでた。

ここにもモンスターの姿はなかったが、アキラの目にある物が止まった。

「アレは……」

アキラはそう呟くとこのエリアの隅に駆け足で向かう。

ルーメンとイーリスがその後が続いていくとそこには、腐敗したモンスターの死体があった。

しかし、腐敗したといっても匂いはなく、すでにミイラ化したものと言えた。

そんなミイラ化した死体にアキラは躊躇なく手を触れ、観察を始めた。

骨はボロボロになり、道具の素材として使うのは無理そうであるが、アキラがこの死体がなんなのか知るには十分であった。

「どうやらアプトノスみたいですね……」

「アプトノス？」

「はい。死体の状況からしておそらくリオレウスにでも襲われたのでしょうか」

リオレウス……リオレイアと対をなすリオスの雄で、雌であるリオ

レイアとは違い空中からの攻撃を得意としており『空の王者』とも呼ばれる飛竜である。

この大陸に渡つてからは見た事はないが、獲物となつたアプトノスの食べられ方が似ていることや前もって調べておいたこの地域に生息するモンスターの種類からアキラはリオレウスと判断した。

その判断にルーメンやイーリスも納得し、表情を引き締める。

「それじゃ、ここにリオレウスが？」

空を見上げながらルーメンはアキラに話しかけるが、アキラは首を振った。

「いえ、それは無いでしょう」

「どうしてですか？」

アキラの判断に驚くルーメンに代わり、イーリスが首をかしげながら質問するとアキラは地図を広げ二人に説明を始めた。

「地図によればこのエリアとエリア4より北は火山地帯で、アプトノスは生息するには環境が厳しすぎます。なので、アプトノスはここよりも南のエリアに生息していると考えられます」

地図を指でさしながら、アキラは比較的安定した環境の土地を好むアプトノスの行動地域を指定する。

「しかし、ここに来るまでのエリアの地面には大型モンスターが狩獵、もしくは行動した形跡はなく、このアプトノスの死体もミイラ化している事からかなり古い物と言う事になります」

「と言う事は……」

ルーメンの呟きにアキラは頷く。

「少なくとも今は、この狩場の周囲にリオレウスはいないでしょう」アキラの話にルーメンは緊張した表情を緩め、イーリスも警戒の程度を落としたようだった。

リオレウスがここにいないという事はアキラにとって少々残念であったが、逆にしばらくはリオレウスに遭遇する事は無いとも言えた。

「じゃあ、ではこれからどうします？」

「そうですね、一応……!!」

今後の方針を問うてきたイーリスにアキラが返事をしようとする、  
『ジジジ……』と言う以前いたシュレイド大陸でも聞いていた音が  
響いてきた。

アキラ達が慌てて音のする方を見ると、火山地帯であるエリア5へ  
と続く岩場の上に人間ほどの大きさの1匹の巨大な虫が飛んでいた。  
薄い膜が高速で動かされることによつて起こる独特の羽音、その羽  
音はこの大陸に来る前からアキラが何度も聞いていたものと同  
じである。

しかし、音を出す主の姿とアキラが漏らした名は違った。

「ブナハブラ!?」

ブナハブラ……この大陸に広くする甲虫種のモンスターの一種で、  
表現するのが難しい特徴的な形をした赤い頭部と紫を基調にしながら  
も地域ごとに色の違う羽が目を引く。

『飛甲虫』とも呼ばれているブナハブラは、攻撃力はさほどないが  
腹部についた針で攻撃する際に麻痺性の神経毒を使って相手の動き  
を封じてくる事がある。

これは、シュレイドのいる甲虫種でブナハブラと同じ尾針びしんあもへ亜目に属  
するランゴスタの性質と同じである。

しかし、ブナハブラの場合は針からは神経毒のほかに、耐火性や耐  
水性などの効果を弱める腐食性の体液を飛ばす事があるという異な  
る性質も持っている。

そして、それらの行動の理由からブナハブラの行動を注意するハン  
ター達は比較的多い。

アキラは落ち着きながらボウガンを構え始めたイーリスに声を掛け  
る。

「ヒュエトスさん、毒弾をお願いします」

ボウガンを構えたイーリスはアキラの意図をくみ取り、素早くLv  
1毒弾を装填すると数歩前にでた。

いくら人間程の大きさでも、自由に飛びまわるブナハブラを狙うに  
はある程度近づかざるを得ない。

当初、ブナハブラは不規則な動きをしていたが、イーリスを確認したのか徐々に近づいてきた。

これをチャンスと見たイーリスは素早く照準を定めると、一気に引き金をひいた。

本日3度目となる特徴的な発砲音と共に打ち出された毒弾はそのままブナハブラに命中し、甲高い悲鳴ともとれる奇声をあげブナハブラは地面に落ちた。

「お見事です…ッ!!」

そう言いながら近づいて来たアキラであったが、突然岩陰から黒い影が現れた。

いきなりの事で驚いたのか、アキラはバランスを崩しその場に尻もちをつく。

黒い影は素早く方向転換して、尻もちをついたアキラに迫るがその間にルーメンが割って入った。

「このっ！」

ルーメンは気合とともに、背負っていたバンカーバスター攻を影めがけ振りかぶった。

折りたたまれていたバンカーバスターは遠心力を利用して柄を伸ばし、斧の刃に当たる部分が先端に音を立てて固定された。

振りかぶられた影はギリギリでバンカーバスターを回避するが、何かが引つ掛かったのか『フニヤッ!』と言う声をあげ地面に転がった。

アキラはすぐに立ち上がると地面に転がった影の正体に視線を向けると、そこには草で編んだと思われる緑色のマスクと、大きな猫の手がついた棒を持った黒い猫が転がっていた。

黒い猫はすぐに起き上がると、顔に付いた土埃を前足で器用にぬぐい始めた。

「やっぱり、メラルーでしたか……」

そう話すアキラの顔はどこか困った様子である。

メラルー……アイルーと同じ獣人族の一種であるが、手癖が悪く先

ほどのアキラの様に相手が転んだ隙にアイテムを盗んでいくモンスタ―である。

幸い、今回はルーメンが割って入ったためアイテムが盗まれる事はなかった。

メラルーをルーメンとアキラが睨んでいると慌てた様子で、イーリスが声を掛けてきた。

「ルー、ウェナートルさん、他にも来たわよ！」

イーリスの声にアキラが視線をずらすと、岩の陰から一匹、また一匹とメラルーが姿を現す。

普通なら隙を見て逃げるのだが、アキラ達の左右は岩場で逃げ道はない。

ベースキャンプへと戻るエリア1への道の前にはメラルー達があり、せいぜいあるとすれば、大人の身長より少し低い程度のエリア5に行くための岩の段差である。

そして、増え続けるメラルーを見てアキラは判断した。

「一旦、エリア5に避難しましょう！」

わざわざブナハブラを仕留めてくれたイーリスには悪いが、今はブナハブラの調査をあきらめ逃げる事を優先することにした。

そのアキラの判断にルーメンとイーリスは頷き、アイルーをけん制しながらじりじりと後退する。

そして、アキラが昇ったのを確認し終わると、背を向けて素早く武器をしまい、段差に手を掛け一気に段差を上った。

メラルー達も後を追ってくるが、さすがにこの段差を登るのは難しい様で鳴き声だけが聞こえてくる。

「どうしますアキラさん？」

ひとまず安心したのか、ルーメンが軽く息を切らしながら問いかけると、アキラは地図を広げた。

この道の先にあるエリア5は火山地帯で、ベースキャンプに戻るにはエリア6から7を通るルートと直接7に行くルート、火山の中腹にあるエリア8を通り7に出る3つのルートがある。



「とりあえず、エリア5、7を通る最短ルートでエリア4に出ましよう。しばらくはあそこを通るのは難しいでしょうし」

「そうですね。あの様子ですとしばらくは動きそつにありませんし

……」

アキラの案にイーリスも同意、ルーメンも頷きかけるが、ある事を思い出した。

「あ、私クーラードリンク持ってきていないよ」

ルーメンの言葉にイーリスも自分が持ってきていないのに気づいた。火山地帯は溶岩による熱気に覆われており、何も対策をしないで近づけば体力を大きく減らされてしまう。

そのため、ハンターだけではなく火山地帯に近づく人々は皆、クーラードリンクと呼ばれる一種の薬を飲む。

クーラードリンクを飲むとヒト本来の冷却機能が活性化し、一定時間であるが火山地帯での体力の減少を押さえてくれるのだ。

今回も、最短ルートといえど結構な距離があるため、クーラードリンク無しで渡るのは少々つらいと言える状況であった。

すると、困るルーメンとイーリスの前に乳白色の液体が入った二本のビンが置かれた。

二人は驚いて顔をあげると、別のビンを取り出すアキラの姿があり、視線を感じたのが二人の方を向き、口を開いた。

「クーラードリンクだったら、多めに持ってきているので一人に一つくらいなら自分のを上げますよ」

アキラはそう言うとり取り出したビンを開け、一気に中身を飲みこんだ。

そんなアキラと手元のクーラードリンクを見比べながら、イーリスは確認する様に質問した。

「いいんですか？」

質問してきたイーリスの隣ではルーメンが、クーラードリンクを飲むべきかどうか悩んでいる。

「はい。この様な事もたまにあるので準備していたんです。

そう言うと、アキラは申し訳なさそうに話を続けた。

「本当はキャンプを出る前に言うべきだったのですが……」

本格的な調査の際は何らかの対策を準備するのだが、今回の様な下見の際は予定外のルートを通る事も多々ある。

そのため、今回の様な事は消して珍しくはないので持ってくるように促すつもりだったのだが、ついつい忘れていた。

そのため、アキラは持てるだけ持ってきたクーラードリンクを差し出したのである。

理由を聞いた二人は礼を言って、クーラードリンクに口にした。

二人がクーラードリンクを飲み干すのを確認すると声を掛けた。

「では、帰りましょう」

アキラの言葉に二人はピンを片づけ顔き、エリア5へと足を進めた。それからアキラ達は、日が暮れて少ししたのち、無事にベースキャンプに付いたのであった。

## Quest 2 調査開始（後書き）

知っている方々にはこんにちは、知らない人にははじめまして。

先週より『MONSTER ECOLOGIST 新たなる大地と生命』火の国の住人達』の投稿を始めた三ノ城と言います。

今回の話までは書き終わっていたので、スムーズに来ましたが残り4話分（予定）がまだなので今後は不定期の更新となります。

3rdの発売と就活の関係で、ものすごく遅くなる可能性大ですがご了承ください。

それにしても昨日（22日）出た3rdのOPムービー……いい意味でモンハンじゃなくなっていますね。

3のOPはモンスターの生態系を現していましたが、今回は2ndG同様ハンター視点……やはりモンハンはいいです。

尚、更新の際は活動報告または小説紹介部分で報告させていただきます。

感想やコメントもお待ちしておりますので、今後もなにとぞよろしくお願いします。

最後はどうでもいい一言と次回予告です。

3rdのPV（特に3つめ）でのランスの扱いがひどすぎる！

### 次回予告

調査を初めて数日後、突然アキラは一人で調査を行うとルーメンとイリスに告げた。

その理由とは……

### Quest 3 目指すは火の国

### Quest 3 目指すは火の国

注意しなければ感じられない様な軽い揺れが机を揺らし、机の上にあるガラス管や機材がカラカラと音を立てる。

その揺れと音にアキラは物書きをしていた手を止め、少しだけ困惑した様子でその原因に目を向けた。

明り取り用に作られた窓からは煌々とした光と共に爆音が響き、地面を揺らしながらマグマを天高くへと飛ばしている火口が少し見える。

ここ、トリニーサ火山に来て早くも半月が過ぎようとしていた。

ギルドが指定している狩場の調査は一通り終わり、ここ2、3日は火山帯に生息するモンスターの生態調査に重点を置き始めていた。

そしてアキラはちょうどその調査内容を纏めていたのだが、噴火のたびに起こる揺れに気を逸らされている。

普段なら気にするような揺れではないのだが、集中する作業をしている時となれば話は別であった。

アキラが眼鏡をはずし思わずため息を漏らすと、テントの外からルーメンの声がした。

「アキラさ〜ん！晩御飯の準備できましたよ〜！」

「はい、今行きます」

返事を返すとアキラは机の上を簡単に片づけ、一冊のノートを持って外に出た。

外に出るとトリニーサ火山の大きな姿と赤く染まった月が目に入る。視線を下ろすとベースキャンプの広場のちょうど真ん中でイーリスが鍋で料理をしており、ルーメンはその周りで食器を出すなどの手伝いをしていた。

「手伝いますか？」

「いえ、アキラさんは座っててください！」

アキラが手伝おうと声を掛けるが、ルーメンは大丈夫だからと座る

ように促す。

ルーメンの言葉にアキラは頷くと、鍋を囲むように置かれた丸太に腰を掛けた。

そこにルーメンが日持ちのいい乾パンを持ってくる。

「はい。アキラさんの分です」

「ありがとうございます」

礼を述べて乾パンを受け取るとアキラは持ってきたノートを思い出して、二人に聞こえるように声を掛けた。

「いきなりですが明日の調査は自分一人で行きますね」

アキラのいきなりの発言に二人は手を止めた。

ぐつぐつと鍋が煮える音がしばらくその場に流れるが、すぐにルーメンの驚いた様な声が響いた。

「え！一人で、調査……ですか？」

半月の調査でルーメンの反応に慣れ始めたアキラは普通にうなずく。一方、イーリスは少し驚いた様子で一度は顔を向けたもののすぐに手元にある鍋に視線を戻した。

こちらにも、どうやらアキラのいきなりの言いだしに慣れ始めた様である。

また、普段の狩りとは異なり基本的に昼間に調査をして夜に帰ってくることの多い調査では街と同じとはいかないものの、そこそこ凝った料理が作ることが出来た。

最初のころは三人が交代で作っていたのだが、アキラの場合は調査をまとめたりするので忙しく、普段の狩場の食事とあまり変わらず、ルーメンに至っては備蓄していた食料の3分の一が灰と化した。

そのため、普段より余裕が断然あり、それなりに料理が出来るイーリスが自然と食事当番になっていた。

むしろ、一度作り始めると出来る限りの料理を作っていることから、料理自体はイーリス本人も楽しんでいるらしい。

「なんでまた……」

未だに驚いているルーメンの様子に、アキラは少し困った様子でテ

ントから持ってきたノートを開いた。

これはトリニーサ火山にきてから付けているノートで狩場である各エリアの地形はもちろん、どのエリアでどのようなものが取れ、どのようなモンスターが現れるのかが纏められているものであった。

「狩場で行ける所の調査はある程度の成果が出たので少し奥地に入ろうと思いましたが……」

そう言いながら、アキラはノートに視線を向けて明日のルートの考察を始める。

一方、ルーメンは何か納得したのかおもむろに立ち上がり、胸を叩いた。

「だったら、私達も行きますよ！」

『ね!』と言ってルーメンはイーリスを見る。

その時、イーリスは味見をしていたが、すぐに二人を見て少し思案して頷いた。

「まあ、アキラさんが良ければですけど……」

そう言いながら、イーリスは鍋の中身を3人分の器に取り分け始めた。

ちなみに今日のメニューは、前もって持ってきておいたアプトノスの肉と近くで取れた怪力の種、その他補給時に来た薬草などを入れた『アプトノスの肉の薬膳煮込み』である。

「一人で行くのも理由があるのですよね」

アキラに薬膳煮込みを差し出しながらイーリスは問いかけた。

「ええ、狩場と違い数人で行くのは逆に危険かもしれないので……」  
イーリスから薬膳煮込みを受け取り、アキラは頷いた。

予定では火口付近まで行くのだ、狩場でも行ける道はあるがアキラはそことは別のルートで行くつもりであり、モンスターの有無とは別の意味で安全性は保証できない。

「それに明日はギルドの補給が来る日ですので……今回は注文したい事があるので、誰かが残ってもらった方がいいので」

明日は数日に一度のギルドからの補給日で、今回は先ほどまで書い

ていた調査結果の途中報告や次の補給の際に持ってきてほしいものをまとめたリストがあった。

また、こちらからの連絡だけではなく、ギルド側からの緊急の連絡が来る可能性もあるので補給の日はだれか残るか、遠出をしない様にしていた。

「明日以降にしたら？」

そう言ってきたのはルーメンで、さっそく「いただきます」と言って薬膳煮込みに箸をつけている。

アキラも一応、手を合わせいただきますと云ったがすぐには箸を付けなかった。

「何となくなんですけど、出来るだけ早い方がいい気がするんです」

「ぼっいふ……」

「ルー、ちゃんと飲み込んでからしゃべりなさい！」

アプトノスの肉をしゃぶりながらしゃべるルーメンと、それを一括するイーリスを見ながらアキラは苦笑しながら話し始めた。

「あくまで勘なんですけどね」

そこでアキラは一旦話すのを止め、旨みがたっぷりと染み出した薬膳煮込みのスープに口を付けた。

アプトノスの肉から出た肉汁と様々な薬草や種から出た旨みがうまくまとまっており、イーリスの料理の腕の良さを改めて感じる。

アキラはスープを飲み込み、一息つくと話を開した。

「ただ、この手の勘はあまりはずしたことがないので……」

いままで、アキラがこの様な時に感じてきて来た事は、良くも悪くも必ず何かしらの出来事につながってきていた。

そして今回も『明日、出かければ何か起きる』と感じていた。

一方、アキラの話聞いていたルーメンはその話をどこか納得いかない様子で聞いていたが、イーリスの方は何となくわかったらしい。

「どのくらいで戻ってきますか？」

椀と箸を置いて当然のことの様に尋ねるイーリスに、ルーメンは驚いたのか薬膳煮込みで咽むせた。

「大丈夫ですか!？」

いきなり咽たルーメンにアキラは気にかけて、イーリスもその背をそつとさする。

「コホツ……な、何とか……」

息は少し荒いものの咳も落ち着いたので確認すると、アキラは顎に手を当てイーリスの返答を少し考える。

「……道のりの関係もあるので確実にはいえませんが、大体一日から二日ほどですかね。もし、途中で無理そうでしたら戻ってきます」「分かりました。では、必要な事を纏めておいて……」

「私も行くっ!」

いつものごとく響いたルーメンの大声に、イーリスは「またか」と頭を抱え大きくため息をついた。

「ルー、アキラさんは一人で行くって言っているでしょ」

「でも、何かあるかわからないよ!」

ルーメンは頬を膨らませ、ブンブンと腕を縦に振る。

しかし、その点に付いてはアキラがサラリと流す。

「何かあってもうまくやり過ぎしますよ」

「でも……」

「万が一の時は救援用の狼煙を上げますから安心してください」

安心するように笑顔で話すアキラにルーメンはしばらく唸っていたが、イーリスのきびしい顔とアキラの笑みに負け、ついにあきらめた。

「うう……分かった」

ルーメンの回答に思わず、安堵のアキラは息をつく。

確かに、何もなければアキラも二人の同行を……いや、むしろ何かと理由を付け必ず来るように言っただろう。

本当はルーメンの意思を尊重したいのだが、イーリスの事を考えれば流石に連れて行くわけにはいかなかった。

案の定、イーリスの様子を横目で見るとアキラと同様、息をついていた。



しかし、その表情に少しだけ憐れんだ様子が見て取れる。

それはアキラにとって意外であったが、イーリスもイーリスなりに悩んでいたのだろうと区切る事にした。

「頼み事についてはこの後、まとめて持っていけますね」

「分かりました」

そのまま、アキラとイーリスが明日の事に付いて話し始めると、ルーメンは自分の腕に残っていた薬膳煮込みを食べ、そのまま肩を落としてテントの中へと入って行った。

「アキラさん？」

イーリスの声にアキラはルーメンに気を取られていたのがわかった。アキラは頭を掻きながら謝る。

「すみません」

そこで、二人の会話に一呼吸の間が空くがすぐにアキラが口を開いた。

「……やっぱり明後日にしますか？」

「でもアキラさんは……」

「別に複数人で行くことは構わないですし、ルーメンさんが……ね」  
さすがにあのルーメンの様子を見るとアキラの心が揺らぎ始めた。それになりゆきとはいえ、せつかくアキラの調査に同行したのだ。出来れば狩場ではなかなか見れない色々なところを見せたいという気持ちだが、最近のアキラにはあった。

アキラの心遣いにイーリスは少し悩む様子を見せ、何かを思いついたのかと思うと首を横に振った。

「……いえ、明日の朝に行ってください」

イーリスとしてもルーメンの気持ちが分からないわけでもないが、さすがにアキラの調査を邪魔するわけにはいかなかった。

明日は必ず誰かがここに残り、ギルドの輸送員と合わなければならぬのである。

静かではあったがはっきりとしたイーリスの言葉に、アキラはゆっくりと頭を下げた。

「……分かりました」

そう言つとアキラは立ち上がり、明日必要になるであろうものを纏めるため自分のテントへと足を進める。

すると、イーリスが少し慌てた様子で声を掛けてきた。

「あと、出かけるなら日が昇る前がいいと思います。まだ、あの子は寝ていると思いますし……」

最後の方はかすれてあまり聞こえなかったが、イーリスの助言に感謝しアキラは肩越しではあるが改めて頭を下げた。

そして翌朝、アキラは日が昇る前にベースキャンプを出た。

さすがにルーメンと顔を合わせる気分にはなれず、イーリスの助言通りに荷物を纏めてベースキャンプを出発したのである。

しかし、それでも心の中ではやはり昨日のルーメンの事が気になっていた。

『帰つたら謝つたほうがいいですかね……』

そんなことを思いながら、アキラは地図で改めて現在位置と予定のルートを確認する。

現在アキラがいるのはベースキャンプからエリア1に向かう道の途中で、予定ではエリア3から5に向かう途中で道をそれて火山の火口に向かう予定である。

途中で道をそれるとは言つても、ここ最近の調査でこの火山の大体の位置感覚はつかめているので極端に迷うことはないだろ。

まして、火口までとなればこの様な調査をそれなり続けているアラにとつて特別難しい事ではない。

確認を終えるとアキラは地図をたたみ、一度だけベースキャンプを見ると軽く礼をして歩み始めた。

ベースキャンプを出てすぐのエリア1は何の問題もなく通り抜け、アキラはエリア3を通りかかると足を止めた。

と言つのも、この前に寄つた後も何度かこのエリアを訪れているが、毎回と言つてほしいほどメラルーの姿を確認していた。

実際、気を付けながら岩陰からエリア内を確認すると数匹のメラルーの姿がみえる。

アキラは一度岩陰に身を隠すと、持ってきた荷物の中から一本の棒を取り出し状態を確認する。

長さは50センチ程で持ち手とは反対側の部分は金網状になっており、着火装置が仕込まれていた。

「よしっ！」

問題がない事を確認したアキラは頷くと、棒を片手に岩陰からゆっくりと前に出た。

すると一番近いメラルーがアキラに気が付いたのか、喜ぶような鳴き声をあげながらジャンプした。

この行動に他のメラルーの視線が集まり、最初のメラルーがこちらに四本で駆け寄って来る。

それを確認すると、アキラは手に持った棒の着火装置に手を当て着火した。

着火した炎は金網内にある油に引火して炎が勢いよく燃え上がるが、すぐに金網から漏れ出るほどの程度の大きさに落ち着く。

そして、アキラは近づいてくるメラルーを無視してそのまま炎をあげる棒、すなわち『たいまつ』を片手にその場に仁王立ちになった。傍から見ればこの状況でのアキラの行動はおかしなものであっただろう。

しかし、アキラの荷物を狙い足元まで駆け寄ってきたメラルーは二本足で立ちあがると、嬉しそうに左右にステップを始めた。

その行動はそのメラルーに限らず、エリアにいた他のメラルー達も近くまで来ると同じ様にステップを取り始める。

機嫌が良くなってきたのかメラルー達は『ニヤ〜、ニヤッ！』と嬉しそうに鳴き声をあげ、アキラを囲むようにステップを取りはじめた。

その様子は祭りの際に人々が踊る様子に似ており、アキラの頬も思わずゆるむ。

この大陸の小型モンスターには人の持つ炎に反応するモンスターがあり、たいまつを持っていただけで近寄らないものもいれば、逆に積極的に近づいてくるモンスターもいる。

そしてメラルーや近縁種のアイルー等は、たいまつをみるとこの様に嬉しそうに踊りだすのである。

「あはっ！可愛いですね！」

「わっ、おっとおっ！！」

突然後ろから響いた声に、アキラは驚き思わず手からたいまつを落としかけるが何とか落とさずに済んだ。

アキラの大声にメラルー達は一瞬驚いたようであるが、すぐに気を取り直してステップを踏み始める。

しかし、声を掛けられた当のアキラ本人は深呼吸をして呼吸を整えている。

そして、呼吸を整えたアキラは声を掛けた人物の顔を想像しながら後ろに振り返った。

「ル、ルーメンさん!？」

驚きを隠さないアキラに、ルーメンは頭を掻きながら「アハハハ：

…」と笑みを見せる。

「すみません、ついできちゃいました」

「ついてきちゃいました。って……」

ルーメンの言葉にアキラは呆れるような視線を向ける。

昨日のことを考え出てきたのだが、まさかルーメン本人がこうしてやってくるとは思っていなかった。

そんなアキラの心境を読み取ってか、ルーメンが少し申し訳なさそうに口を開いた。

「実は昨日のイーリスとの話を聞いて……」

その言葉にアキラは肺が空になる程のため息をつく。

昨日の話聞いたのなら断る理由は無いが、それとは別の重要な問題があった。

「ヒュエトスさんにはちゃんと言ったんですか？」

いくらベースキャンプとはいえ、いきなり誰かが居なくなれば誰でも慌てるだろう。

まして、ルーメンに対して敏感なイーリスの事となれば更にひどい事になりそうである。

アキラの質問にルーメンは少し悩みながら答えた。

「えーっと……置き手紙だけ……」

ルーメンのセリフにアキラは沈黙した。

二人が無言になると、遠くで響く噴火の音とメラルーの声だけがその場に響く事になった。

「……ハア」

ルーメンにあつて3度目のため息をつく、アキラは歩き出した。

「あつ、アキ……」

ルーメンが慌ててアキラの名を呼ぼうとすると、アキラは一度足を止め振り返った。

「行きますよ、早くしないとたいまつのおいが切れます」

それだけ言うとアキラは再び歩き出した。

アキラの言葉にルーメンは一瞬驚いたが、すぐにアキラの後に続いて歩き出す。

そんな二人の後ろをメラルーは二本足で追いかけてくるが、追いついても物を盗もうとはせずステップを踏むだけであった。

そして二人がエリア5に続く段差を登り終わると前回同様、メラルー達も追いかけるのを止めアキラもそのことを確認するとたいまつを消した。

するとルーメンが不思議そうにアキラに声を掛けた。

「アキラさん、何でメラルーはたいまつを付けていると物を盗まないんですか？」

ルーメンもメラルーとたいまつの関係は聞いていたが、実際に見るのはこれが初めてだった。

この問いにアキラは少し悩んで口を開いた。

「まだはつきりとは分かっていますので何とも……ただ、私的な

見解でもよければ聞きます?」

「はいっ!」

嬉しそうに頷くルーメンに、アキラは少しだけ口元を緩める。

「推測ですが、おそらく獣人種にとって炎は特別なものだからだと思えます」

「特別なもの?」

周囲に気を付けながらアキラは頷く。

「ええ、あの反応はメラルーだけではなくアイルーもしますので…  
彼らにとって炎は爆薬を利用する際には必須のものですしね」

更にアキラは同じ獣人種に当たる奇面族である『チャチャブー』を例としてあげた。

奇面族とはその名の通り奇怪な面をかぶった獣人種で、アイルーやメラルーに比べると凶暴で好戦的な種族である。

一応、この大陸にもいるらしいがアキラは今のところ狩場でその姿を見たことはなかった。

そして、その奇面族には『キングチャチャブー』と呼ばれる人間社会で言う王<sup>リーダー</sup>がおり、その証としてお面に肉焼き機を付けているのだ。

「このお面は炎も使うことが出来るので、それも力の証なのかもしれません。まあ、見た目だけの可能性も否定出来ませんけどね……」

恥ずかしそうに頭を掻くアキラであったが、ルーメンはいつもの様に興味を持った視線を向けていた。

そして何故か自信を持って言い切った。

「アキラさんがそう言うなら、きつとそうですよ!」

「ハハハ、それは理由になっていませんよ。それに、この手の研究は専門外ですし……」

「そうなんですか?」

笑いながら答えるアキラにルーメンは驚いた。

その様子を見てアキラは笑うのを止めて頷く。

「ええ、自分は……っと!」

「!?!?」

アキラが突然立ち止まったので、ルーメンは背負っているバンカーバスター攻の柄に手を掛ける。

そこはちよつどエリア5に入る直前で、モンスターが全くいないわけでもない場所であった。

しかし、アキラは落ち着いた様子でももむろに今歩いている道の脇を指差した。

「今回はここから頂上を目指します」

「えっ、ここからですか？」

「はい」

アキラが指さした道の脇には僅かに窪みがあり、それはいわゆる獣道であった。

驚いているルーメンに気かけながら、アキラは近くにある木の枝にピンク色の紐を巻きつけはじめるとルーメンが再び声を掛けた。

「何をしているんですか？」

「それに何かあった時のための目印ですよ、これをたどればすぐに戻れますしね」

そう言つてアキラはピンク色に染まった紐の束を見せる。

これはアキラ手製の目印用の紐で、染料にはハンターがモンスターの追跡の際に使う『ペイントの実』を利用している。

ペイントの実を利用すると本来は強い匂いも発するが、乾燥させて匂いを出るだけ抑えるとともに脱色を防ぐ加工をして色だけを利する様に工夫していた。

「匂いがあると敏感になるモンスターもいますからね」

「へえ〜」

感心するルーメンに対し、アキラは少し笑みを浮かべながらクーラードリンクを2本手に取った。

「少し早いです、クーラードリンクを飲んでおいてください」

「あ、今回はちゃんと持つてきましたよ！」

アキラの指摘に、ルーメンは自分のポーチからクーラードリンクを取り出す。

最初の一件以降、ルーメンやイーリスもベースキャンプから出る際はクーラードリンクを常備するようにしていた。

クーラードリンクを持ってきていたことに感心しながら、アキラはクーラードリンクを飲みほし残った一本をポーチにしまっ。

そして、ルーメンがクーラードリンクを飲んだのを確認するとアキラは獣道に足を踏み入れた。

「ちゃんと後に付いて来てくださいね」

「はいっ！」

いつもの元気なルーメン返事にアキラは少し口元を緩め歩き始める。今回アキラが考えた道のりはエリア5を大きく迂回して山頂を目指す道のりで、あくまで予測であるが正午過ぎには山頂に着けると考えていた。

しかし、これはあくまで何も障害がなければの話である。

そして案の定、獣道に入りしばらくすると溶岩の川が現れた。

「うわぁ……どうします？」

クーラードリンクを飲んでいても、近づくだけでも体力を奪う熱気にルーメンが顔を思わずゆがめる。

アキラは顎に手を当て周囲を見渡す。

近くには渡れそうな場所は無く、この溶岩の川を上流まで歩いて行くしかないようだ。

「仕方ありません。しばらく上流に向かって歩きましょう」

アキラはそう言って近くにあった木に目印の紐を結びつけ、再び歩き出した。

うまく渡れる場所があるかどうか心配であったが、上流を目指し歩き始めると少しして開けた広場の様な場所が見えてきた。

広さは迂回しているエリア5よりも少し狭い程度で、岩の様な障害物は何もないようだ。

しかし、その周囲には赤く煮えたぎる溶岩が池の様に広がっており熱気に包まれていた。

「相変わらず、あつついですね……」



確かに、最近火山で活動しているとはいえこの熱気に慣れるのはそう簡単ではない。

「まあ、洞窟でない分ましですけどね」  
率直なルーメンの言葉にアキラは苦笑いを浮かべた。

洞窟の場合、溶岩から発せられる熱は逃げることなく洞窟内に閉じ込められてしまったためこの様な平地よりも気温が上がってしまう。そのため場所によっては『炎天』と呼ばれる、クーラードリンクの効果時間が短くなってしまふような場所もあったりする。

もっとも、この場所ならばそのような事を心配することないといえた。

アキラとルーメンが広場に近づくと、そこに先客がいるのが見えた。その姿に二人は広場の入口にある岩陰に身をひそめる。

「アキラさん……」

「ウロコトルですね」

岩に隠れながらアキラは再び広場を覗きこむ。

そこには赤い体色で首と尻尾の長い四足の小型モンスター『ウロコトル』が3頭ほど居た。

ウロコトル……この大陸の火山地帯に生息するモンスターで『溶岩獣』と呼ばれており、イチヨウの様に広がっている嘴が特徴である。小型モンスターに属しているが、ウロコトルの体長は平均で7メートルほどもある。

またウロコトルは多くの小型モンスター同様に群れを作り、主に大型モンスターの食べ残しに群がってあさる腐肉食動物である。スカベンジャー

しかも、その食事の仕方は特徴的な嘴を使ってわずかな肉片ですら食してしまうため『火山の掃除屋』とも呼ばれていたりする。

普段の動きはそれほど俊敏ではないが、特徴的な嘴を使いその身を地面（溶岩）に潜らせた後となると話は別である。

潜った後は一気に飛び出して空中にいるブナハブラに直接食いついたり、火炎液を吐き出して仕留めたりするなど自力で狩りをすることもある。

ウロコトルの知識を掘り起こし、アキラは考え始めた。

普段なら無視するのだが、この広場の広さやウロコトルの数、そして何より山頂へ目指す道を探している現状を考えると無視しづらい。しばらく悩んでいると、アキラの代わりに警戒していたルーメンが静かに声をあげた。

「アキラさん、あそこから登れませんか？」

ルーメンの指摘にアキラが顔をのぞかせると、少々傾斜はきついが一人が登れそうな場所が広場の奥に見えた。

確実とは言えないが、あの位置なら山頂を目指す事は可能な可能性がある。

そして再びウロコトルに目を向けた。

3頭いるウロコトルの内、一番手前の1頭は上半身を地上に出している状態である。

それを見てアキラは決心したらしく、背負っていた荷物を下ろしランプの柄に手を添えた。

「少々可哀そうですが、ウロコトルを倒しましょう」

アキラの言葉にルーメンは視線を合わせ静かに頷く。

そして、アキラが頷き返すとルーメンは岩陰から飛び出し、一番手前のウロコトルに駆け寄る。

当然、ウロコトルはルーメンのこの動きに気づき嘴をカタカタと打ち鳴らし始めた。

この嘴の打ち鳴らしには複数のパターンがあり、威嚇や周囲の仲間とのコミュニケーションに使うとされている。

実際、この音に残ったウロコトルは反応しルーメンに気づいた。

しかし、ルーメンはその時にはウロコトルを己の獲物スラッシュアップクスの間合いにとらえていた。

ルーメンはバンカーバスター攻を取り出すと同時に、ウロコトルの首元めがけその刃を叩きつける。

遠心力が加わって固定された斧の刃がウロコトルに叩きつけられ血が出るが、それほど深くは食い込めなかった。

そして今度はウロコトルが首を大きくのけぞらせ始めると、ルーメンはサイドステップでその場から離れる。

するとウロコトルの口からオレンジ色の粘液の塊、火炎液が吐き出されルーメンの居た場所を通り地面にベチャリと落ちた。

この火炎液はウロコトルが地中に潜った際に溶岩を取りこんだものとされており、その熱は決して侮れない。

ルーメンは一度ウロコトルから離れたが、すぐに近づき先ほどの傷の近くに踏み込みと共に斧を突き入れる。

しかし、この一撃もあまり深くは入らなかったがルーメンは構わなかった。

突き入れたのを引き抜くと、すぐに先ほどとほぼ同じ場所に刃を深く食い込ませる。

しつかり食い込んだ事を確認し、ルーメンはバンカーバスター攻の持ち方をわずかに変えると身を僅かに沈めた。

「やあああっ！」

低い姿勢から声をあげながら全身をバネにして一気にバンカーバスター攻を振り上げた。

するとバンカーバスター攻が食い込んだままのウロコトルは、まるで一本釣りされたかのように地面から悲鳴のような鳴き声をあげ引きずり出される。

そのまま空中へ放り出されるが途中で食い込んでいた刃が抜け、今度はバンカーバスター攻の重量がルーメンの腕に押し掛かるうとす

る。しかし、ルーメンは振り上げの時に伸びきった全身を利用ししっかりとその重量を受け止めた。

一方、放り出されたウロコトルは地面にそのまま叩きつけられ様と

していた。

「トドメッ！」  
そこにルーメンが受け止め終えたバンカーバスター攻に再び力を入れ、斧モードで最も破壊力のある振り下ろしに派生させた一撃がウ

ロコトルの頭をとらえた。

次の瞬間、ウロコトルは頭から地面に叩きつけられると同時に振り下ろされたバンカーバスター攻により打ち砕かれ血をまき散らした。ルーメンが息を突こうとしたが、アキラの声がそれを許さなかった。「ルーメンさん！よけて！」

咄嗟にその場からサイドステップで動くが、突然襲った衝撃にバランスを崩しそのまま地面を転がる。

ルーメンが顔をあげると、1頭のウロコトルが地面にドスンと着地していた。

おそらく、先ほどルーメンが1頭目のウロコトルと戦っていた間に地中に潜り奇襲を掛けてきたのだろう。

着地したウロコトルはルーメンに狙いを定め近づいてくるが、隙だらけの横腹をアキラは見逃さなかった。

「お前はこつちだ！」

抜刀と共に突き出されたランパートはウロコトルの脇腹に突き刺さった。

その一撃にウロコトルはアキラに標的を変えるが、その行動は遅くアキラは引き抜いたランパートを再びに突き込む。

アキラが気を引いているうちにルーメンは起き上がり、残った1頭のウロコトルを探す。

すると、残った1頭はウロコトルと対峙しているアキラに向かっているのが見えた。

「アキラさん！」

アキラに注意を促しつつ、ルーメンは武器を構えたまま駆けだす。武器をしまっている時程早くは無いが、ウロコトルの地上での動きを考えればまだ充分であった。

一方、ルーメンの注意にアキラは攻撃を止めバックステップで一旦、間合いの距離を取る。

相手に反撃の態勢を整えられてしまつが、下手に横から奇襲を食らうよりはマシである。

アキラが移動したことにより、アキラを目指していたウロコトルは一度動きを止めアキラに体を向けようとするが、その体を鈍い一撃が襲う。

ウロコトルが衝撃を受けた方に視線を向けた先には、バンカーバスター攻を突き入れたルーメンがいた。

「あなたは……こつち！」

ルーメンはそう叫び突き入れたバンカーバスター攻を引き抜き、円を描いて振りかぶるが同時に柄をねじって回転させた。

すると斧の刃が手元まで降り、峰だった部分が回転し新たな刃が現れ斧の刃と刃が繋がって大剣の様な剣に変わりウロコトルを切り裂く。

更にルーメンが刃を返して素早く切り上げるとウロコトルが僅かにひるんだ。

これこそ威力は若干下がるものの、手数を増やせる剣モードの利点である。

しかも今度は内蔵されたピンから刃に麻痺毒が伝わたらしく、僅かに麻痺毒が散るのが確認できた。

もつとも、この一撃は目的の位置から僅かのそれ威力は弱まってしまっているが、ルーメンには気にはしない。

剣モードにした事により、次の攻撃の派生が速くなったルーメンは振り上げたバンカーバスターを受け止め腰を引いた。

「これでっ！」

ルーメンの掛け声に合わせるかの如く、バンカーバスター攻の刀身の中央部が口の様を開いた。

そして、ルーメンはバンカーバスター攻の刃を上に向け、挟り込ませるようにウロコトルの胸元を貫く。

同時に開いた刀身から光が漏れだし、バンカーバスター攻を小刻みに揺らし更に奥へと刃を食い込ませていった。

徐々に揺れは大きくなり、どんどん刃を食い込んでいき後はトドメの一撃を食らわせるだけである。

『もう少し……ッ!?』

手ごたえを感じていたルーメンであったが、何かに気づきルーメンは突然その刃を引き抜く。

すると、ウロコトルはまるで糸が切れた操り人形のようにバタリとその場に倒れた。

ピクリとも動かないウロコトルは刃が中ほどまで食い込んだ時点で、すでに事切れていたのである。

「本当は最後までやりたかったんだけど……ごめんね」

ルーメンはスラッシュユアックスが繰り出せる最大の一撃『属性解放』を放つつもりであった。

しかし、以前に同じ様な状況で勢いに任せ属性解放を放った際、アキラに『死んだ者に対しての攻撃はただの残忍な行為でしかない』と注意されたのである。

それは当然のことと言えば当然であるが、なぜかルーメンにはその事を話すアキラがもの凄く後悔しているように感じたのだった。

それ以来、ルーメンは属性解放で攻撃する際には特に気を付けていたのである。

その様子を横目で見ていたアキラは何かを考える表情を浮かべるが、すぐに正面のウロコトルに視線を向ける。

ルーメンと3頭目のウロコトルが戦っている間にも数回突きを入れていたが、こちらのウロコトルはまだ生きていた。

これはバンカーバスター攻とランパートの攻撃力に差があるためであるが、傷口から流れ出る血の量からウロコトルの余命はそれほどないようである。

しかし、ウロコトルは力を振り絞るように鳴き声をあげるとアキラに飛びかかった。

弱っているのか普段よりも勢いのない飛び掛かりであるが、アキラの3倍以上ある体躯である以上その威力は甘くは無い。

飛びかかるウロコトルの体長からアキラはバックステップでの回避は危険と判断し、サイドステップでその場からよける。

アキラがよけた場所にウロコトルは着地し、そのまま首をアキラの方に向けてその視界にアキラをとらえることは無かった。

ウロコトルが振り向いた瞬間、アキラはランパートを薙払いウロコトルの首の骨を砕いたのだ。

ただし、たった一撃でこの様な事が出来るわけはなく。

数回にわたって首の近くを刺していたからこそ出来たのである。

アキラはランパートに異常がないことを確かめると、僅かにずれた眼鏡を直しながらルーメンに声を掛けた。

「さっきの攻撃、大丈夫でしたか？」

「はい、ワールドに少し傷が付きましたが大丈夫です」

ルーメンはそう言って金属部分の若干へこんだレイアワールドを見せる。

確かに、この程度の損傷ならばまだ問題は無いだろうとアキラは判断し、横たわるウロコトルに視線を向け近寄った

そして、こちらの勝手な理由で殺してしまった事を詫びつつ、その体長や足の大きさを丁寧に測り始める。

ただ単に殺すよりもこうして生態の記録を残す事が、身勝手ではあるがハンターではない自分なりのモンスターへの礼儀だとアキラは思っていた。

測定を終えると最後に彼らの鱗を一枚ずつ剥ぎ取り、調査用のポーチへとしまいルーメンに声を掛ける。

「ルーメンさん、行きしよう」

「はい」

ずっとアキラの様子を見ていた、ルーメンは頷いて先ほど見つけた場所に近づき登れそうかを確認し始めた。

アキラも斜面の状態を確認しつつその表面の様子をメモしていく。観察していくと斜面には何かが流れて居た様な窪みがあり、それからここにはかつて溶岩が流れていたのであろうと考えられた。

また、ここを溶岩が流れていたのであればここを登れば少なくとも火口に行ける可能性があることも示していた。

その事を喜びつつアキラは少しのぼったルーメンに声を掛ける。

「ルーメンさん、そちらはどうですか？」

アキラの問いかけに、ルーメンは何かを気にする様子で降りてきた。「私は大丈夫ですけど、アキラさんはあの荷物で大丈夫ですか？」

そう言つてルーメンはアキラが背負う荷物を指差した。

アキラの荷物は見た目が大きいのはもちろん、以前ルーメンが興味本位で担いた時は予想外の重さによるめいたくらいである。

しかし、ルーメンの心配をよそにアキラは軽い笑みを浮かべ首を振つた。

「大丈夫ですよ、以前はこれを背負つて『フラヒヤ山脈』と呼ばれる雪山に上ったこともありますから」

それに、とアキラはルーメンの様子をジッと見る。

その行動にルーメンは驚き、一瞬だけ顔を赤らめたがすぐに赤いのは消えた。

「これからが本番なのでバテないでくださいよ」

アキラはルーメンの顔の事には気づかず、肩を叩いてそう言い荷物を背負い直して斜面を登り始めた。

そしてそのあとをルーメンが慌てて追いかける。

「ちよ、待つてくださいよ〜！」

### 約3時間後

アキラ達はハンターどころかモンスターですら歩まないような所を歩いていた。

狩場では多くのハンターが歩いているため自然と道が出来るが、ここは獣道すら無く本当の道なき道と言える場所である。

この先にはどんな未開の地が待ち受けているのだろうと、アキラが思わず考えだすと後ろから疲れた様子の声が掛けられた。

「アキラさ〜ん……本当にここ歩いて大丈夫ですか〜？」

振り返ればそこには、アキラが心配した通りへバリ始めたルーメン



がいた。

「岩盤がしっかりしていますから大丈夫ですよ」

内心でため息を吐きつつそう答えるとアキラは周囲に気を配った。しっかりしているとはいえ、近くには内部に熱を帯びた岩盤などの亀裂から赤い光が見えており、一歩誤って亀裂から隙間に落ちればただでは済まないだろう。

そのようなことが脳裏に浮かびアキラが改めて振り返ると、先ほどまでの元気がどこかえやっただルーマンが近くの岩に腰をおろしていた。

その様子にアキラは近寄り声を掛ける。

「ここで待っていますか？」

「いえっ！行きます！」

ルーマンは大きな声で答えるが、その顔はかなりつらそうである。

「……少し休みましょう」

少し悩んでから、アキラはそう言うのと近くの冷えた岩に荷物を下ろし、腰にあるポーチから携帯食料を取り出し口に放り込んだ。

空腹と言うわけではなかったが、登り始めてからルーマンとの会話がなかなか続かないので気まずかった。

こういう時になると、アキラとルーマンを何気無くつなぐイーリスの有難さを改めて感じた。

「イーリスもくれればよかったのに……」

その言葉を漏らすルーマンの視線はベースキャンプの方を向いていた。

ルーマンがどの様なことを意図していったのかわからないが、同じ様な事を考えていたので思わず考え込んでしまう。

しかし、ここまでできた以上イーリスのことを悔いても仕方がなかった。

考えをふっ切るため頭を振り、アキラはこの先の道を見上げる。

最初の斜面は少しきつかったものの、その後は比較的平坦な道のにだいぶ良かった。

しかし、1時間ほど前から傾斜がきつくなり、現在はかなりの傾斜がつきここから先は崖の様な斜面である。

それでもよくよく見れば50メートルほど大きな岩が見えており、アキラの勘ではあの先が目的地のはずと訴えた。

アキラは深呼吸すると荷物を背負い直し、休んでいるルーメンに声を掛ける。

「あの岩の奥が目的地のはずですから頑張らしましょう」

「ほ、本当ですかあ……」

今まで気を張っていたはずのルーメンの口調からついに疲れの色が見え、アキラは僅かに躊躇するが言ってしまった以上は仕方がない。

「はい」

確証は無いが自分の勘を信じてアキラはそう言い切り、荷物を持って急斜面を登り始める。

アキラが昇り始めてからしばらくルーメンは様子を見ていたが、アキラが岩との中間点に差しかかると登り始めた。

途中、足場が滑りそうになったが何とか耐えアキラが言っていた岩の所まで登り切ったが、その目に映ったのは岩だらけの下り坂が見えるだけである。

その瞬間、ルーメンの肩から力が抜け落ちたがその肩をアキラが叩いた。

「到着しましたよ」

その声にルーメンが驚いて振り返ると笑みを浮かべるアキラがいた。そしてアキラがそのままルーメンの視界から外れる。

一瞬、急な光で視界が白くなり目を庇うが徐々に目が慣れてきて視界が広がって来た。

「わあ……」

ルーメンの視界に飛び込んだ光景にルーメンは思わず息を漏らす。目の前には何百、何千年にわたり噴火と共に煌々とマグマの光を吐き続けてきたであろう火口があった。

噴煙により日の光がほとんど届かないこの地の光源となっている溶

岩で満ちた火口は美しくもあり、雄大であり、そしてどこか恐ろしかった。

その火口から漏れ出る溶岩は川を作り、これまた何百年という単位でその流れを変えてきたのであろう。

視線をあげるとかろつじて山のふもとに僅かに緑の残る森林が見えた。

目の前に広がる光景に呆然とするルーメンの隣で、アキラがどこか嬉しそうに口を開いた。

「狙い通りですね」

その声にルーメンがアキラに視線を向けると双眼鏡を覗くアキラがいた。

「何がですか？」

「あそこを見てください」

「？」

ルーメンの質問にアキラは双眼鏡を差し出してある場所を指差した。不思議に思いつつルーメンがアキラの指す場所を双眼鏡でのぞくとそこはちょうど火口内側の壁面だった。

煌々と照らす火口の壁面の一角、そこには丁度棚状の場所があり横穴と繋がっていた。

そして棚状になっている場所で複数の影が動いている。

「あれって……」

「はい、ウロコトルの群れです」

遠くてその姿はよく見えなかったが、アキラの指摘にルーメンの頭の中に先ほどまで戦っていた姿が思い浮かんだ。

ルーメンはしばらくウロコトルを見ていたがある事に気づいた。

「あそこつてもしかして巢ですか？」

「はい。ちょうどあそこはエリア10……この狩場のウロコトルの巢に当たる場所です」

多分ですけどね、とアキラは続けるがおそらくアキラの言っていることは間違いないだろう。

エリア10と呼ばれるエリアは火山の火口内にあるエリアで、火薬岩いわと呼ばれる少しの衝撃で爆発する岩が取れる。

そしてこのエリアにはウロコトルの巣があり、常に2〜3頭ほどのウロコトルの姿があった。

当然ながらここに調査に来た三日後にアキラ達は訪れていた。

「この前、行った時から遠くから見たいと思っていたので……」

「だからここに？」

「はい」

驚くルーメンにアキラはしっかりと頷いた。

エリア10を訪れた際に調査をしながらアキラはエリア位置関係をきちんと記録し、今の場所を目指したのである。

アキラは周囲を一通り観測すると、持ってきた荷物から長距離観測用の機材を取り出し組み立て始めた。

これから観察の間ルーメンは暇になるであろうが、そこは一緒に手伝ってもらうか周囲の警戒をしてもらえばいいだろう。

そう思いながらアキラはふと比較的近くの斜面に視線を向けた。

「あれは……」

「どうかしたんですか？」

アキラの声に双眼鏡で周りを見ていたルーメンが声を掛けてきた。

「すみません。あれって、ウラガンキンですよね？」

「えっ!?!」

その指摘にルーメンはアキラが見ていた方向に視線を向ける。

そこはちょうどアキラ達がいる場所から見て左手の場所で、ちょうどルーメン達が登って来た方向であった。

そしてルーメンはアキラの指摘したモンスターの姿をとらえた。

「そうですね、ウラガンキンです」

離れていても火口からの光で鈍く光る体表と特徴的な顎を見れば一度見たことのあるハンターならばまず見間違える事は無かった。

ウラガンキン……この大陸の火山地帯に生息し、火山の生態系でも上位に君臨する獣竜種のモンスターである。

幼少期は植物を主に食すが成長するにつれ自身の顎を溶岩でコーティングしていき、コーティングした顎で岩石を割って鉱物を食すようになる。

そのため、顎の立派なウラガンキンの雄はもてるらしい。ちなみにこの顎には体のバランスを取る効果もあるという学者もいる。

性格は比較的攻撃的であるという者もいるが、他のウラガンキンが姿を現すとすぐに移動する性質を持っておりアキラにはよくわからない正確である。

また、体表には爆発性の高い岩石を纏っており、ハンターと敵対した際には攻撃手段として飛ばしてやることもある。

アキラはルーメンに確認してから一通りのウラガンキンの事を整理するとある事を思い出した。

というのもアキラ自身はこの岩石について非常に面白いと思っていたのである。

この爆発性の高い岩石は本来は比較的普通の岩石で、ウラガンキンらが寝床として好む場所からにじみ出る液状油を利用し身につけるのである。

そして、ウラガンキンは食した岩石をエネルギー分解した際に出る排気ガスを利用し、身につけた岩石をエネルギーしやすいようにしているらしい。

尚、排気ガスは可燃性が強い上に睡眠効果があり、怒り時は自信の体温上昇により小規模の爆発を起こす。

この点については仕組みこそ違うものの、以前いた大陸の飛竜種の一つで火山に住む鎧竜こと『グラビモス』によく似ていた。

そのためアキラはウラガンキンに出会えたらその点についての調査もしたいと思っていた。

しかし、今回の目的が違う上、準備もしていないために諦めざるを得ない。

もっともウラガンキンはこちらの存在には気づいていないようで、

周囲をきよるきよると見渡しつつ自慢の顎で砕く必要のない手頃な岩を食していた。

するとウラガンキンの様子を見ていたルーメンが首をかしげる。

「でも、なんか前に見たウラガンキンよりもきれいですね？」

「そうなんですか？」

「はい。なんと言うかキラキラしているというか……」

ルーメンの指摘にアキラはある事に気づき準備をしていた機材を使い慌ててウラガンキンを確認する。

ウラガンキンその物を見るのは初めてであるが、その体色は確かに聞いていたものより煌びやかであった。

「ああ……もしかしたら、雄なのかもしれませんね」

「え！？あのウラガンキンは雄なんですか？」

「今が繁殖期ならの話ですけどね……調べるのを忘れたのが痛いです」

そう言うってアキラは悔しそうに肩を落とす。

繁殖期の雄のウラガンキンは雌へのアピールのため、普段よりも硬く綺麗な鉱石を食してつやを良くしたり、その身に輝度の高い鉱石や宝石を身に纏ったりする。

しかし、今回は各モンスターの繁殖期の有無の調査を行っていないかったのである。

「本来なら繁殖期はモンスターが過敏になるので必ず調査するんですけどね……」

初歩的なミスをしたことを悔やむアキラがそう漏らしているとウラガンキンが動き出した。

ウラガンキンは周囲をしばらく見渡すとそのまま麓の方へと頭を向ける。

そして、体をタイヤの様に丸め一気に下って行った。

最初は二人とも何気なく見ていたが、アキラがある事に気づいき慌てて物をしまいだした。

「アキラさん？」

「……戻りましょう」

ここまで来て置いていきなり戻るというアキラの発言にルーメンは驚きを隠せなかった。

「え、でも……」

「今、ウラガンキンが下って行った先は自分達が登って来た方向です」

広げただけの機材はアキラが説明しているうちにみるみる片付けられていく。

「下手をすれば遭遇する可能性もあるかもしれ無いので、若干遠回りですがここからエリア8を目指します」

「でも、調査は……」

「また機会を見て行います」

すでにアキラは今回の調査を諦めたらしく、ルーメンの問いにもきっぱりと答えた。

一応、大型モンスターと遭遇した際の対策はあるが、いると分かっているのんびりしている程の余裕はない。

そのまま荷物をまとめ終わるとアキラは位置を確認して、ウラガンキンが下って行った方向とは逆方向へとルーメンと共に予定よりも早い下山をすることにした。

帰路の変更はウロコトルと戦闘した広場から登った後の平坦な場所で行い、その後は溶岩の流れに沿う様に下った。

しかし、登るときと違い下りでは何度か行き止まりに会いなかなか進めなかった。

途中でルーメンが再びへばり始めたものの、偶然にもハンターが歩いたと思われる痕跡を発見し何とかエリア8に付くことに成功した。エリア8はトリニーサ火山の中腹よりも山頂よりの位置にあり、真っ赤に燃える溶岩の上で冷え固まった場所である。

山頂へと続く道の脇には溶岩の池があり、麓を見下ろせる崖からは冷え固まりきれなかった溶岩が流れ落ちるのが見ることが出来た。

ここにもモンスターは姿を現すが、今回いたのは比較のおとなしい

モンスターであるアイルーだった。

アイルーはメラルーと同じ獣人種であるが、危害を与えなければこちらに害をおよぼすようなことはない。

そのため、ただ通り抜けるだけのアキラ達にとってはある意味、無駄に気を使う必要のない相手であった。

その所為か左右に大きく広がるよう溶岩の池を見て、ルーメンは安堵の息を漏らす。

「何とかここまで来ましたね」

「ええ、ほんとハンターの歩いた跡を見つけた時はラッキーでした」アキラもルーメンにつられ思わず胸をなでおろす。

実際、痕跡を見つけられなければ野宿しなければならなかったのだ。一人ならまだいいが、ルーメンが居るとなればイーリスに変な心配をさせてしまいそうである。

噴煙でよく見えない空を見上げると、噴煙の隙間からわずかに星が見えた。

ここに来るまでに夜になった事は気づいていたが、こうして星を確認すると出来るだけ早く帰らねばとの意識が生まれる。

『さあ、急ぎましょう』

アキラがルーメンに話しかけようとした時、エリア内の空気が変わった。

と言うのも、今まで遠くで普通に歩いていたアイルー達が伏せて警戒を始めたのである。

その事にはルーメンも気づき、背負っていたバンカーバスター攻を構えた。

アキラもまたランパートこそ構えないが、対である盾をしつかりと握る。

二人が居るのはエリア8から山頂へ続くエリア9へ向かう道の途中で、ちょうど溶岩の池に挟まれる位置であった。

その事に気づいたアキラがまずいと思った時、エリア5へ繋がる道の横にある溶岩が大きく動く。



そして、まるで水から飛び出すかのように一体のモンスターがその姿を一瞬だけ現した。

その姿に、ルーメンは息をのみアキラは思わず『しまった』と内心で毒づく。

僅か一瞬であったが、アキラ達はそのモンスターの視線が自分たちを捉えたことに気づいたのである。

そしてモンスターは溶岩から顔を出し、こちらにゆっくりと歩き始めた。

足を進める度に体表についた溶岩がポタポタと音を立てて落ちるが全く気にせず、そのままアキラ達のゆく手をふさぐかのように進路の前に立ちふさがった。

その姿はアキラとルーメンの二人は知って……いや、今日の午前中に相手をしていたウロコトルに似ていた。

四肢が生えた細長い首と胴体に続くヒレのついた長い尻尾、頭先端には戈ほこの様な特徴的な嘴がついている。

しかし、それ以外は違った。

30メートルはあろうかと言う巨体は全身を溶岩に覆われ鮮やかに輝き、ウロコトルでは目立たない背びれが後頭部から尻尾の付け根にかけて生えている。

また、特徴的な嘴からは僅かに牙が見え、四肢に備わる爪は鋭く尖っている。

そして、嘴の付け根には煌々と燃える溶岩とは正反対の澄んだ青い目があった。

「……アグナコトル」

深呼吸をするようにアキラが目の前に立つモンスターの名を述べる。すると、まるで呼応するかのようにモンスターは全身をしならせ甲高い咆哮を響かせた。

アグナコトル

その名は火山の生態系の頂点に君臨する者の名で、古い言葉で『炎の蛇』の意味があると言われている。

### Quest 3 目指すは火の国（後書き）

更新遅れてしまい申し訳ございません。

3rdも一段落して勢いをつけて書き始めたら、あれもこれもと増えていき予定よりも約3割増しになってしまいました。

でも、とりあえずですが本作品のメインモンスターであるアグナコトルが出せたのでまだよかったです。

実はこの作品を書こうと思った最大の理由がコイツの存在だったりするw

ちなみにウロコやガンキン関係の説明は公式のものですが、獣人族の炎への興味は個人的な想像、アグナの名前の由来は『インドの女神であるアグニとナワトル語で蛇を意味するコアトルから』と言う公式ではないネット上の情報を弄ったものなのでご注意下さい（公式で全モンスターの名前の由来出ないかな？）

モンスターの名前関連でもうひとネタですが、先日たまたまウィキでヒグマの項目を見ていたら学名がとあるモンスターにそっくり…  
…お前本当はウサギじゃなくてヒグマだったのか？

予定では残り3話ですが今回のように増えた場合（今回はぎりぎり分割しませんでした）は2分割するやもしれません。

しかし、今後は他作品の更新等で次回の更新予定も未定ですのでご了承ください。

では、次回予告とどうでもいい話です。

据え置きのもンハンと携帯機のもンハンは別物と自分の中では区切っていますが一言言わせて下さい。

何で3rdだとアグナの動きが遅いんだろう……

次回予告

アキラとルーメンの前に立ちはだかる炎戈竜『アグナコトル』  
火山の生態系の頂点に君臨するモンスターを相手にアキラ達はど  
うするのか……

Q u e s t 4 大山、鳴動す（仮）

## Quest 4 燃えさかるものとブルカーノそこは炎獄

時系列が少し戻りアキラ達が下山を始める前、ベースキャンプではイーリスがギルドと荷物のやり取りの詰め段階を行っていた。

「では、次回の補給は四日後になります」

「ありがとうございます」

荷物を持ってきたギルドの管理者に礼を述べるイーリスであるが、その表情にはどこか焦りの色が見えている。

しかし、イーリスは何事もない様に補給物資の配達を終えたギルドの配達員の飛行船が、飛び立つまでの様子を見ていた。

飛行船とはいつてもあくまで気球に推進用の帆とプロペラ、それに操舵用の帆を付けた物で乗組員は操舵員や見張り員が数人で、場合によっては城塞弓撃隊シリーズ身を包んだ護衛が乗る場合もある。

とはいっても場所が空の上である以上、あくまでボウガンを使う事が出来る者に限られる話であるが……

今回は物資の輸送を優先したため乗組員は最低限の様で、彼らはきびきびと飛行の準備を始めていた。

そして飛行船に火がともされると徐々に飛行船はその高度を上げ始める。

飛行船がある一定高度に上昇すると、操舵員は船体の下部にたたんでいた推進と操舵用の帆を展開し始めた。

少し黒ずんだ帆が展開されるとともに飛行船は徐々に風に流され始めるが、同時にプロペラを駆動させ本来の進路へと飛行船を動かしてゆく。

その様子をイーリスが見ていると一人の乗組員が手を大きく振り始め大声を上げた。

「調査、頑張ってくださいーい！」

乗組員の声にイーリスも一瞬、驚いたがすぐに手を小さく振って答える。

するとそれを合図にしたかのようになり、飛行船はプロペラの回転数を一気に上げロッキラックへの帰路についた。

しばらく飛行船を追って空を見上げていたイーリスであったが、その姿が見えなくなるとすぐにテントに入った。

そして、回復薬や携帯食料、万が一に備え閃光玉やこやし玉などを用意していた道具ポーチアイテムを手取る。

更にイーリスはそれとは別のもう一つのポーチにも手を伸ばした。

これはガンナーポーチと呼ばれるものでガンナーなら皆持っているポーチである。

大きさはそれほど大きくはないが、ボウガンの弾丸を整理しやすいようになつており、普通のポーチの半分程の弾丸を入れることが出来る物であった。

「ルーつたら……」

各種ポーチの中身を確認したイーリスから思わず本音が漏れる。

その口調は先ほどまでギルドの相手をしていたのとは打って変わってきつかった。

今朝起きてみれば隣にいるはずのルーメンはおらず、アキラを追うと一言だけ書いてあった一枚の書置きがあっただけである。

実は昨日のルーメンの様子からもし声を掛けられれば一言、二言の注意を言つて許可するつもりであった。

しかし、実際は声もかけずに出て行く結果となっており、イーリスは複雑な心境であった。

最後に愛用するボウガンと防具ガンキンシリーズの確認を終えると、イーリスはテントから出て噴煙を上げる火山を見上げた。

『あの子の事だからきつとウェナートルさんとすぐに合流したはず……』

そうイーリスが考えていると火口にわずかな明かりと噴煙とは違つた色のついた煙の筋が見えた。

「あれは、確か帰るときの合図……」

アキラ特製の信号用の狼煙を思い出しイーリスはほつと息をついた

が、すぐに気を引き締めた。

昨日の話では帰路に付くのは早くても夕方頃だと言っていたが、今はまだ昼を過ぎてそれほど経ってはいない。

この気難の狼煙はおそらく何らかの問題があったためであるのだろうが、普段の狩りと違いアキラ達がどこにいるのかわからないため合流するのは難しい状況である。

イーリスはしばし悩むとエリアーへと向かう道へと足を向けた。

『ウエナートルさんの話なら向う途中に目印を付けて行くと話していたから、最初の目印の所に行けば……』

はやる気持ちを抑えつつ、イーリスは周囲に十分な注意を払いながらアキラとルーメンが残したであろう目印を指す事にした。

それから約8時間後……

僅かに熱気が漂ってくる中、イーリスは愛用のポイズンギフトを構えジツと座っていた。

ここに付いてすでにだいぶ時間が立ち、その周囲には原形をとどめていない数匹のブナハブラの死骸が転がっている。

そして、ジツと座るイーリスの隣の木の枝にはピンク色の紐が巻き付けてあり、それはアキラが山に登る際に目印にしたものであった。アキラの話聞いていたイーリスはこの目印を見つけて以降、この場に留まり続け時折姿を現すブナハブラを追い払うか、逃げない場合は殺していた。

無論、殺した死骸はそのままにするわけでもなく、羽をきちんと剥ぎ取っておいてある。

本当は甲殻などもあった方がいいのだが、かさばるため諦めていた。「……遅いわね」

そう言っつて、イーリスは何気なく剥ぎ取った『飛甲虫の羽』の模様を見る。

ブナハブラの羽は生息域によって違うが、同じ場所でも個体差で僅

かに違うので暇な時に眺めるのは何気に好きであった。

光の当たり具合で僅かに変わる色や模様を楽しむイーリスであったが、不意に流れてくる気配が変わったのを感じた。

「何？」

イーリスは羽をしまいポイズンギフトを構える。

背後は緩い坂道で、道も狭いため大型モンスターがここに来る可能性は低く、襲ってくると思えばブナハブラ程度である。

しかし、流れてきた気配はその程度ではなく、危険なものだといーリスは感じていた。

その時、遠くから甲高い鳴き声が響いてきた

「アグナコトル！？」

一度だけ対峙したことのあるモンスターの名を呟いた、イーリスの耳に続いて地響きと別のモンスターの鳴き声……いや、断末魔が聞こえた。

イーリスは現在、モンスターの位置を特定できる『千里眼の薬』やその系統のスキルを持っていない。

それでも、その気配や音を感じられると言う事はそう遠くない場所

……おそらくエリア5に居ると言うことである。

「……………」

しばらく気配を窺っていたイーリスであったが、おもむろにエリア5への道を歩き始めた。

アグナコトルは危険な相手であり、イーリスとてまともに戦う気はない。

しかし、万が一ルーメンやアキラが何かの間違いでアグナコトルとかち合うのを懸念したのである。

イーリスはそのままエリア5を指し、その直前でポイズンギフトにピンク色にマーキングされた弾を装填した。

これは『ペイント弾』と呼ばれるもので『カラの実』に『ペイントの実』を入れたボウガンの弾である。

これが目標に命中するとペイントの実が飛び散り、強力な臭いを発



して大まかな位置を特定することが出来る。

とりあえずアグナコトルを確認し、すぐにペイント弾を撃ち込めばルーメンとアキラにアグナコトルの位置を伝えることが出来る。

イーリス自身もある程度近づぐことになるが、打ち込んですぐに引けば大丈夫のはずである。

そう考えてイーリスは慎重にエリア5に入ったが、そこにアグナコトルの姿は無かった。

エリア5はトリニーサ火山の裾野の一角にある場所である。

一見すれば広場であるが、実際は巨大な洞窟の入り口で天井付近は常に噴煙で覆われている。

広場と言っても中央付近には冷え固まった溶岩の柱が2本立っており、北側のエリア7、8、西側のエリア6、そしてイーリスが今来たエリア3方面以外は溶岩によって囲まれていた。

このエリアは柱が邪魔になるものこそそこそこ広く動きやすい場所である。

しかし、実際は柱と周囲にある溶岩の関係で、その広さをうまく利用できないのが残念である。

「いない……」

そんなエリアをイーリスは警戒しつつエリアを見渡すが、アグナコトルの姿どころか気配すら感じられない。

そして、警戒を続けるイーリスはウロコトルが数頭ある場所に群がっているのを見つけた。

イーリスは距離を取って、ポイズンギフトのスコープを覗き込む。

すると、そこにはウロコトルに啄まれる一体のモンスターが転がっていた。

全身を甲殻で覆われ、ウロコトルが群がっているモンスターの名はリノプロスであった。

リノプロス……この大陸の砂漠や火山などの乾燥地帯でよく見かける草食竜で、全身を固い甲殻で覆い身を守っている。

大きさは子供のアプトノス程度であるが、気性は荒く縄張りに一度

でも足を踏み込めばハンターを簡単に吹き飛ばす突進をしてくる。しかし、視力は明暗が分かる程度で良いとは言えず、音を頼りに攻撃するのでハンターがジツとしているとあらぬ方向へ突進し、岩や大木に当たって軽い脳震盪のうしんとうを起こしたりする。

そのため以前、たまたまりノプロスの群れと遭遇した際に、アキラがたいまつを使ってりノプロスを引いて手頃な岩に誘導して脳震盪を起こさせてその間に移動したこともあった。

もともと、軽い脳震盪で済むのはりノプロスの甲殻、特に頭殻がそれだけ強固であることも示していた。

狩りやすいアプトノスが近くで生息していることが多いことも関係しているのだろうが、リオレイアやリオレウスがりノプロスを捕食対象とすることはまずない。

そのようなりノプロスであるが、有一の天敵がアグナコトルである。りノプロスの甲殻は確かに強力であるが、腹部と尻尾にはほとんどない。

そのため、アグナコトルは地中からりノプロスの弱点である腹部に攻撃を加え仕留めるのである。

目の前のりノプロスも腹部に致命傷となったであろう大穴があいており、そこにウロコトルが頭ごと突っ込んで肉を啄んでいる。

すぐにいなくなった様子を考えれば、大方ここに居るウロコトルに食事を与えるためとも考えられるがそれでもアグナコトルがここに居るのは間違いない。

しかも、この傷の大きさからしてかなりの大物の様である。

「くっ……」

スコープから視線を外し、イーリスは表情をゆがめる。

まともな準備をしていないルーメンやアキラもであるが、イーリス自身も急襲を受けたら危険である。

「とりあえず一旦、さっきの場所につ！？」

一旦、ルーメンとアキラを待っていた場所に戻ろうとした時、さらなる咆哮が響いてきた。

その瞬間、イーリスの背中の中の汗が一気に引いた。

「まさか!？」

今の咆哮は狩りの時と違う、縄張りに入り込んだ者への威嚇の咆哮であった。

イーリスは咄嗟に北側にある二つの洞窟に目を向ける。もし遭遇するなら山側の可能性が一番高い。

どちらに向かうべきか、イーリスが悩んでいると慣れたんだ独特の臭気が鼻をついた。

「これはペイントの実際の……」

漂う匂いは間違いなくペイントの実際の臭気、鼻をひくつかせれば山頂方面はエリア8から漂ってきているようである。

『ルー、ウエナートルさん、無事でいてください』

イーリスはそう願いながらボウガンをしまい、エリア8へ一気に駆けだした。

そして時系列は現在へ……

時間帯は夜だというのに、周囲の全てが赤や黄色で燃えている。

足もとの地面は所々赤く光りを放ち高熱のガスを噴き上げ、左右をマグマの池がその熱気で存在感を表している。

真正面にはマグマの池をつなぐ岩盤の橋があり、それはここから下山するための道でもあった。

しかし、その上では30メートルほどの細長い巨体を四肢でしつかりと支える竜が、全身をしなせながら甲高い咆哮を上げていた。  
「くっ！」

咆哮という音の衝撃をアキラはとっさに盾でしのぐとガキンという音とともに衝撃が盾に響いた。

大型モンスターの放つ咆哮はその音量だけではなく、“威圧”で人間の恐怖という本能に働きかけしばらくの間、ヒトの動きを封じてしまう。

しかし、最初の威圧さえ防ぐことができればそのようなことはない。

アキラはいまだにアグナコトルが咆哮を続けているのを確認すると、すぐに背負っていた荷物の一部を捨てた。

いくら荷物が多い状態での行動に慣れているとは言え大型モンスター相手に荷物を背負ったまま戦うわけにはいかなかった。

アグナコトル……ウロコトルが成体になったモンスターで『炎戈竜』えんかりゆうとも呼ばれている。

この大陸の火山地帯の生態系の頂点に立つ海竜種のモンスターであり、なおかつ一部の古龍種を除く現在確認されている全てのモンスターで最も巨大なモンスターである。

分類上、海竜種となっているがアグナコトルは水ではなく溶岩の中を泳ぎ回ることが出来る。

それを可能しているのが耐火性に優れた鱗と皮、それらに耐熱性の体液を分泌することにより長時間の溶岩の潜行を可能にしている。

更に『炎戈竜』の名のごとく戈ほこの様な特徴的な嘴と、ウロコトルよりもあからさまに大きく、固く発達した背ビレと強靱な尾ビレによって溶岩で素早く動けることが出来た。

そこへ咆哮をもともせず、ルーメンが咆哮中でも聞こえる大きな声を掛けてくる。

「アキラさんどうします？」

「さっさと逃げたいところですが、場所も相手も悪いですしね」

アキラはそう答えつつルーメンの全身を纏うレイアシリーズに目をやる。

このレイアシリーズは耐火性が高く、使用者の体力の維持にも優れている。

更にモンスターの咆哮の威圧を下げる特殊効果スキルもあり、装飾品と組み合わせることで咆哮を受けても動きを封じられなくすることも出来た。

防御の出来ないスラッシュアックスを使うルーメンは当然ながらこの調整を行っていた。

この事を考えればアグナコトル相手でもさほど引けは取らない。

しかし……

「ちなみにアグナコトルとの戦闘経験は？」

「すみません、ありません」

ルーメンの返事を聞いて苦笑しつつ、アグナコトルの様子をうかがう。

どうやら相手はまだ本気で戦う気はないらしく嘴を使いウロコトル同様、音を出し威嚇しているがそれもいつまでの事やら……

「……かなりきついですね」

思わずでたアキラの本音にルーメンは顔を歪ませる。

この大陸に来たばかりのアキラはともかく、ルーメンもアグナコトルと戦闘をしたことはなかった。

しかし、これは当然のことであると云えた。

ルーメンのハンターランクで受けられるのは通称『下位クエスト』と呼ばれるものである。

ギルドは依頼クエストを作成するに当たり、対象モンスターの個体を調べそれに合わせクエストを作成するのである。

ロックラックのギルドでは現在、危険度や重要度がある一定値以下の依頼を『下位』、それ以上や下位で失敗が続いた場合には『上位』としている。

そして今、目の前に居るアグナコトルの狩猟依頼は下位で見る事は

ほとんどない。

あったとしてもそれは『高難易度クエスト』と呼ばれる『下位クエスト内で危険度が高い』という特殊な部類に指定されており、並の下位ハンターは手を出す事は少ないのである。

それは『アグナコトル』というモンスターがそれだけ強力なモンスターかを意味している。

そのような相手に未経験者が二人だけ、その上戦闘用の準備はほとんどない。

一応、強烈な閃光でモンスターの視界を封じる閃光玉はあるが場所が悪かった。

アグナコトルが今居るのはこのエリア最も狭い岩盤の上で、アキラ達の目的地はその奥である。

閃光で視界を封じられた相手の動きがどうなるかわからない以上、十分な準備をしていない現状で下手に閃光玉を使う事は出来ない。

後方にも山頂方面への道はあるが今戻れば野宿はほぼ必須、しかも途中には昼間確認したウロコトルの巣があるため、ヘタをすればそこで再び鉢合わせになる可能性もなくはない。

一時的に退避するにしてもどの道、閃光玉を使わざるを得ない。

「万事休す……ですかね？」

アキラがそう言った瞬間、ついにアグナコトルが動き出した。

アグナコトルはわずかに後ろ足で立ち上がると、そのまま全身をバネにしてこちらへ腹摺りをしながらこちらへ突っ込んでくる。

二人は別れるように飛びのき、アグナコトルは先ほどまで二人がいた場所を土煙を上げながら過ぎ去った。

「ルーメンさん！とりあえず様子見です！」

「でも、それじゃ……」

ルーメンが話そうとしたとき、アキラは拳大の物をアグナコトルに投げつけた。

それはアグナコトルに当たるとピンク色の煙を出しながらはじけ、煙と同じピンクがアグナコトルの体表に付き独特の臭気も漂い始め

た。

「これでイーリスさんも気づくはずです」

アキラそう言っただけでランスと対になる盾を構えた。

その様子にルーメンもまた手にしているバンカーバスター・攻の柄を握りなおす。

先ほどアキラが投げたのは『ペイントボール』と呼ばれるアイテムで、ハンター達はモンスターの追跡に使うアイテムであった。

しかし、今回アキラはペイントボールを使うことによって、モンスターが現れたことをイーリスに伝えることに使ったのである。

それに山頂で狼煙を上げたことによりイーリスが近くまで迎えに来ている可能性もあった……いや、来ているだろう。

隣にいるルーメンをちらりと見る。これまで見てきたイーリスの言動や行動を考えれば間違いなく来ている。

もしそうならベースキャンプから来るよりも、ずっと早くここに来るはずである。

アグナコトルの動きに注意しつつ、そのような事を考えているアキラにルーメンが声をかけてきた。

「確か、イーリスは昔アグナコトルの狩猟にいったことがあるって言っていました」

「それなら心強い！」

二人はとりあえず間合いを取りながらアグナコトルの様子をうかがう。

今まともに戦うのは無理である以上、深追いをせずその行動を観察するのがベストであった。

それに動きに慣れてくれば退避の間が見いだせる可能性もある。とその時、アキラはアグナコトルの体表の変化に気づいた。

先ほどまで溶岩のように煌いていた体表がオレンジ色に変わり始めたのである。

『なるほど、あれが……』

アキラは街で確認した資料を思い出すが、そこへ向きを変えたアグ

ナコトルが再び突っ込んでくる。

先ほどよりも距離がとれていないため回避は間に合わないと判断し、アキラはランパートの盾を構え突撃に備えた。

次の瞬間、咆哮よりも強い衝撃が盾を通してアキラの腕に伝わってくるが必死にこらえる。

ランスの盾はハンター扱う武器の中では最高の防御性能を誇るが、さすがに巨体を直接ぶつけられればその勢いを殺すことはできない。  
「くっ」

強制的に後退させられそうになるが、アキラは盾をわずかにずらしてその勢いを少しでもそらさせる。

するとアグナコトルはそのまま溶岩の池へと中へと突っ込んだ。

溶岩が跳ね跳ぶ中、アキラはランスを構えたままバックステップで距離をとる。

一方、ルーメンは武器を構えたままではいざという時に行動が取りづらいため、バンカーバスター武器をしまつて次の攻撃に警戒している。

これがこちらから攻撃をする状況ならまだしも、今はその時ではないので少しでも動きやすい状態にしていた方がいいのである。

すると、アグナコトルは溶岩から顔を上げ改めて目標を確認する。そして、今度は目標をルーメンに切り替えたのか全身を再び煌めかせ、アグナコトルが今度は四肢を使って走り寄る。

ルーメンは距離を取るため走り出すが、アグナコトルの方が早い。あつという間にルーメンに近づくと頭を大きく持ち上げ、気合の鳴き声と共に戈状の嘴を一気に降り下ろす。

しかし、走り続けるルーメンにこの一撃は当たることなく固い岩盤に突き刺さるが、その深さが尋常ではない。

なんと固い嘴はもとより頭が全てすっぽり突き刺さり、岩盤の下にある溶岩までもが噴き出して周囲に飛び散った。

それだけの状況にありながらアグナコトルは素早く頭を引き抜くと、前進しながらルーメンめがけ連続で頭を振り下ろす。

一度、二度と頭が振り下ろされることにルーメンに近い位置に嘴が



突き刺さり、まき散らされた細かい溶岩がルーメンのレイア装備に降りかかる。

そして、最初の攻撃から四撃目が振り下ろされるが、それはルーメンを捕らえられる間合いに入っていた。

「ルーメンさん！飛んで！」

アキラの声にルーメンは体全体で思いつき飛びのく。

次の瞬間、アグナコトルの嘴がルーメンのレイアグリーヴをかすりながら更に深く地面に突き刺さった。

ルーメンは仰向けの状態で地面に着地するが、その背中に飛び散った溶岩が降りかかった。

幸いレイアシリーズはこの程度の溶岩なら十分に防ぐことが出来るので問題はないが、さすがに直に地面にふれた顔はそうはいかない。

「痛つつうう……」

顔面の痛みと熱さにルーメンは顔をしかめるが、あの直撃を食らうよりもはるかにましである。

しかし、ルーメンは痛みに耐えている暇はなく、追撃に備えずぐに立ち上がりその場から移動する。

幸い、最後の一撃を深く刺しすぎたのかアグナコトルは頭を引き抜くの僅かに戸惑っていたためすぐに距離を取ることが出来た。

一方、アキラはルーメンへの連続しての攻撃を防ぐために、アグナコトルの尻尾の付け根を狙い姿勢を低くしていた。

「うおおおおお」

気合とともにアキラはランパートを水平に構え地面を蹴り上げ突進を開始する。

基本的に移動の遅いランスであるが、走・攻一体で行うこの攻撃は隙を見ての強襲や追撃に優れる攻撃方法である。

実際、アグナコトルは未だにルーメンに気を取られ、後ろに居るアキラをそれほど警戒していなかった。

加速をしながらのアキラの突進はアグナコトルの尻尾の付け根を捉えると、そのまま滑るように後ろ脚に流れる。

「こつち……だっ！」

そして、後ろ脚に近づくとアキラは勢いに任せランパートの矛先を突き出す。

通称『フィニッシュ突き』とされるこれは、突進の加速を利用して繰り出すこの一撃はランスの攻撃で最も破壊力があつた。

その一撃は見事に後ろ脚の付け根に突き刺さり、アキラはアグナコトルの殺気がこちらに向いたのを感じる。

アキラはすぐさまランパートを引き抜きバックステップで距離を取るが、アグナコトルは長い首を利用し背後のアキラに噛み付き攻撃を仕掛けてきた。

「うおっ！」

まさかの攻撃にアキラはギリギリで頭を下げた回避し、バックステップで距離をとる。

「アキラさん！」

一方、その様子を見ていたルーメンが助けようと駆け寄るが、その視線に煌めくアグナコトルの尻尾が目に入った。

ルーメンが咄嗟に身を固めた瞬間、強い衝撃と熱が防具越しに伝わ  
レイアシリーズ  
りアキラ同様吹き飛ばされ地面を転がる。

体全体を回転させての噛み付きである。多少の時間差があれど、尻尾が同様の速度で出こちらに来るのは当然であつた。

しかも、アグナコトルの尻尾はそこに付いたマグマが加速による急激な酸素供給により炎を噴き出していた。

その一撃はさながら、火属性のハンマーで殴られた様な物である。

更には尾に付いていた溶岩の一部が防具の一部に張り付き、その熱でルーメンの体力をじわじわと奪っていく。

「アキラ……さん……」

尻尾の衝撃と熱にむしばまれながらも、ルーメンはアキラの心配をしていた。

アキラの防具はレザーシリーズでルーメンのレイアシリーズに比べれば紙の様な物である。

いくらランスの強力なガードができるとはいえ、それでも防げる攻撃には限度があるためいずれかの攻撃を受けてしまう可能性がある。痛みをこらえながらルーメンが目を向けると、すでに態勢を立て直していたアキラがアグナコトルと対峙しているのが見えた。

アキラは吹き飛ばされたルーメンを気にかけてつつ、アグナコトルと対峙を続けているがその顔には厳しさがにじんでいた。

ルーメンはそのことに気づき、すぐに気を取り直して立ち上がった。戦った事はなくとも仮にもハンターである。この程度のことではハンターではないアキラに後れを取ることは出来ない。

ルーメンは立ち上がるとバンカーバスター・攻の柄に手を掛け、アグナコトルの尻尾を狙って駆けだす。

それと同時にアグナコトルも動き出し、アキラ目がけ先ほどと同様に嘴を使い連続で攻撃を開始した。

頭だけのためか先ほどの突進よりもその攻撃の勢いは弱く、アキラは盾を使って器用に受け止めと受け流しを行う。

周囲にはアグナコトルの嘴によって多数の穴が開き溶岩が漏れ出すが、すぐに冷えて固まり足場を形成する。

これは溶岩の中にわずかに含まれる氷結晶の粒の性と考えられており、アグナコトルなどのモンスターがこの様な場所で暴れ回っても極端に足場に困らない理由であった。

とはいえ、いつまでもこれが持つわけでもなく徐々に足場が不安定になって来る。

アキラが「マズイ」と考え始めた時、アグナコトルの背後から威勢のいいルーメンの掛け声が聞こえた。

「うおりゃああああ!!」

気合とともにルーメンはバンカーバスター・攻を引き抜くと、アグナコトルの尻尾……その先に切りつける。

攻撃の成果は少ないものの、深く入り込むと先ほどのアキラが受けた様な反撃を受ける可能性がある。

まして防御の出来ないスラッシュアックスを使うルーメンにとって、

これがリスクを少なくする方法であった。

しかし、無情にもその一撃は火花を散らして弾かれた。

「嘘っ!?!」

予想外の出来事にルーメンは驚きを隠せなかった。

確かにルーメンの扱うバンカーバスター・攻は扱い辛い武器であるが、切れ味は特別悪い物ではない。

また、先ほど切れ味が同程度のランパートが普通に通ったことを考えれば、少なくとも弾かれないと踏んでの攻撃であった。

「何故」と思いつつルーメンは態勢を立て直す、アグナコトルはこちらに目標を変えている。

と、そこにアグナコトル越しにアキラの声が聞こえた。

「ルーメンさん!アグナコトルは今、硬化していますよ」

その声にルーメンは慌ててアグナコトルの全体に目をやる。

アキラを攻撃していた顔は遭遇した時と変わらず煌めいているが、首から後ろの全身は冷え固まった溶岩同様に黒くなっていた。

そのアグナコトルはルーメンを見たまま体を横に向けると、ゆっくりと体をしならせ始める。

「!?!」

直感的に危険を察したルーメンはバンカーバスター攻を構えたまま、アグナコトルの頭の方へと移動を始めた。

それとほぼ同時に、アグナコトルは撓しなった枝の様に全身で体当たりをしてきた。

勢いよく弾かれたアグナコトルの巨体がルーメンに触れようかという瞬間、ルーメンは前転し辛くも避けた。

体当たりが空を切ったアグナコトルが態勢を直している間に、ルーメンは素早く武器をしまいアキラに駆け寄る。

「大丈夫ですかルーメンさん?」

「はい、アキラさんは?」

「幸いまだ軽い打撲程度です」

互いの体調を確認すると二人はアグナコトルに視線を向ける。

態勢を立て直したアグナコトルはすでにこちらを正面に据えている。先ほどまで何度も岩盤ごと溶岩に突っ込んでいた顔は煌めきを失い、オレンジを通りすぎて赤黒くなっていた。

「アグナコトルの溶岩の事、忘れていたんですか？」

「無我夢中でアグナコトルの体表を注意していませんでした」

次の攻撃を警戒し、守りを固めるアキラの問いにルーメンは回避の態勢を取りつつ苦笑を浮かべた。

その回答に、アキラはイーリスがルーメンに対していつも「注意しなさい」と言っているのが分かった気がした。

アグナコトルは全身に溶岩を、正しくは全身に溶岩の付着しやすい突起部分を起点に溶岩を纏っているのである。

そして、それは陸上に長時間いれば自然に固まり天然の鎧となる。

この鎧の強度は非常に強く、並大抵の武器では弾かれてしまう程である。

しかし、この鎧は溶岩なので溶岩に潜ったりすればすぐに溶解するのが救い所である。

もっとも、肝心な溶岩はアキラ達の背後にあるため、今しばらくは最強の鎧を纏う手ごわい相手である。

その最強の鎧をまとったアグナコトルはこちらに駆け寄ると、今度は後ろ足で立ち上がった。

ルーメンはそのまま脇に駆けだし、アキラはガードを固める。

そこへ、上半身全体の体重を掛けたアグナコトルの巨体がアキラ目がけ下りてきた。

無論、こんなものをまともに受けるわけもなく、アキラは盾を使って器用にその衝撃を受け流すが僅かに後退する。

次の瞬間、地面にその巨体が下りると周囲の地面を大きく揺さぶる。ルーメンはその揺れに一時的に身体の自由を奪われるが、アキラはその衝撃をも盾を構えたまま耐えた。

アグナコトルはその身を起こすと、攻撃の結果を確かめるかのよう  
に器用に後ずさりをして身を引く。

その巨体が離れたのを確認するとアキラはガードを解いて息をつく  
が、その頬を一筋の汗が流れる。

ランパートををしまふ隙がほとんどなく、逃走時のキーアイテムと  
なる閃光玉も使うタイミングが見えない。

かといってこのままの長期戦になれば先に倒れるのは間違いなくこ  
ちらである。

特にアキラの場合はガードしているとはいえ貧弱な防具である以上、  
ルーメンよりもダメージの蓄積率は多かった。

『見極めさえできれば……』

防戦一方の現状を打破できるのにとアキラは思うが今はまだその時  
ではない。

チラリと横にいるルーメンを見れば、その手には拳大で細い紐のつ  
いた玉を手に行っている。

「アキラさん……」

「分かりました」

ルーメンはこちらを見ずに声をかけてくるが、アキラはその手に持  
っているものだけで理解した。

次の攻撃をかわした後に、ルーメンは閃光玉を使う気であると……

一方、アグナコトルは未だに目標が動いているのを確認し次の攻撃  
に移ろうとしていた。

その時、ラツパの様な音が響きアグナコトルの後頭部で火花が散つ  
た。

突然の後方からの攻撃にアグナコトルは何事かと首を曲げ後ろから  
の襲撃者に目を向けるが次の瞬間、アグナコトルの後頭部で小規模  
の爆発が起きた。

いきなりの事にアキラとルーメンは戸惑うが、そこに聞きなれた声  
が響いた。

「二人とも走って！」

その声にルーメンは走り出し、アキラもランパートをしまふと回復  
薬グレートを口にしながら声のした方へと走り出す。

その先にはそこには特徴的なバレルのボウガンを構えたガンナー、  
イーリスの姿があった。

「イーリス！」

「イーリスさん！」

待ちに待った人物の登場に二人の顔に思わず笑みが浮かぶ。

駆け寄る二人を確認しながらイーリスは新たに通常弾Lv1を装填し、アグナコトルめがけその引き金を連続で引く。

今度は先ほどの撃ちこんだ鉄甲榴弾Lv1違い、連続で独特の発砲音が響きアグナコトルの頭に着弾し細かな火花を上げる。

攻撃力の低い通常弾Lv1であるが、この組み合わせで打てる球の中では最多の6発装填スス事が出来た。

そのため、アグナコトルの気を引くだけなら十分であった。

突然の襲撃者にアグナコトルは当初の方は戸惑っていたが、態勢を立て直したのが僅かに炎が漏れる嘴をカタカタと音を立て始めた。

「二人とも！脇にそれて！」

イーリスは注意を促すと同時に、ボウガンを構えたまま側転しその場から離れる。

次の瞬間、イーリスの居た場所を一本の光の筋が薙払った。

光の筋はそのまま突き進み、エリア5へと通じるトンネルの外壁の側面にぶち当たり削り取る。

その攻撃のあまりの威力にルーメンは驚き、アキラは思わず足を止めアグナコトルを振り返る。

振り返った視線の先には、口から煌々と輝く光の筋を口から勢いよく吐き出すアグナコトルの姿があった。

「これがアグナコトルの……」

アキラはかつてこれと似たような『熱線』と呼ばれる攻撃を見たことがあるが、あそこまでの破壊力はなかったように感じられた。

また同時にアキラの脳裏にアグナコトルの生態に関する文献が思い起こされた。

『アグナコトルは溶岩に潜る際にその一部を体内にため込むことが

あり、それは外敵と出会った際に光線状に吐き出す事により強力な攻撃として利用する』

「アキラさん！」

文献の事を一瞬、意識していたアキラはルーメンの声に我に帰り、すぐさま走りだした。

一方、攻撃の目標にされたイーリスであったが冷静そのもので、これを好機として新たに通常弾Lv1を装填し攻撃を再開。更に二人に対して声を上げた。

「閃光玉、お願いします！」

イーリスの言葉にルーメンは手に握っていた閃光玉の紐に手を掛ける。が、次の瞬間アグナコトルが突如として咆哮を上げた。

「しまっ!?!」

いきなりの咆哮に、アキラは思わず耳を塞いでその場に立ち止まってしまう。

先ほど立ち止まったのがあだとなったのか、アキラは未だにアグナコトルの咆哮の効果範囲内に居たらしい。

一方、ルーメンはアキラの様子に一瞬、戸惑ったものの紐を引き抜くとアグナコトルの目の前へと放り投げる。

そして、全員が目をつぶり閃光に備える中、高らかに咆哮を上げるアグナコトルの前で閃光玉が炸裂した。

いきなり目の前で炸裂した閃光に、アグナコトルはひるむような鳴き声を上げ僅かに後退する。

それと同時にアキラは咆哮の束縛が解放され再び走り出す。

閃光によってアグナコトルの視界が封じられたことを確認し、イーリスは警戒しつつも構えていたボウガンを背中にもわした。

後は暴れる回るアグナコトルに気を付けつつ、後方のトンネルに逃げるだけである。気を引く必要がない以上、機動性の確保のために納銃した方がいいと判断したのであった。

また、よくよく見ればアグナコトルの口からは溶岩が漏れ出ている。これはアグナコトルが怒り状態になっている事を現していた。



そんな相手に現状で、以上の攻撃は危険であるとも言えた。しかし、その時思わぬ事態が起きた。

「わっ！！！」

なんと、閃光玉を投げ終えたルーメンが足をもつれさせ転んだのである。

ルーメンはすぐに立ち上がろうとするが、その後方では最悪の事態が起ころうとしていた。

先ほどルーメンが転んだ音に反応したのか、なんとアグナコトルは先ほどと同じ様にカチカチと嘴を鳴らし始めたのである。

その様子に気づいたイーリスは慌てて叫んだ。

「ルー！」

いくら耐火性の強いレイアシリーズであれど、アグナコトルの熱線を食らってただで済むわけではない。

しかし、閃光玉によって視界を失ったアグナコトルをすぐに止める手段はイーリスには無かった。

唇をかみしめるイーリスであったが、そこにアキラの音が響いた。

「ルーメンさん！伏せてっ！！！」

「ア、アキラさん！？」

アキラは言うのが早いのか、ルーメンを庇うようにランパートの盾を構えると同時に槍でも支える。

次の瞬間、ついにアグナコトルの口から再び熱戦が放たれ、ランパートの盾を直撃する。

その衝撃は先ほどのアグナコトルの突進の比ではない。

強烈な衝撃が腕の骨を軋ませ、全身に激痛が走る。

更にその激痛さえも呑み込む猛烈な熱波が、盾やレザーメイルの表面を焦がしていく。

無論、それらの衝撃と熱気は当然ルーメンにも伝わり、ジワジワと体力を削っていった。

一応、盾を傾けることによって何とか持ちこたえているものの、勢いよく放たれた溶岩にアキラとルーメンは盾ごと後方へと押しやら

れる。

『いつまでこの状態が続くのだろう……』ルーメンが苦痛のなか考えていると、徐々に熱が下がって行く。

それはそれだけアグナコトルの熱線が高熱であることを示してもいた。

まして、怒り時で攻撃力が上がっているアグナコトルの熱線となれば、熱のみならず破壊力も増しているはずである。

しばしの間、茫然としていたルーメンに弱々しい声が掛けられる。

「……だ、大丈夫……ですか？」

その声にルーメンはハツと顔を上げると、そこには額から血を流しているアキラが立っていた。

アキラのレザーシリーズは外側に当たる部分は所々が黒く焦げ、眼鏡にも熱の影響が歪んでヒビが入っている。

「アキラさん……」

ボロボロのアキラの姿にルーメンはそれ以上言葉が出ない。

「ルー！ ウェナートルさ……っ!？」

駆け寄って来たイリスもアキラの姿に驚きの表情を見せる。

正直な話、アキラが立っていられるのはランパートの支えがあつてこそである。イリスはすぐに腕を肩に載せ支える。

「……すみ……」

「今はしゃべらないでください。ルー！ ランパートをお願い」

「う、うん」

イリスはアキラの礼を遮り、落ち込んだ様子のルーメンに指示を下す。

そして、アグナコトルを確認すればあらぬ方向に対して嘴による連続づきをしていた。

閃光玉の効果の継続を考えれば、おそらくこれが最後のチャンスであった。

イリスはアキラの腕を抱えながら、引きずるようにエリア5へのトンネルに向かって入って行く。

その後をルーメンが付いて行くが、その手には表面が解け僅かに溶岩のこびりついた盾と主を支えていたランパートが握られていた。3人はそのままトンネルを進んだが、その中ほどでイーリスは足を止めるとアキラを座らせた。

その行動にルーメンは首をかしげる。

「イーリス？」

「ここならモンスターは殆ど来ないからアキラさんの応急手当てをしましょう」

そう言つて、イーリスは支給品である応急薬を取り出した。

効果はそれほど高くはないが普通の狩りとは違い、数だけならかなりの量があった。

「ウエナートルさん、上を脱いでもらつていいですか？」

「えっと……」

イーリスの言葉にアキラは困つた表情を見せると、その様子にイーリスとルーメンは顔を見合わせた。

アキラがこの様な表情を見せたのは、ルーメンが食糧のほとんどを炭にした時ぐらいである。

「アキラさん？」

「い、いえ……これくらいなら……その……傷口にしみ込ませるくらいで大丈夫ですよ」

そう言つて、アキラは半ば強引に応急薬を受け取つて、火傷をした部分に応急薬を掛け応急措置を始めた。

応急薬が傷口にしみるがアキラはこらえ、自分の無事だったポーチから包帯を取り出し巻きつける。

「あ、アキラさんそれじゃすぐに乾いてしまいますよ」

そう言つてルーメンは応急薬をしみ込ませた綺麗な布を取り出し、そつとアキラの傷口に当て包帯で固定する。

火傷の処置で重要なのはまずは冷やす事、そのためにも応急薬で冷やす必要があつた。

アキラも最初は驚いていたが、全ての処置が終わると頭を下げた。

「ありがとうございます」

素直に礼を述べるアキラであったが、ルーメンの反応がない。

慌てて頭を上げれば、ルーメンの顔はくしゃくしゃになっていた。

「ルーメンさん？」

「……すみません」

「え？」

驚くアキラの前で、ルーメンは謝りながらポロポロと涙を流し始めた。

その様子をイーリスはただじっと見ている。おそらく何度かこの様な事があつたのだろう。

イーリスが見守る中、ルーメンは話を続ける。

「私のせいで……アキラさんが……」

ルーメンは気を負っていた。

自分が無理に同行したせいで今回の様になつたのではないかと……もし自分が付いていかなければ、アキラはもっと早く山頂に付き調査を長く出来ていたかもしれない。

それに、下山の時もアキラはルーメンに気を使って道を選んでいたり、もしルーメンがいなければアキラはもっと早く降りることができ、アグナコトルと対峙することはなかったかもしれない。

そして……こんな怪我をさせなかったかもしれない。あくまで『もしかしたら』の話であるが、ルーメンにはその事が気にかかっていた。

ルーメンがその事を話している間、アキラはジッと何も言わずに聞いていた。

そして、ルーメンの肩に手を乗せた。

「気にしないでください」

「でもっ！」

「このくらいは今までに何度か経験しています」

そう言つて、アキラは少しだけ昔の話を語る。

天井から襲われ潰されかけたり、強力な爪で引き裂かれそうになっ

たりはたまた強烈な熱線に襲われたり……

「自分の調査は確かに、ルーメンさんやイーリスさん達ハンターの狩猟に比べれば優しい物かもしれませんが」

ハンター達の狩猟とは違い様々なものが準備され、危険と判断すれば成否にかかわらず無料で狩場から戻ることが出来る。

これは、自ら道具の準備をして、契約金を払った上で狩に挑むハンター達から比べればずっと楽である。

そして何より、必ず狩猟をしなければならぬわけではない。それはすなわち、モンスターを倒してくれと願う存在がいないためすぐに逃げる事が許されていた。

「でも、調査のためにモンスターと対峙することには変わりありません」

確かに引くかどうかの決め方は楽であるが、実際にモンスターの調査をするとなれば対峙しなければならぬことも多い。

最近は腕の立つハンターやギルドナイトに任せ研究室にこもりきる者がほとんどであるが、一部の研究者はアキラの様に自ら狩場に赴くこともある。

それでもアキラの様にここまで接近する者はそうそういない。

しかし、今の王立研究所に残る貴重な資料の多くは、ハンターと兼業した一人の研究者の物である。

それはまさにハンター同様、命を削ったの賜物である。

「そうならば当然、その覚悟も出ています」

研究のために命を掛けるなどハンターからすればおかしいかもしれないが、研究者たちにとってそれは大きな意味合いがある。

自分たちの研究によってモンスターの生態を把握し、そこから被害が出ない様な予防線を張ることもできる。

それは間接的ではあるが一般の人々を……更にはハンター達も守ることにもつながっている。

実際、アキラは機会があればその身を持って、アグナコトルの熱線の威力を知ろうと考えていた。

想定外とはいえ今回この様な形で攻撃を受けられたのはある意味、幸いとも言えた。

ちなみに感想としては、同様の攻撃を行う鎧竜『グラビモス』の同クラスの熱線に比べると威力は大きいといえた。

おそらく、グラビモスが自身の体内の熱エネルギーだけを利用しているのに対し、アグナコトルは溶岩という熱と質量をぶつけてくるためとアキラは考えていた。

しかし、この行為はあまりにも危険……いや、命の無駄としか言えないものである。

いくら覚悟が出来ているとはいえ、それは間違ったやり方とも言えるが、それがアキラのやり方であった。

「なので……ルーメンさんはあまり気を負わないでください」

モンスターと対峙している時はハンターも研究者も関係ない。あくまで今回の一件は狩猟の最中、ハンターが仲間を守るうとしただけ。アキラはルーメンにその様に理解してほしいかった。

「はい……でも、謝罪だけはさせてください」

ルーメンは涙をふくと静かに頭を下げた。

アキラがなんと言おうと迷惑を掛けたのは事実であり、ルーメンとしてはしっかりとけじめをつけておきたかった。

そこで一区切りがついたと判断したのか、今まで黙って居たイーリスが声を掛ける。

「とりあえず戻りましょう」

応急処置は終わったとはいえ、出来るだけきちんとした処置もした方がいいだろう。

それにと、イーリスは焼け焦げたアキラのレザーメイルを見る。

元々防御力はさほど高くはないが、流石にこのままというわけにもいかない。

幸い、レザーメイルは加工がしやすいため、この程度ならベースキヤンプで十分修復は出来そうであった。

「そうですね」

アキラもイーリスの言う所をくみ取って頷き、脱いだレザーメイルを着て立ち上がる。

足もとに若干の不安があったが、体力もだいぶ回復したらしく一人で歩く分には問題ない程度にはなっていた。

そして、アキラは万が一に備えルーメンからランパートの盾を受け取った。

表面は僅かに溶けているが、その防御力はいまだに健在のはずである。

その事をアキラが確認しているとルーメンが不思議そうに声を掛けてきた。

「よくあの熱線を受けることが出来ましたね……」

アグナコトルの熱戦は非常に強力で、何も対策をせずにガードをすればランスの盾とはいえ破壊されることもあると言っ。

「ああ、それは多分これのおかげです」  
ルーメンの指摘に、アキラは胸元から一つの首飾りを出した。

少々、古びてはいるが綺麗に加工されているそれはハンター達が時折、身につけているものであった。

「お守り？」

「はい。この前、凍土に調査に出かけた際に発掘したものの中にあつたんです」

少し興味深げに聞いてくるルーメンに、アキラは頷く。

凍土の調査後に調べた結果、かつての王族のいずれかの女王が使っていたものらしく強壁珠や絶壁珠に材質が似ているらしいと鑑定された。

その後、マスターに無理を言って強壁珠を用意してもらい、ガードの際にどうしても出来る弱い部分を守るように調整してもらったのである。

「まあ、強壁珠の素材と代金は今回の調査費用から前借りしてもらっているんですけどね。幸い強壁珠が鉱石だけで済んだので費用はだいぶ安くて済みました」

そう言つて、アキラは苦笑しルーメンもつられて笑う。

イーリスも僅かに笑みを浮かべていたが、不意に首をかしげた。話しを聞く限りではアレは『女王の護石』である。

それらが発掘される土地は限られており凍土の場合は確か……

「……あ、イーリスさん少しお願いがあるのですかいいですか？」  
「なんででしょうか？」

そこまで考えたイーリスであつたが、立ち上がったアキラの問いにその考えを停止する。

「エリア5を抜けたらアグナコトルを追ってください」

その発言にイーリスはもとよりルーメンも驚きの表情を見せる。

ベースキャンプに戻るまではペイントボールの効果は十分持つはずである。

それに現状でアグナコトルの位置を補足し続ける意味はない。が、そこでイーリスはアキラの真意に気づいた。

「ウエナートルさん、まさか……」

ハンター達が大型モンスターを補足し続ける最大の理由、それは目標を逃がさないため。

つまり、アキラにとって目標を逃がさないその理由は……

「ええ、炎戈竜『アグナコトル』……じっくり調査させていただき  
ます」

アキラの宣言にルーメンとイーリスは驚きの表情を見せた。

これだけの傷を負いながらもまたアグナコトルの調査をするというのである。

そしてアキラの調査は観察と対峙が基本であり、それはすなわち再びアグナコトルと戦うことを意味していた。

驚いている二人をよそにアキラは大まかな計画をまとめ始める。

「観察は一週間程度ですかね、それが終われば出来れば捕獲もしたいですね」

「アキラさん、さすがにそれは……」

「無謀すぎますよ」



芳しくない二人の反応にアキラは少し悩むと、仕方がないと言った様子で口を開いた。

「……分かりました。では、次の補給が来た時にお二人は帰ってもらって結構です」

アキラはそう言うのと少々ふらつく様な足取りで歩きだした。

「待つてください！」

そう言ったのはルーメンで同時にイーリスが慌ててアキラの肩を掴んだ。

いくら補給があるとはいえ、流石にアキラ一人でアグナコトル相手に一人ではあまりにも無謀すぎる。

「落ち着いてくださいウエナートルさん」

イーリスが落ち着いた声で声を掛けるが、アキラは振り返らず首を振って答えた。

「すみません……でもやりたいんです」

肩を掴んだイーリスの手をそつと離すとアキラは再び歩き出した。

「イーリス、私……」

「……分かったわよ」

イーリスはそれだけ言うとおぼつかない足取りのアキラの肩を組んだ。

その様子にアキラは少し驚いた様子を見せる。

「ヒュエトスさん？」

「ウエナートルさん……手伝いますから今は無理しないでください」

『先ほどウロコトルもいましたし』と言って、後ろからランパートを持って付いてくるルーメンを見た。

先ほどの様子を見ればルーメンは何が何でもアキラの手伝いをしただろう。

イーリスにつられて視線を向けていたアキラもどことなく理解し、思わず口元を緩ませた。

「すみません」

「謝るなら止めてくださいよ」

「さすがにそれは……」

「分かっていますよ」

そこでアキラは会話を止め、イーリスの顔を見る。

普段と変わらない様子であるが、内心は複雑なものがあるのだろう。それでいてアキラの無謀ともいえる調査に付きあってくれるのである。

「……ヒュエトスさんには敵いませんね」

アキラのその言葉にどちらからともなく苦笑を浮かべ、二人は後ろのルーメンにも聞こえるように二人はそのまま会話を始めた。

一応、観察期間は一週間であるがその間にアキラの療養と補給を待つ必要がある、その間にアグナコトルが移動してしまう可能性もある。

その時は諦めるとしても調査をやる以上、しっかり計画を立てなければならぬ。

一人の調査員と二人のハンターは計画を練りつつベースキャンプへと戻って行った。

#### Quest 4 燃えさかるものとブルカーノそこは炎獄（後書き）

案の定というか更新が遅れてしまい申し訳ございません。

先月の25日には投稿したかったのですが、最後が纏まらない＆多忙により無理でした。

それで今回何とか仕上げたわけですが……2万まで約900字を切ると言う量になってしまいました。

今回は1万〜1万5千字ともう少しコンパクトにしたいと思います。気付けば今月は3rd H D v e r . の発売ですね。

P S 3 がないのでさすがに買えませんが……

ちなみに次のモンハンはハードはP S 3 で、3 - t r i e のモーションのまま武器の数を3rdにして一部のFのモンスターを出し  
て欲しいです（Fはやったことがないですけど……）

まあ、そのような気持ちを抱きつつこれを書いているんですけどね。

でも、黒レイアのようなカメラはさすがに遠慮しますけど（笑）

気になる方は動画サイトで探してみてください。

そう言えば設定の一部がアレと少しかぶったな……

#### 次回予告

負傷しながらもアグナコトルの生態調査を行う宣言をしたアキラとそれについていくことを決めたルーメンとイーリス。

彼らははたしてアグナコトルの調査を無事にできるのであるのか？

#### Quest 5 大山、鳴動す

## Quest 5 大山、鳴動す

溶岩によって明るく照らされ熱気が満ちる洞窟の中、アキラ達三人はジッと身構えている。

ここはエリア7とよばれるエリアで大雑把に言うと三角形の形をしており、下の一角が海に面したエリア4と繋がり、山頂方面へ延びる道は先日アグナコトルと遭遇したエリア8に繋がっている。

残る一角は途中で二股に分かれており、麓付近にあるエリア5、6につながっており、火山の狩場の中でもかなりの広さがあつた。

しかし、それは地図上の話であり、実際は巨大な溶岩の川の上に足場だけがある状態である。

そのためエリア4、8を結ぶ道は溶岩に挟まれ、自由に動き回れる広さがあるのはエリア中央からエリア5、6方面にかけてだけでそれ以外は溶岩が待ち構えている。

また、それは床だけではなく天井も同じ様な状況であり、所々から溶岩の明かりが覗いている。

エリア4方面の壁には大きな穴があり、そこは天井の上を流れているのである。溶岩が滝となって落ちて行くのが見える。

このエリア7は大げさに言えば溶岩の中にある様な物で、クーラードリンクの効き目が通常よりも早く切れてしまうある意味厄介なエリアであつた。

しかし、そのような厄介なエリアにアキラ達が居る理由はズバリ、アグナコトルとの戦闘を行うためである。

アキラが先日負った傷は完治こそしてはいないものの、行動をするには支障がないほどまでに回復していた。

一方、ルーメンとイーリスは少し不安げに様子を見ていたが、ルーメンは耐えられなくなったのかアキラに話しかけた。

「アキラさん大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ」

不安そうなるルーメンの問いにアキラは努めて明るく答えた。

この一週間はリハビリを含めたアグナコトルの観察をしていたアキラの感覚としてはすでに十分いけると感じていた。

また、観察の際にルーメンやイーリスとの意思疎通も簡単なものだったらある程度出来るようになっており、問題はさほどないはずである。

アキラの答えにルーメンとイーリスは一度顔を合わせると頷き合い、イーリスが声を掛ける。

「何かあつたらすぐに言ってくださいね」

「ありがとうございます……あと、準備は大丈夫ですよ？」

素直に礼を述べながらも準備を気にするアキラの様子にルーメンとイーリスは苦笑した。どうあつても調査をしたいらしい。

二人の様子に少し気分を悪くしたのかアキラが眉を寄せると今度は真剣な表情で二人は静かにうなずいた。

「はい」

「各エリアの事前準備もばっちりです」

そう言いながらイーリスが一枚の羊皮紙を取り出すとアキラに渡した。

そこにはトリニ―サ火山の大まかな概要が書かれており、所々に様々なマークが書き込んである。

これらはすべて今回の狩りで使う道具であり、それぞれの場所に決まった道具が置いてあるのである。

アキラとしても一人の時以外で、これほどの用意をするのは久しぶりであるが、これはアグナコトルと戦うにあたりかなり不利であることが分かっているためであった。

普段の狩猟から比べれば十分な補給が可能であるが、それは3〜4日に一度だけでありそれを考えると実際にはあまり十分ともいえない。

また、アキラ達の装備もアグナコトルと対峙するには少々力不足であった。

特に体表が硬化した状態のアグナコトルにはアキラのランパートやルーメンのバンカーバスター攻では全く歯が立たない。

普通ならばクエストリタイアと言ったところであろうが、アキラとしてはこのチャンス逃したくなかった。

そこで、今回のようにあらかじめ準備をした上でアグナコトルに挑むことにしたのである。

「ヒュエトスさん。ありがとうございます」

道具の配置の確認を終え、アキラがイーリスに羊皮紙を返してエリア内に視線を戻す。

すると、ふとある事に気付いた。

『ウロコトルがない？』

いつもならいるはずのウロコトルの姿がないのである。調査を始めた際から比べると確かにウロコトルの姿を見る機会は減っていたが0というのは初めてであった。

何か嫌な感じがアキラの頭の中を横切るが、すぐにそれは打ち消された。洞窟内の空気が一気に張り詰めたのである。

アキラ達が今いるのはエリア6へ繋がる洞窟の前であるが、三人の視線はエリア8への道とエリア5へ続く道の間にある溶岩に向けられた。

三人の視線が注がれる中、火口から麓までゆっくり流れる溶岩に波紋が生まれる。

次の瞬間、まるで天に昇るかのように溶岩の中からアグナコトルがその体をくねらせながら姿を現した。

しかし、それは一瞬でアグナコトルの姿は再び溶岩の中へと消えるが、すぐにズシンと小さな振動が等間隔で置き始めた。

それを確認したアキラが目で合図をすると、三人は一気にその場から駆け出した。

先陣を切ったのはルーメンでそのあとにアキラが続く。イーリスもしばらく二人に付いてきたが途中で足を止めポイズンギフトに弾丸を装填する。

そして、ルーメンがエリアの中央まで来たところで目の前の溶岩からアグナコトルの背ビレが、次いで頭が姿を現す。その時にはアグナコトルも先頭を行くルーメンとアキラに気づき、警戒心をあらわにして二人を睨みつける。そして、溶岩から地上に前足が触れた瞬間、イーリスはポイズンギフトの引き金を引いた。

独特の発砲音を洞窟内に響かせながら飛ぶ弾丸はアグナコトルの首に命中し、ここ最近の硫黄の臭いとともに嗅ぎ慣れた匂いを放つ。イーリスが打ち込んだのはダメージのほとんどないペイント弾であるが、アグナコトルは攻撃を受けたのを感じ取り、全身をしならせると初めて会った時と同様に威嚇の咆哮を行った。

洞窟内に大きく響き渡る咆哮にアキラは盾でガードし咆哮による拘束を防ぐが、僅かに後退することになった。

しかし、すぐに全身をバネにしてガードしたまま一気に後退した分の距離を取り戻し、間合いを詰める。

イーリスは咆哮による拘束の範囲外に陣取り、ポアグナコトルの頭部めがけ通常弾Lv2による射撃を行う。

そして、先行していたルーメンは咆哮による拘束を受けないので、咆哮を続けるアグナコトルに接近し右わき腹にバンカーバスター攻を叩きつける。

叩きつけたバンカーバスター攻はそのままわき腹に食い込み、僅かに血をにじみださせる。

これはアグナコトル自身の鱗や甲殻がさほど固くないためであり、あくまで防御の要は表面に付いた溶岩であることを現していた。

その肝心の溶岩が軟化しているため弾かれることなく、ルーメンは斧モードのバンカーバスター攻を一気に振り上げる。

「せいやっ！」

掛け声とともに振り上げられたバンカーバスター攻は、軟化した溶岩をわずかにまき散らしながらアグナコトルの体表を切り裂く。が、ルーメンの攻撃はここまでであった。

咆哮を終えたアグナコトルはすぐさま近くに居るルーメンに標的を定め、その巨体を横にずらしルーメンを正面にとらえると頭ごと嘴を叩きつけるため頭をもたげる。

ルーメンは振り上げたバンカーバスター攻を構えたまま、アグナコトルの懐に転がり込んだ。

そのため、アグナコトルの攻撃は今までルーメンが居たところを砕くだけになった。

しかし、アグナコトルは頭を引き抜くと前進しすぐさまその先へと攻撃を加える。

このまま前進することにより、懐のルーメンを引つ張り出そうと言う魂胆なのかどうかかわからないが、このままではルーメンはアグナコトルの巨体に踏みつぶされることは間違いなかった。

そのため、ルーメンは休むことなく今度は脇へと前転しアグナコトルの懐から離れる。

その間にアキラはアグナコトルに接近し、ランパートを左わき腹目がけ突き刺す。

いくら甲殻が柔らかいとはいえさすがに深くは突き刺さらないが、それでも構わずに引き抜くと今度は上段へ視線を移す。

アキラは気合を入れ、一步踏み出すと楔を打ち込むように甲殻の隙間にランパートを差し込む。

すると今度は先ほどよりもわずかに手ごたえがあり、アキラは一度引き抜くとそこを狙って思いっきり突き入れる。

アキラの連撃にアグナコトルは、わき腹に張り付くアキラを狙いその口を開き噛み付こうとする。

しかし、それを読んでいたアキラは3撃目を突き入れたランパートを引き抜くと同時に、右腕の盾でアグナコトルの噛み付きをガードしたがそれだけでは収まらない。

「ふっ！」

アキラは右腕の盾で受けた噛み付きの衝撃を利用し、そのまま目の前にあるアグナコトルの頭に左腕のランパートを突撃させる。



そして強靱な嘴を滑るように進み、こびりついた溶岩をまき散らしながらランパートは嘴の付け根に突き刺さった。

その一撃にアグナコトルは思わずひるみ、その隙にアキラはバックステップで距離を取り、サイドステップで脇にそれた。

このまま攻撃を加えても良かったのだが、頭は今のところアキラの持ちっけではない。

チラリと後方のイーリスを確認すれば、ポイズンギフトのスコープを絞り通常弾Lv2による攻撃をしようとしていた。

今ひるんだのはアキラの力でも偶然でもなく、先ほどからアグナコトルの頭を狙っていたイーリスのおかげであった。

これは始めから決めていたことで、右サイドをルーメン、左サイドがアキラで頭と首をイーリスと役割分担をしていた結果である。

そのため、一度距離を取ったルーメンはすでに右サイドに付いて攻撃を再開しており、今度は振り上げからの叩きつけをしていた。

アキラも盾を構えなおし、再びガード突進をして左わき腹との距離を詰めに入る。

一方、イーリスは次の攻撃に備えていた。

ルーメンとアキラが近接で攻撃を加えているが、さすがにこちらの攻撃も邪魔に感じてくるはずである。

イーリスが危惧しているとアグナコトルは首を下げ、以前に見た突進の予備動作を見せた。

その様子にイーリスは狙いを止め、脇に前転で移動すると今までイーリスが居た場所をアグナコトルの巨体が通りすぎていく。

「イーリス！」

「大丈夫よ、それより次の攻撃に備えなさい！」

心配した様子で声を掛けるルーメンにイーリスは注意を促して距離を取る。

ガンナーであるイーリスの間合いは広いが、逆に近くてはその利点が生かせない。

こちらに体を向様とするアグナコトルを起点に後退するイーリスに

対し、アキラとルーメンは武器を一旦しまいアグナコトルに接近する。

しかし、アキラとルーメンが攻撃権に入る前にアグナコトルが動いた。

嘴をカチカチと鳴らし、その合間からは僅かに炎がこぼれている。

「避けて！」

そう言ったのは先頭を行くルーメンで三人はアグナコトルの正面から散った。次の瞬間、アキラ達が避けた場所をアグナコトルの溶岩による熱線が貫いた。

その勢いはすさまじく、目標を捉えられなかった熱線は溶岩にぶつかりはじけ飛ぶ。

しかし、アキラとルーメンはその様な情景に驚く暇もなく、熱線の反動で動けないアグナコトルに肉薄し攻撃を与える。

イーリスもポジションを確認しつつ頭部と首に狙いを定めるが、その時にアグナコトルの頭部と腹部以外の体表が煌めきを失い黒ずんでいくのが確認できた。

「ルー！ウエナートルさん！」

イーリスの声にアキラは攻撃を止め、狙いをわき腹から熱線の熱で軟化している腹部に変える。

一方、ルーメンは斧モードの振り下ろしから素早く、弾かれにくい剣モードに変えて黄色い光を時折散らせながら攻撃を続行する。

そして、イーリスが装填し終えていたLv2通常弾を撃ち尽くした直後に、アグナコトルの体表は完全に黒く固まり最強の鎧と化した。硬化した溶岩の前に、アキラは未だに柔らかい腹部を攻撃しながら思わず顔をしかめる。

今は柔らかいが時間が立てばここも攻撃できなくなってしまう。

そうなれば与えられるダメージ量も減ってしまうことになる。ならば……

「ヒュエトスさん！毒弾お願いします！」

徐々に手ごたえが鈍くなるのを感じながら、アキラはイーリスに毒

弾による攻撃を要求した。

アキラの要求に対しイーリスの対応は早く、弾奏が空になっていたことも手伝ってイーリスはポーチからすぐさまLv2毒弾を取り出し装填を始める。

本来なら属性弾で攻めたいところであるが、この組み合わせ装填でできるのは氷結弾と滅龍弾だけでアグナコトルに対しては『効果あり』と『わずかに効果あり』で、装填数が少ないことを考えると正直、使いづらい。

もっとも、ポイズンギフトを主体とした今回のボウガンの組み合わせでは、Lv1毒弾が2発、Lv2毒弾を4発装填可能と言う毒弾特化仕様となっており、バレルが無いポイズンギフトシリーズの特徴のひとつであった。

そして、Lv2毒弾の装填を終えたイーリスは照準を合わせると腰に軽く手を当てる。

すると、ガンキンコートの両端にある突起が地面に「ガチン」という音と共に接地し固定されると、アグナコトルの頭部に狙いを絞ったイーリスが引き金を引いた。

「クッ」

今までよりも若干大きめの発射音を立ててLv2毒弾が打ち出されたが、同時にイーリスは顔を歪ませながら僅かに後退した。

これはLv2毒弾の発射時の反動が大きく、反動に態勢があるガンキンシリーズを纏うイーリスと言えど発射のたびに僅かに後退してしまうのである。

しかし、それでもLv2毒弾に込められた毒は強力であり、態勢を立て直したイーリスは再び引き金を引く。

アキラ達もまた隙が大きくなっていくイーリスをカバーするため、先ほどよりもより積極的に動くがそれにも限界が近づいてきた。

アキラが先ほどまで攻撃していた胸の部分はすでに赤黒くなっており、これ以上は弾かれずに攻撃をするのは無理であった。

また、ルーメンの方も剣モードで消費されるビンの中身が限界に達

そうとしており、一度斧モードにしてからのビンの交換が必要となつてきていた。

二人とも、これ以上の攻撃の継続は無理と判断しルーメンとアキラは声を上げた。

「イーリス！」

「ヒュエトスさん！」

二人の声が届くや否かイーリスはポイズンギフトの引き金を引いて声を上げた。

「二人とも、下がって！」

イーリスの声に二人はアグナコトルから距離を取り、それと同時にLv2毒弾がアグナコトルに命中した、アグナコトルは『グオフツ』と唸って僅かに後退する。

一見すればただ単にひるんだだけの様であるが、アキラはアグナコトルの目の様子を見逃さなかった。

アグナコトルの目には先ほどまでの覇気が無くなっており、どことなく気怠そうになっていた。

「毒が効いているみたいですね」

アキラの声に距離を取ってビンの交換をしていたルーメンが顔を上げ、再装填していたイーリスも視線をアグナコトルに向ける。

ひとまずの目標達成に思わず気が緩むが、それもわずかであった。

毒の影響を受けはじめたアグナコトルは、おもむろに首をもたげると地面に突き刺した。

そして、そのまま全身をドリルの様に回転させ、頭、首、そして全身を溶岩の中へと進めていく。

アグナコトルの行動にルーメンとイーリスそれぞれの武器をしまい、アキラは盾でガードしながら周囲の状況に神経を張り巡らす。

ペイントの効果はまだあるものの、せいぜいこのエリアに居ることしかわからず位置の特定が出来ない。

そうなれば頼りになるのは視覚と聴覚、そして触覚だけである。

神経を研ぎ澄ませ警戒する3人であったが、最初に気づいたのはア

キラであった。

おもむろに足元の熱気が一気に増したのである。

「アキラさん！」

足と背中を焼かれる感覚に襲われるのとルーメンの声が聞こえたのは同時であった。

アキラが振り返るとそこには回転する突起物があり、咄嗟にガードの態勢に移ると間を置かずに強烈な衝撃が盾伝いにアキラを襲う。盾に隠れてその姿は見えないものの、アグナコトルが盾にぶつかって来た事だけは分かった。

実際、アグナコトルのものであったであろう、細かい溶岩が固まりながら降ってきてレザーメイルに音を立てて当たって来る。

おそらく、アグナコトルは溶岩に潜行したのちアキラの真下に移動した後、ガードの利かない後方の真下から攻撃を加えたのであろう。しかし、アグナコトルの攻撃はこれだけではなかった。

「アキラさん！上っ！」

そう叫んだのはまたもやルーメンで、アキラは咄嗟に視線を上に向ける。

そこには、溶岩で燃える天井に消えていく尻尾があった。

「くそっ」

アキラは足と背中 of 痛みをこらえながら、地面を勢いよく蹴って、そのまま突進の形でその場から移動する。

それと同時に天井からアグナコトルからその姿を現すと、ドリルの様に回転しながらものすごい勢いでアキラのいた場所に頭から突っ込んだ。

更にアグナコトルの勢いはそれだけにはとどまらず、そのままその巨体を溶岩の中へと姿を消す。

辛くもアグナコトルの攻撃を避けたアキラであったが、足を休めずに突進を続ける。

すると、アキラが通りすぎた場所から溶岩が噴出し始め、そこから全身の煌めきを取り戻したかのようにアグナコトルが姿を現した。

アグナコトルの着地によって洞窟全体にズシンと地響きが伝わるが、それを打ち消すかのようにアグナコトルは咆哮を響かせる。

アキラが突進を止め、その目を見ればそこには怒りの色が浮かんでくるのが見えた。

「怒り状態……っ」

さらなる攻撃に備えランパートを構えなおそうとしたアキラであったが、足と背中の中の痛み顔に顔をゆがめる。

体力はさほど減ってはいないものの、見えない炎による火傷の感覚がじわじわと広がっているようであった。

ルーメンとイーリスが動き始めたのを確認して、アキラはポーチに手を伸ばす。

少しポーチを探ると、アキラは赤い木の実を取り出しそのまま口に放り込んだ。

すると表現できない不思議な味が口の中に広がって行くが、それと同時に足に広がっていた感覚が徐々に抑えられてきた。

アキラが口にしたのはこの調査を開始して間もないころに見つけた『火消しの実』である。

火消しの実には『火属性やられ』と呼ばれる火傷とそれに伴う体力低下を抑える効果があり、またそれらに対する予防効果もある不思議な木の実であった。

前回、アグナコトルの熱線を受けた時は盾のおかげで火属性やられの状態にならなかったので使わなかったが、やはり取っておいて正解であった。

視線を戻せば先に動いていたルーメンとイーリスが、アキラが目標にされないように攻撃を続けているのが見えた。

「いつまでもここに居るわけにはいきませぬね」

苦笑を浮かべながら、アキラはランパートを構えなおしてアグナコトルめがけ突進を開始する。

ところが、アグナコトルは再び溶岩の中へと潜行しあつという間にその姿を溶岩の中に消した。

慌ててアキラは突進を止めてガードを固めるが、ルーメンやイーリスは武器をしまいきれしていない。

しかし、足に伝わる振動が危険を訴えている。

「二人ともよけて！」

アキラが叫んだのと地面が溶岩のしぶきがまき散らかせたのはほぼ同時だった。

警告に二人は回避行動に移るが、それに合わせるようにアグナコトルが溶岩の中から二人めがけ物凄い勢いで飛び出して来た。

「くっ」

「きゅっ」

イーリスとルーメンは飛びのいて何とかギリギリで回避をするが、煌めく体を回転させながら姿を現したアグナコトルもまた、そのまま溶岩の中へと消え去った。

飛びのいて何とか回避した二人であったが、安堵することなくすぐさまその場から離れようとする。が、それは間に合わなかった。

狙われたのはルーメンで置き上がった瞬間、目の前には溶岩がついた物体があった。

ルーメンがそれを『アグナコトルの背ビレ』と意識する間もなく、強烈な一撃が腹部を襲い次いで宙を舞った。

「かつ……」

肺の空気が押し出される様な感覚を感じながら、ルーメンはそのまま地面に叩きつけられゴロゴロと転がる。

「ルーメンさん！」

「ルーッ……！」

吹き飛ばされたルーメンを見てアキラとイーリスが叫ぶが、二人の目の前で再びルーメンの体が宙を舞った。

溶岩の海を自由自在に動き回って攻撃する。これこそアグナコトルの本当の怖さであった。

そして、再び宙を舞ったルーメンが地面に落ちて転がるが、アグナコトルはまだルーメンを逃すまいと嘴が地面から姿をのぞかせる。

そして、三度アグナコトルはルーメンの体に打撃を与えるべくその巨体を回転させぶつけた。

これらの攻撃で無納いつたのか、アグナコトルは少し離れた場所にその姿を現しこちらに振り返ったが、アキラはその隙を見逃さなかった。

「ヒュエトスさん！」

アキラは素早くランパートをしまうと閃光玉を投げつけた。

短時間で投げ続けるとその効果話薄くなるが、今はルーメンの救出が先である。

強烈な閃光が洞窟内に広がり、アグナコトルはうめき声と共に僅かに後退した。

それを確認することもなく、イーリスはルーメンに駆け寄りつて状態を確認し声を掛ける。

「ルー！しっかりして！」

「……イーリス……大丈夫だよ」

まるでボールの様になすすべも無く宙を舞って転がったルーメンであつたが、まだ意識はあつた。

しかし、呼吸をするたびに痛みが全身を襲っている。

アキラは視線をルーメンの防具に向けると、強固なレイアメールには所々にへこみが出来ていた。

おそらく、同じ攻撃をアキラが受けていたらこの程度では済まなかったであろう。

アグナコトルの動きに気を付けつつ、アキラはルーメンの治療に適した場所を探すために周囲を見渡す。

現在地はエリア中央から南東にずれた位置であり、先ほどまで身を隠していたエリア6への洞窟の近くであつた。

「とりあえず、あそこへ」

アキラはエリア6への洞窟を指差しながら、イーリスに指示するとアグナコトルへと駆け寄る。

もう閃光玉の効果も切れる頃で、ここで気を引かねば二人が危ない。



視界を奪われたアグナコトルはむやみやたらに熱線を吐いているが、幸いアキラ達がいる場所とは反対方向に連射している。

その隙に駆け寄ったアキラは、そのままランパートを腹部にこびりつく溶岩の塊に突き立てた。

「こつちだっ！」

アキラは気を引くように声を出しながら、連続でランパートを突き入れる。

それに対し、アグナコトルも声に反応してか熱線を止めて、腹部に居るアキラに噛みつくこうとするが、それをアキラはカウンター突きで返す。

カウンターの一撃に警戒したのかアグナコトルは一旦距離を取ると頭をぶるぶると振って細かな溶岩が巻き散らかる。

どうやら、閃光玉の効果も切れたらしいが、口からは未だに溶岩がこぼれ出ている。

『怒り状態……どのような手できますか？』

アキラの心の中での問いに答えるようにアグナコトルは行動を起こした。

アグナコトルは頭を持ち上げると鳴き声と共にアキラ目がけ高速で振り下ろす。が、アキラには届かなかった。

それは盾によって阻まれ、逆に腹部にカウンターを食らうことになったのである。

そしてアキラはサイドステップで直ぐにその場から離れた。

次の瞬間、アキラのいた場所より少し後方にアグナコトルの頭が振りおろされ、岩盤を突き破り溶岩をまき散らす。

『ついでには四連続が基本、前足注意！』

今までの観察から得た情報を元にアキラは危険を避けつつ、再びアグナコトルに接近し足もとに張り付く。

ルーメンとイーリスが前線から下がっている今、実質の一对一の状況にアキラはほぼ全ての意識をアグナコトルに集中させる。

アグナコトルの体表を覆う溶岩、その隙間から見える甲殻や鱗。そ

れらを繋ぐ皮とわずかににじみ出る耐熱性の体液。それらを感じ取りながらアキラはランパートを左後脚に突き入れる。

ランパートは軟化した溶岩を突き抜け、その下にある甲殻にあたり鈍い感触がアキラに伝わってくる。

すでに何度か得た感覚であるが、意識しての感じ取ればそれもまた変わって感じ取れる。

『甲殻は比較的柔らかいけど、わずかに鈍い物がある……耐火性の層？』

そう考えると今度はわずかに角度を変え、アキラはランパートを近くに突き入れ再びその感覚を自己分析する。

今度は先ほどよりも入りが弱い、鈍い感覚は少ない。

『いや、個体の成長過程の差が出ているだけか……っ！』

意識を感覚に集中するアキラであったが、アグナコトルが向きを変えたのに気づき視野を元に戻す。

視線を頭部に向けると口元からは炎が未だ漏れ出ておりに怒り状態であることを確認する。

もうしばらくはこの状態が続く……普通なら忌避される状況の中、アキラはただアグナコトルを見つめ、感じ取るうとしていた。

一方、アグナコトルはアキラの動きに業を煮やしたのか再び頭を持ち上げると今度は溶岩の中へと潜ってゆく。

それを見てガード態勢にアキラは素早く移行すると、鳴き声を上げながらアグナコトルは溶岩から飛び出して来た。

「ぐっ」

強烈な一撃がアキラを襲い、大きく後退させられ痛みをこらえるが休んでいる暇はない。

アキラは勢いがやまぬままに無理やりガードの態勢を後方に向けると、次の瞬間再び同様の衝撃がアキラを襲った。

『ガードが追いつかない……』

そう思いながら再び後方向きを変えたアキラの盾を3度目の衝撃が襲つ。

正直、一撃火力が高い熱線をガードした方がまだましなように感じながら、アキラは体力を削られながらも必死にガードをする。

本当は回避した方がいいのだが溶岩の中で高速で動きまわるアグナコトルのこの動きだけはそうそう簡単によけられるものではなく、下手に回避行動を取れば先のルーメンの様に連続で攻撃を食らうことになってしまう。

そして、4度目の衝撃が襲い気力で盾を後方に向けた時、アグナコトルが再びその巨体で地面を揺らした。

警戒するアキラであったが、口元から漏れている溶岩も収まっていることからアグナコトルの怒り状態も解けている事がわかった。

その事にアキラは思わず気が緩むが、あるうことがアグナコトルが再び頭をもたげ潜行を開始したのである。

「なっ!?!」

アキラは慌ててガードの態勢に入るが、今度は先ほどの様に耐えきる自信は無かった。

覚悟を決めるアキラであったが、視界の隅から小さい何かが飛んできた。

それが何かを確認しようとした瞬間、それは破裂して周囲にキーンと金属音の様な高い音をまき散らした。

耳をふさぐほどの音ではなかったが、潜行をしていたアグナコトルは音に驚いたのか飛び出して来た。

しかも、無理に飛び出たせいかバランスを崩して下半身が引っ掛かり、必死にもがいている。

突然のことに呆然とするアキラであったが、そこを軽い衝撃が連続して襲った。

「!?!」

痛みを覚悟したアキラであったが痛みはなく、逆に今までジワジワと響いていた痛みが消えていた。

何が起きたのかわからなかったが、不意に嗅ぎ慣れた匂いがした。

「……薬草?」

「大丈夫ですか？」

薬草の臭いに混乱するアキラの耳にイーリスの声が入り、視線をそちらに向けるとイーリスは弾の装填を終えアグナコトルを狙っていた。

それに気づきアキラもすぐさまランパートを構え直すとアグナコトルに視線を戻す。

元々はアキラを助けるのが目的であったのだろうが、アグナコトルが動けない今は攻撃のチャンスである。

アキラはアグナコトルとの間合いを詰めながら、後方から射撃をするイーリスの着弾地点を確認する。

そして、射線が被らないことに気をつけながらアキラは無防備なアグナコトルの背中にランパートの切っ先を突き刺した。

そして素早く引き抜くと先ほどと同様に上段付きに変え、確実にアグナコトルに着実にダメージを蓄積させる。

そして、三突き目の直後にアキラはおもむろに盾を構える。そして僅かに深呼吸をすると、勢いよくランパートを突き出した。

その一撃は見た目とは裏腹に今までの上段突きとさほど変わらない程度しか食い込まない。が、アキラはそのまま先ほどと同様に上段突きでの攻撃を続ける。

これは『キャンセル突き』と呼ばれるもので、簡単に言えば『カウンター突き』の簡易版である。

攻撃力、ガードできる時間は『カウンター突き』よりも劣るものの攻撃の出は早く、僅かであるが気合の入れ直しが出来るためそのまま突きによる攻撃も可能であった。

そのため、ランス使いの中では突進のみではなく『突き』と『キャンセル突き』の組み合わせで連続攻撃をする者も少なくない。

アキラが怒涛の連続突きをする中、イーリスもまたLv2通常弾を確実にアグナコトルの背中に命中させて行く。本当は反動の大きい状態異常弾で状態異常にして攻めたいところであったが、イーリスがないため直接のダメージを優先させざるを得なかった。

そして、イーリスがLv2通常弾の二度目のリロードを終えた時、アグナコトルは地面に半分埋まった巨体を引き上げ始めた。

アキラはこぼれおちる溶岩に気をつけながらもバックステップで距離を取り、隙を見て突きをアグナコトルに食らわせる。

一方、イーリスはポイズンギフトをしまい閃光玉と音爆弾に手を伸ばし、サポートの態勢に入る。

そして、地上にはいずり出たアグナコトルはそのまま息を吸い込み、先ほど怒り状態になった時の様に大きな咆哮を上げる。

距離を取っているイーリスはともかくアキラにはその衝撃が襲うはずであったが、アキラはそれを読み対策を取っていた。

アグナコトルが咆哮を上げた瞬間、盾を前に出し衝撃を受け止める。咆哮の拘束の要因が最初の威圧である以上、それさえ防いでしまえば後は圧倒的なポリウム咆哮に耐えるだけである。

そして、そのままカウンター突きの要領でランパートの切っ先をアグナコトルの左後ろ脚に突き刺しさらにアキラは追撃を加える。

イーリスもまた咆哮で首を振るアグナコトルの頭部と首にLv2通常弾これでもかと命中させてゆく。

一方的ともいえるこの状況下であるが、アグナコトルも当然なされるままにいるわけではない。

アグナコトルは足元のアキラを排除しようと、おもむろに全身を弓の様にしならせ体当たりの態勢を取る。

ガードをしたいところだが、攻撃の流れに乗っている今ではすぐにガード態勢に移れない。攻撃を続けていたアキラはそう判断し、カウンターの態勢に入る。普通のガードよりも受けられる威力は低くなるが直撃を食らうよりはずっとましである。

次の瞬間、力をためたアグナコトルの体当たりの衝撃がアキラを襲い、大きく後退させられ溶岩の縁まで追いやられた。

受けきれなかった衝撃と近すぎる溶岩の熱気にアキラの体力はほとんど削られて行くが、あの巨体を利用したこの体当たりばかりはたとえ万全の状態でガードしたとしても結果は同じであっただろう。

もつとも、このまま溶岩へ押し出されればどんな状態でも命は無い。しかし、アグナコトルはアキラから執拗に頭部を狙うイーリスに標的を変え、アキラを視線から外し熱線の発射態勢に移った。その隙にアキラはその場からエリア中央付近に移動し、ランパートを一度しまつて応急薬で体力の回復を行う。

イーリスも熱線の射線を読み、安全位置移動し弾の装填と射撃を続ける。が、すでにアグナコトルの表面の硬化が始まり頭部と腹部以外の煌めきが弱まって行く。

やはり、この表面の溶岩を何とかしない限り、まともなダメージは与えられないだろう。

一応、作戦はあるがここでするわけにもいかない。仕方なくアキラは未だに柔らかい腹部を攻撃しようと走り出そうとした時、アグナコトルはイーリスへの攻撃を止めると溶岩の川へと進み始めた。

その様子にアキラとイーリスは警戒しつつも淡い期待を抱いたが、それは現実のものとなった。

アグナコトルは溶岩の川を進み、全身がほぼ浸かる程度の所で頭を上げ潜り始めたのである。

それを見て二人はそつと肩にかかっていた緊張を解いた。それはアグナコトルがエリア移動をしたと言う事であった。

実際、アグナコトルに付けたペイント臭は西へ離れて行っている。

「ヒュエトスさん、ルーメンさんの様子は？」

フウと息をついたアキラはイーリスにルーメンの様子を聞くが反応がない。

「ヒュエトスさん？」

「あちらを見てください」

呆れ半分で答えるイーリスの先には走り寄って来るルーメンの姿があった。

少し顔色は悪い事と、レイアメールにキズが付いている以外は今まで通りの様子である。

「ルーメンさん大丈夫でしたか？」

「はい。このくらいならまだ大丈夫です」  
そう言っつてルーメンは笑顔を見せる。

実際はまだ鈍い痛みがあるのだが、ハンターをやっている以上はこの程度の怪我はある意味、当たり前である。

それに、またアキラに心配を掛けさせるわけにはいかなかった。

「ウロコトルがいたら話は別だったと思いますけどね」

ウロコトルがいればおそらく更に追撃を食らっていただろう。

そう考えるとあまり笑っている問題ではないのだが……と、考えるアキラであつたが不意に何かが気にかかった。

「……」

突然黙り込んだアキラにルーメンは話すのを止めるが、イーリスが少し急いだ様子で声を掛ける。

「ウエナートルさん。この後はどうします？」

「そうですね……」

イーリスの問いにアキラは考えるのを止め、鼻をいくつかせる。

硫黄の匂いの中に漂うペイント臭は山頂方面、おそらくエリア8から流れているようである。

普通ならば追撃と言ったところであるが、アキラの出した答えは違つた。

「エリア5で仕掛けましょう」

「という事は……」

「ええ、予定通りアレを使います」

アキラの判断にハンターであるルーメンとイーリスは素直に従つた。

というのもこれはあらかじめ決めていたことの一つであつた。

イーリス曰く現状の三人では火力不足らしいので、アキラが予めいくつかの計画を練っていたのである。

そのひとつにエリア8での戦闘は極力避けようと言つたものがあつた。と言つのもエリア8ではアグナコトルは先ほどの夜な潜行攻撃をまですしてこないのである。

おそらくエリア8が山から張り出した形であるため、潜行を行うと

すぐに突き抜けてしまったためかもしれない。

そのため、アグナコトルは基本的にエリア移動時にしかエリア8では潜行しないのである。

それだけ聞けば潜行しない分、楽なように感じられるがそれは硬化してしまつた後の軟化が難しいことも現している。火力が少ない三人で硬化状態の長いアグナコトルの相手をするのは少々きつかった。そのため、アキラ達は時間のロスを覚悟して少なくとも序盤のエリア8での戦闘は避ける事にしたのである。

当然、その空白時間のダメージ量を取り返すだけの事をエリア5でするつもりである。

「ヒュエトスさんはエリア3方面を、ルーメンさんは自分と一緒にエリア8方面を担当します」

アキラの指示にイーリスは頷くとルーメンに視線を向け、呆れたように声を掛ける。

「いつも言っているけど、無茶は程々にしなさいよ」

「分かっている！イーリスも気をつけてね！」

ルーメンのいつも通りの返答にイーリスは軽く息をつくど、そのまま歩き始めた。

そして、ルーメンもそのあとについて行くが、アキラは足を止め一度エリア7を見渡す。

先ほどまでの戦闘の形跡が残る以外は普段とあまり変わらないようだが、どこかが、何かが違う気がする。

それは、先頭を始める前よりも……いや、ベースキャンプを出てきた時よりも徐々に強くなってきた。

「……………」

しばらく見渡していたアキラであったが、ルーメンの後を追う様に無言で歩き出す。が、その表情にはどこか悲しげであり、悔しそうなものが見えた。



同じ頃

「船長！風に乗りました！」

数人しかいない乗組員の声が、この飛行船の船長兼操舵手の耳に入る。

その乗組員が言う通り、飛行船の速度は徐々に上がり始めていた。

「良くやった！後はロープや帆に異常がないか確認してくれ！」

船長の指示を受け、乗組員たちは見張りを除いて再び作業に戻る。

その様子を確認し、船長は自身の隣にいる人物をチラリと見る。

急ぎのため風に乗った船体が左右に揺れる中、その人物は平然としており目深にかぶった帽子によってその表情は見えない。

更に、一見すればどこかの舞踏会に行くような正装姿であるその人物は、明らかにこの飛行船内で浮いていた。

しかし、船長は『そんな事』として気にすることなく声を掛ける。

「何でまたこんなに急ぐんで？」

今から彼らが向かうのは先日、訪れたばかりの所であそこには隣の人物の関係者一人とハンターが二人いる。

ここ半月で何度も顔合わせしているため彼らともだいぶ親しくなっており、急にその場所へ急ぐことになって正直、船長自身が驚いていた。

「どうやらこれから向かう所の近くにアレがいるのが確認されたよううで……」

「アレ？」

風で僅かに揺れる船体のバランスを取りながら船長は頭の中を整理する。

彼はその腕と運の良さを買われ、主に僻地への物資運搬やハンターの移動の手伝いをしている。

それ故、様々な話を聞くことも多く、まれにギルドでも機密級の話の断片を耳にはさむこともあった。

そして、その情報の中で隣の人物、ギルドの役人の一人であるギルドナイトがこうまで急ぐ理由になりそうなものは……

「まさか……」

そこまで考え船長の表情が蒼白になる。

もし、考えていることが本当だとすれば、一介の調査員とハンターである彼らでは命を落としかねない。

船長は操舵を握り直すと自分の持ちうる技術と経験を信じ、トリニ―サ火山への最速コースへと船体を乗せていった。

## Quest 5 大山、鳴動す（後書き）

### 次回予告

本格的なアグナコトルの調査を開始するも決定打をつかめないアキラ達。

しかし、3人ともエリア5での再戦に意欲を燃やすその理由とは……

## Quest 6

ソウフジユウラン  
鎗斧銃乱

Q u e s t 6 鎗斧銃乱(ソウフジユウラン)(前書き)

締め切り優先のかなり急ぎ足で書きました。

そのため、後半がかなりのハイペースになってしまいました。

## Quest 6 鎗斧銃乱(ソウフジユウラン)

アグナコトルを待ち伏せるためにエリア5に移動したアキラ達は直ぐに予定通りの準備に入った。

とは言ってもイーリスは直ぐにエリア3に続く道を目指し、アキラとルーメンはエリア全体を確認する。

エリア内には数匹のブナハブラとリノプロスがいるが、イーリスはそれらを刺激しないように注意して進みアキラ達もすぐにエリア8へ続く洞窟に入った。

とは言ってもアキラとルーメンは洞窟に入ってすぐの所で足を止め、近くで掘り出した鉱石でカモフラージュした布を取り払った。

因みに、これらの鉱石は採掘前の状態だと様々な鉱石の塊だった。

なぜそうなるかは詳しくは分から無いが、恐らくトリニーサ火山を初めとする周囲の溶岩が関係していると考えられる。

実際、この周囲では鉱石の等の塊が誕生と消滅を数時間単位と言う速度で行っている。

その勢いは凄まじく、丸一日働こうと考えた鉱夫が大量に持ち込んだピッケルを限界まで使っても半日ですべて使い切ったと言う噂もある程である。

それはモンスターだけではなく、この火山自体も生きていると言うことの表れなのかもしれない。

噂話を思い出し、思わずそう考えてしまったアキラであったが、あらかじめ用意していた道具が姿を見て集中し直す。

そして、その中からアキラとルーメンは応急薬と携帯用砥石、そして巨大なタル『大タル爆弾G』を取り出した。

火力不足の三人の場合、一番厄介なのはアグナコトルの体表に付いた溶岩である。そこでアキラは大タル爆弾Gを使い初戦で体表の溶岩そのものを剥ぎ取ることにした。

大タル爆弾Gとはその名の通り大タルの中に爆薬を詰め込んだもの

であり、『G』の名がつくものは『カクサンデメキン』を使って更に爆発力を強化したものである。

その破壊力はハンターが使う道具の中でも最高クラスの物であった。もつともアキラの本音としてはあまり爆弾を使いたくないのだが、今回はかりはわがまを言っているわけにはいかない。

しかし、この大タル爆弾Gの欠点は大きいため運べる量が少ない上に、一度安全ピンを外すとちょっとした衝撃で爆発してしまうため再設置が不可能なことであった。

一応、今までの観察でアグナコトルは一定周期で決まったエリアを巡回していることが分かっており先回りすることは可能であるが設置となると少々難しい。

罾を併用することも考えたが、今回の目標を捕獲にしているため掛かるたびに拘束時間が短くなる罾の消費は極力抑えたかった。

そこでアキラはあるチャンスを利用することにした。

「準備はこれでいいですね」

「はい。あとは……」

準備を終えたアキラとルーメンは唐突に話を止め、周囲に神経を張り巡らす。

そして、一呼吸分の間を置いて二人はそれぞれ二つの大タル爆弾Gを抱え出口へと走りだした。

薄暗かった洞窟から外に出たことにより、目が順応できずに一瞬視界がふさがれるが気にする事は無かった。

というのも出会ってからずっと定期的に付け続けているペイントの匂いが、アグナコトルの場所を教えてくれている。

そして、目が外の明るさに慣れてくると、視線の先に煌めく溶岩を纏ったアグナコトルの姿があった。

アグナコトルはのしのと数歩歩くと立ち止まり、おもむろに小高くなった地面に向かい嘴を突き立てた。

同時に最後の断末魔ともいえるリノプロスの鳴き声が耳に入ってくる。

リノプロスは全身を動かして必死に抵抗するが、腹部に開かれた大きな傷とそこから流れる血の量を見ればもう残された時間は少ないのがわかる。

あのリノプロスはおそらくこのままアグナコトルの糧となるのだから。

実際、アグナコトルはリノプロスの抵抗を気にすることない。

開かれた傷口にその嘴を突き立て、肉を引きちぎり、内臓ごとむさぼる。

弱肉強食。自然の摂理が垣間見える瞬間であるが、この時こそアキラが待っていたチャンスであった。

アグナコトルを始めとして、大型の肉食モンスターは食事の最中はハンターに対する注意が薄れる。

これには様々な理由が考えられるが、おそらく食事という生命活動の維持を優先させるためである。

食事中は若干無防備となるが、多少の傷よりも食事をして得られる効果の方が大事と考えているのかもしれない。

案の定、アグナコトルは直ぐにアキラやルーメンに気づいたが迎撃する様子もない。

「イーリス！」

その時、後ろを走るルーメンが反対側、ちょうどエリア3方面からやって来たイーリスに声を掛ける。

イーリスもまた大タル爆弾Gを二つ抱え走って来る。

3人は食事に夢中のアグナコトルに気をつけつつ、事前の話し合い通りに尻尾の付け根付近に大タル爆弾Gを置きすぐさま安全ピンを抜く。

「ヒュエトスさん！」

身の丈はある尻尾のせいで姿が見えないためアキラはイーリスに声を掛ける。

すると返事の代わりに『シュツ』という、何かがかすめる音がした。それはイーリスが起爆用の小型の時限爆弾である『小タル爆弾』に

点火した音であり、それを合図にアキラとルーメンは急いでアグナコトルから距離を取る。

その場に居ればアグナコトルともども確実に爆発に巻き込まれるだろう。

アキラはある程度距離を取るとランパートを構え衝撃に備え、その後ろにルーメンが体を隠す。

次の瞬間、『ボンッ』という小タル爆弾の爆発が起こり、続けて仕掛けられた6つの大タル爆弾Gが次々と誘爆し、その衝撃波が盾越しにアキラに襲いかかり重圧がかかる。

「クッ」

きつくないわけではないが一瞬で通りすぎる分、アグナコトルの熱線と比べれば大したことない。

しかし、近距離で大タル爆弾Gの直撃を食らったアグナコトルの方は違った。

爆発……いや、大爆発に巻き込まれたアグナコトルは悲鳴の様な鳴き声を上げ、食事を中断せざるを得なかった。

また、この大爆発で尻尾の溶岩はからめ取っていた突起ごと吹き飛ばされ、背ビレを中心に胴体に張り付いていた溶岩もその大半が無くなっていった。

そして、衝撃波が通りすぎると、ルーメンは直ぐにアキラの影から出てアグナコトルに向かって走る。

狙うは無傷の足であるが、再び爆発音が聞こえた。

視線を音の方に向けると、アグナコトルの腹部付近から煙がつつすらと見える。

「イース！」

ルーメンが声を上げるが、それはアグナコトルの咆哮によってかき消される。

視線をアグナコトルの頭に向けると口から炎が漏れ出ており、怒り状態になっていることが分かった。

すると、ルーメンはすぐさま左後ろ足にバンカーバスター攻を叩き



つける。

アグナコトルが怒り状態でイーリスの状況が分からない以上、こちらに気を引く必要があるとルーメンは判断したのである。

しかし、アグナコトルはルーメンには目もくれず嘴を地面に突き刺し、地面に一気に潜行して行く。

その勢いは凄まじく、離れた位置のアキラまでその振動が伝わってくる。

「ルーメンさん！ヒュエトスさん！」

地中からの強襲に備え、アキラは二人に注意を促しつつ自身もガードを固める。

ルーメンはバンカーバスター攻をしまい、姿が見えなかったイーリスもすでにポイズンギフトをしまっている。

三人とも感覚を研ぎすませ強襲に備えるが、潜行したアグナコトルの気配が僅かに離れた場所に現れる。

「えっ！？」

「なんで！？」

「しまった！！」

意外な状況にアキラとルーメンは驚きを隠せないが、イーリスは顔をしかめアグナコトルめがけ走りだした。

そんな三人をよそにアグナコトルは地上にその姿を現すが、それは上半身だけであった。

「走って！」

三人の中でただ一人、アグナコトルと対峙したことのあるイーリスが叫ぶとルーメンもアグナコトルに向かって走り出す。

アキラもランパートをしまつて走ろうとするが、アグナコトルが嘴から炎を漏らしながらバシバシとかち合わせ始めたのを見た。

間に合わない。そう判断したアキラは覚悟を決めた。

「二人とも気にせず頼みます！」

アキラはそう言うと言ランパートを支えにガードを強化する。

「アキラさんっ！」

気づいたルーメンが叫ぶのと同時にアグナコトルは口から熱線を放った。

その勢いは凄まじく、下半身を地面に埋め固定されているはずのアグナコトルの巨体が強靱な背ビレも相まって反動で岩盤を壊す。が、アグナコトルは前足を使ってこらえるとアグナコトルはそのまま首を大きく振りまわし始めた。

それにより熱線の軌道は代わり、アグナコトルの前方を薙払う様に軌跡を描き触れた物を破壊せんと暴れ回る。

「ルー！」

イーリスの声にルーメンはアキラの方から意識を自身に戻すと、薙払われた熱線が迫っているのが見えた。

その瞬間、以前アキラにかばってもらった時の記憶が思い浮ぶ。

痛みと恐怖、あの時の嫌な光景がよぎるがルーメンは足を止めなかった。

「このおおお!!」

恐怖を振り払う様にルーメンは声を上げ、前転するようにして熱線の下にその身をくぐりこませた。そして次の瞬間、ルーメンの上を嫌な熱気が一気に通りすぎていった。

「ハア、ハア……っ」

無事を通りすぎたことにルーメンは安堵した。

今回アグナコトルに挑む際、イーリスに一通りアグナコトルの行動パターンを聞いていたが、実際にその場で対応するのはわけが違う。

『アグナコトルが上半身だけを出した場合は懐に潜り込む』聞いて注意されていたはずなのにすぐには動けなかった。

同じ様なことを何度も経験しているとはいえ、こればかりはまず直らないだろう。

視線を上げれば、イーリスが動けないアグナコトルに対して新たに調査したのである。毒弾を撃っているのが見えた。

アキラが気になり振り返ろうとするが、アキラの「気にするな」という言葉を思い出し、ルーメンはそのままアグナコトル向かって走

り出した。

一方、アキラはガードしたとはいえ熱線の直撃を食らっていた。

「クツ……」

痛みをこらえ、アグナコトルの行動を思い出す。

アキラは雑払われた熱線によって物凄い衝撃に襲われ、大きく後退したのである。

熱線は以前と違い一瞬で通りすぎたが、全身を襲った衝撃と熱は前回と変わっていない。

痛みをこらえ、アキラは先ほど補充した応急薬に手を伸ばし回復に努める。ふとエリアを見渡すが、そこにはついさっきまでの光景は無かった。

エリアにあった二つの石柱は砕かれ、飛びまわっていた数匹のブナハブラは僅かな破片を残し四散した。

「聞いていたとは言えっ……やはり、アグナコトルはすごい」

痛み表情がゆがみ、声が震える。が、アキラの心にはある感情が芽生え始めていた。

「うおりゃあああああああああー！」

耳に入ってきた大声にアキラは考えを止め、意識を声のした方向に向けた。

そこには、無防備なアグナコトルの胸に剣モードにしたバンカーバスター攻を突き刺して属性解放を強行するルーメンがいた。

しかし、アグナコトルはさほど気にした様子もなく、ゆっくりとその体を地面からはいずりだす。

その動きに合わせルーメンはバンカーバスター攻ごと引きずられるが、静かに、だかっしかりとした声を上げる。

「トリア……」

バンカーバスター攻の刀身が中央部で開きガタガタと小刻みに揺れ出す。

「デュオ……」

その揺れに応じて突き刺さったバンカーバスター攻は徐々にその刃

を深く差し込んで行く。

「ヘン……」

揺れが大きくなり、傷口から血とは別に黄色に着色された麻痺毒と光があふれだす。

「ミデン！」

その瞬間、アグナコトルの腹部が爆音と共に黄色い閃光と衝撃を放った。

その衝撃にイーリスはバンカーバスター攻を持って大きく後退し、バンカーバスター攻は斧モードへと変形した。

また、アグナコトルも悲鳴のような鳴き声を上げ、全身を大きく震わせひるんだが、更にアグナコトルはそのまま小刻みな痙攣をして硬直した。

どうやらバンカーバスター攻に仕込まれた麻痺毒が神経を侵し始めたらしい。

「イーリス！」

バンカーバスターを構えなおすルーメンが喜びの混じった声を上げるのとほぼ同時に、イーリスはアグナコトルの頭部の真横についてガンキンコートを利用し体を固定する。

そこはアグナコトルとの距離はほぼ零距离で、ガンナーとしてはまず自らは決して入りに行く様な間合いではない。

そう、ある弾を除いては……

イーリスはポイズンギフトの銃口を動かない頭部に向けると全身を引き締め引き金を引いた。

すると『キュウウウ』という吸気音と共に、トロペクルガンの銃口からバーナーの様に炎が赤から青へと変色しながら噴き出し始めた。「吹き飛びなさいっ！！」

イーリスがそう言った瞬間、銃口から1、2メートル程の空間が連鎖的に爆発を起す。

これこそイーリスの最大の切り札、『竜撃弾』である。

竜撃弾はここ数年で開発された弾で通常弾と同様にLV1 LV3



大きく頭を振り上げ数歩後退した。

痛みかはたまたは僅かに残る麻痺毒にかは分らないが、アグナコトルは苦しそうに鳴き声を上げる。

「やりましたね！」

「ルー！まだ油断しないの！」

作戦通りアグナコトルの体表の溶岩を落とし喜ぶルーメンに、イーリスは本来の距離を取りながら注意する。

アキラはルーメンに頷きながらイーリスの言葉もその通りだと受け止めた。

確かに厄介な溶岩をはぎ落とせたが、それはまだ一部で急所である腹部と四肢に強固な鎧となる溶岩が残っている。

そして、視線を上げればアグナコトルの目には怒気が満ちており、口からは炎が漏れている。

アグナコトルは姿勢を低くすると後ろ脚を蹴ると突撃を始めた。

ルーメンとイーリスはその場から離れ、アキラは盾を前に掲げる態勢を取る。

そこへアグナコトルの巨体が滑り込みものすごい衝撃がアキラの盾を襲いかかる。

その衝撃でわずかに体制が崩れるものの、アキラは体勢を立て直すところからカウンターによる突きを行った。が、その一撃がアグナコトルをとらえる寸前で巨体は通り過ぎて空を切ってしまった。

「くっ、早い……」

カウンターが空を切ったことにアキラは少し表情をゆがませるが、その表情は直ぐに消え逆に去り小さな笑みが浮ぶ。

空を切ったと言う事はそれだけアグナコトルの突撃が早かったことを意味しており、体長を調べればおおよその早さを知ることでもできる。

徐々に気分が高揚していく中、アキラが振り返ると後方で体を停止させたアグナコトルに対し、イーリスとルーメンが攻撃を加えていた。

溶岩の鎧が取れた分、アグナコトルに対しての攻撃も気分的に余裕で始めているがまだ残っている部分への攻撃は止めない。

そこへアキラも加わり、3人でアグナコトルの四肢へ集中的に攻撃を加えて行く。

アグナコトルも三人を振り払おうと噛みつきとそれに伴う尻尾による攻撃、体当たりにも上半身のプレスを行うがことごとくかわされるか、カウンターを食らう始末であった。

そこで再び地中からの強襲をしようとしてかアグナコトルは嘴を突き立て潜行を開始する。

「逃がしませんよ！」

「ルー離れて！」

アキラは潜るために固定された後ろ脚を狙い、イーリスもルーメンに退避を呼び掛けつつアキラとは別の後ろ脚を狙う。

しかし、武器をしまいながら退避を終えたルーメンが振り返ればアグナコトルの尻尾が姿を消すところであった。

「アキラさん！イーリス！」

すでに武器をしまい自由に動ける自分に対し、近距離に居るアキラと武器をしまい終えていないイーリスは危険である。

するとルーメンが声を掛けたのに合わせるかのようにアグナコトルは一瞬だけその姿を現す。

そして、アグナコトルは強靱な背びれで地表を切り裂き、溶岩をまき散らしながらイーリスに向かって突き進む。

「ッ！」

狙われたイーリスは武器をしまう時間がないと判断し、アグナコトルの動きに注意しながら前転移動の準備をする。

下手に動けばアグナコトルに進路を変えられ当たるのが落ちである。イーリスは以前の狩猟の時も思い出し、アグナコトルをひきつけその場から前転で移動し攻撃を回避した。

一方、アグナコトルはイーリスがいたところを通過すると再び地中にその姿を一度消したが、すぐに地表へ飛び出して地面に着地する

とアキラたちの方を向く。

その間にイーリスは距離を取り、アキラとルーメンはアグナコトルとの距離を詰める。が、アグナコトルは再び潜行し、二人に対して先ほどルーメンを負傷させた回転しながらの突撃を開始した。

「アキラさん！」

「気にせず回避に専念を……っ」

ルーメンの注意にアキラは答えようとするが、そこにアグナコトルが全身を回転させながら突っ込んできた。慌ててアキラは横へと避けるが、油断はできない。

盾で次の攻撃に備えるが、次に現れたアグナコトルはあらぬ方向へと飛び出していった。

「なっ!?!」

その行動にアキラは戸惑いを覚えるが、アグナコトルが飛びかかる先を見てすぐに本当の目標が分かった。

アグナコトルが向かうその先には……

「イーリス！」

アキラ同様、アグナコトルの目標がイーリスであることに気づいたルーメンが声を上げるが、アグナコトルはイーリスのすぐそばまで迫っていた。

しかし、焦る二人とは裏腹にボウガンを構えていたイーリスは冷静に行動を起こした。

アグナコトルがアキラを通りすぎて初めて地面に潜ると、その場から先ほどと同様に前転で脇に移動する。

すると、再び姿を現したアグナコトルは先ほどまでイーリスがいた場所の空を切って通り過ぎていった。

アグナコトルが今回の攻撃に入って4回目の潜行を確認すると、イーリスは直ぐにその場から脇へと前転し、姿を現したアグナコトルの攻撃は再び空を切った。

「流石、イーリス！」

イーリスの様子に称賛を贈るルーメンであったが、隣に居たアキラ



は直ぐに異常に気づいた。

「ルーメンさん！飛んで！」

アキラがそう叫ぶや否や、二人の足元が一気に隆起し二人を空へと放りあげようとする。

「うそっ！？」

「このっ！」

ルーメンは突然の事態に驚き、アキラもその場から飛びのこうとする。が、隆起した地面から姿を現したアグナコトルに二人は吹き飛ばされた。

二人はなすすべもなく宙を舞い、地面に叩きつけられる。

「ぐっ……う」

「いつっ……」

その衝撃に二人は声を漏らすが、ルーメンは痛みをこらえずぐに立ち上がる。

しかし、アキラの場合は防具がレーザーシリーズであることもあってか、ダメージが大きいらしく何とか立ちあがるのが精一杯であった。無論その隙をアグナコトルが見逃すはずもなく、アグナコトルはアキラに目標を定めると姿勢を低くし突進の姿勢を取る。

アキラはそれに気づき、ガードをしよう。そう思った瞬間、視界の隅から何かが飛んできたと思うとアグナコトルの正面で強烈な閃光が走った。

「っ！？」

いきなりの出来事にアキラの視界が一時的に失われ、少しすると何かがアキラの手を引っ張った。

「ウエナートルさんこっちです」

その声と共に僅かに戻った視界にはイーリスの姿があった。どうやら先ほどの閃光玉は彼女が投げたもので、閃光でアグナコトルがひるんだ隙に助けてくれたらしい。

振り返れば、ルーメンがアグナコトルと対峙して意識を引いているのが見えた。

アグナコトルの方もまた数回にわたる閃光に慣れたらしく、ただ暴れるのではなくすぐに視界を取り戻しているようだった。

「大丈夫ですか？」

イーリスの問いにアキラは視線を戻し答える。

「はい。多少は痛みがありますが、このくらいなら少しすれば大丈夫です」

腕や足を軽く動かし確認するアキラの答えにイーリスも納得したらしく、僅かに安堵の表情を浮かべる。

しかし、アキラの表情は先ほどの答えとは裏腹に少々、気分を害しているようだった。

「ただ、助けてもらっておいて言うのもなんですが、閃光玉を投げるなら声を掛けてください」

成功したから良かったものの失敗すればアキラはアグナコトルの姿を確認することなくその巨体に撥ねられることになっていただろう。しかし、アキラの抗議に対しイーリスはさほど気にしていなかった。

「あなたならガードが間に合うのでは？」

「それは……」

二人の間に僅かな沈黙が流れる。が、それはイーリスによって直ぐに終わった。

「ロックラックに戻ったら少しお伺いしたい事があります。よろしいですね？」

「……………」

イーリスの問いにアキラは無言で答えた。

そうなる事を予想していたのかイーリスは軽いため息をつく、そのままルーメンのいる前線へと戻る。

アキラもまたそれに倣う様にアグナコトルに対して駆け寄ってゆく。が、二人の動きはそこで止まった。

二人が戦線に入ろうとした時、アグナコトルはおもむろに潜行を開始したのである。

三人は強襲に備え身を構えるが、アグナコトルについたペイント臭が徐々に西南西の方へと遠ざかって行った。

「どうやら、アグナコトルはエリア移動したらしい。」

「思わず胸をなでおろす三人であったが、ペイント臭が徐々に薄くなつていき完全に消えてしまった。」

「アキラさん……」

アキラに話しかけるルーメンの顔には若干の不安な様子が見えた。それに対し、アキラは努めて笑顔で答える。

「大丈夫ですよ。先ほどの臭いから考えればおそらくアグナコトルはエリア6に向かったはずですよ」

今いるエリア5から西南西の方角でアグナコトルが向かうとすればそのエリアしかなかった。

「もつとも、アグナコトルがそちらへ向かう事はそうそうないので少々不安な面はある。」

「とりあえず、次に会ったらペイントをし直しましょう。後は……」

「あ、そうじゃなくて、アグナコトルの事なんです」

割って入って来たルーメンの言葉にアキラは首をかしげる。それはイーリスも同様で残弾の確認を中断していた。

「どうかしたんですか？」

アキラの問いにルーメンは少し悩んで口を開いた。

「勘違いかもしれないんですけど……アグナコトルは何か気づいて移動したみたいなんです」

「なにかに？」

「はい、うまくは言えないんですけど……」

「そう言つてルーメンは喋るのを止め、アキラとイーリスの様子を見る。」

アキラは何かを考えて始め、イーリスも残弾の確認を終えるとルーメン同様アキラの方へ視線を向けた。

すると、考えがまとまったのかアキラは二人に視線を向ける。

「もしかしたらアグナコトルはウロコトルと呼ばれたのかもしれないま

せんね」

アキラはそう言ってランパートを砥石で研ぎ始め、話しを続ける。

「ウロコトルやアグナコトルが嘴を使ってコミュニケーションを取ると言う話は聞いたことがありますよね」

「えっと……」

「少しですけど……」

少し戸惑う二人の様子にアキラは苦笑するが、すぐにイーリスが続けた。

「でも、あれはまだはつきりしたものではありませんよね」

確かに、あくまでもアグナコトルやウロコトルが嘴を鳴らしてコミュニケーションを取っているのではないか？と言われている程度で確認と言うわけではない。

しかし、アキラにとってそれはさほど気にする事ではなかった。

「ヒュエトスさんの言う通り、確認と言うわけではありませんが、それが本当かどうかを確認するのも自分の仕事ですので」

ランパートを研ぎ終わるとアキラは軽く笑いながらエリア6への洞窟に目を向ける。

もし、ルーメンの言うこととアグナコトルのコミュニケーションが本当なら、エリア6にはウロコトルがいるはずである。

足を速めるアキラの後に二人も続いて歩き始めた。

それから数時間後、火山の裾野の一部にアグナコトルの咆哮と3人の調査員とハンターの声が飛び交っていた。

すでにこのエリアに入ってからの戦闘はだいぶたっており、一進一退……いや、アキラ達が徐々に押され始めていた。

「最初に気を張り過ぎましたか……」

ルーメンとイーリスに目を向ければ双方、肩で息をしております共に辛い状態であるのが良くわかった。

そして、思わず最初にこのエリアに入つて来た時の事を思い出す。ペイントが切れたことを心配しつつアキラ達がエリア6に入ると、そこにはアグナコトルと一頭のウロコトルがおり、二頭は互いに嘴を鳴らし合わせていた。

特にアグナコトルはまるでトリニ―サ火山全体に響かせるように鳴らしている。

「どうやら、あの話は本当だったみたいですね」

貴重な様子に喜ぶアキラであったが、その声が届いたのかアグナコトルはアキラ達を振り返ると今まで同様、咆哮を上げた。

距離があるため咆哮による拘束もなく、それを合図にアキラとルーメンは駆け出し、イーリスはポイズンギフトを構えた。

近づいてくるアキラ達に対し、アグナコトルは『バチン』と嘴を一度だけ鳴らすと、ウロコトルはまるでそれを合図にしたかのように地面へとその姿を消した。

「ルー！ウエナー！トルさん！ウロコトルに警戒を！」

それが、この状況に至った元凶であった。

3人はそれぞれ足元からのウロコトルの強襲に備えながらアグナコトルとの戦闘に突入したのである。

そのため、通常よりも気を張った状態の戦闘が続いてしまい、『ウロコトルはこのエリアから去った』と言うことに気づくまで3人は余計に気を張ってしまったのである。

その後、何とか後ろ脚を破壊すること成功はしたものの、それでもアグナコトルは手ごわくアキラ達は苦戦を強いられていた。

「アキラさん！」

ルーメンの声にアキラは回想を止め、意識を現実に戻す。

現実に戻ったアキラが見たのは潜行して行くアグナコトルの尻尾であった。

アキラは苦い表情を浮かべ、ガードを固める。が、その時アキラはある事を思い立った。

アグナコトルが潜行したと言う事は……

「ヒュエトスさん！麻痺弾を！」

次の瞬間、地面を割くように突き進んできたアグナコトルがアキラの盾にぶち当たった。

その衝撃にアキラは後退しかけるも耐え、後方に抜けて行ったアグナコトルに備えガードする向きを変える。

アグナコトルは二度、三度とアキラに襲いかかり、アキラのガードも限界に達しようとしたが、アグナコトルは攻撃を止め地上に出てきた。

その事にアキラはホツとするが、それを打ち破るようにトロペクルガンの独特の発砲音が響いた。

イリスが僅かに後退しながらも打ち出された弾丸はアグナコトルに命中し、ルーメンのバンカーバスター攻の麻痺毒と同じ様な黄色い煙を出す。

アグナコトルはその攻撃に気を取られイリスに向きを変えるが、その隙にイリスはもう一発のLv1麻痺弾を打ち出す。

Lv1麻痺弾はマヒダケとカラの実を調合させた弾丸で、カラの実ではなくカラ骨【小】を用いたLv2麻痺弾に比べると麻痺毒の蓄積量は多くはないが量を多く持ちこめた。

そして、イリスがLv1麻痺弾の再装填に入り、アグナコトルが狙うがそこにルーメンが割って入る。

ルーメンはアグナコトルの懐に入り込むとバンカーバスター攻の抜刀と同時に剣モードに変形させ切りつけた。

「ええええい！！」

ルーメンはそのまま振り上げと振りおろしを交互にしてアグナコトルの胸部を切りつけ、その時々麻痺毒が散り麻痺毒を蓄積させてゆく。

そのルーメンが邪魔に感じたのかアグナコトルはイリスを狙うのを止め、ルーメンを押しつぶさんとおもむるに後ろ二本足で立ち上がった。

「やばっ！」

アグナコトルの行動にルーメンは慌ててその場から前転で移動する。そして、前転で移動し終えた瞬間、ルーメンの後ろでドシンツという音と共にアグナコトルの巨体が叩きつけられた。

イーリスはルーメンが無事に避けた事を安堵しつつ、再び狙いを絞りアグナコトルにLv1麻痺弾を撃ち込む。

すると今度はアキラが胸部を狙うべくアグナコトルの懐に入り込み、ルーメンは尻尾の方へと回り込んで切りつける。

アグナコトルは噛みつきとそれに伴う尻尾の反動で散らそうとするが、アキラはカウンターを決めルーメンは回避をして一時的に離れた。

ルーメンが居なくなった隙についてアグナコトルは後退をして距離を取るうとする。が、アグナコトルは低いうめき声を上げると同時に唐突に動きを止めた。

それは、イーリスの放った何度目かのLv1麻痺弾がアグナコトルに命中し、麻痺毒がまわった瞬間であった。

イーリスは動きの止まったアグナコトルの腹部に近寄るとガンキンコートで体を固定させ、Lv2竜撃弾の発射態勢に入る。

一方、ルーメンは邪魔にならないように頭部へと目標を変え、アキラはイーリスの邪魔にならないように腹部へランパートを突き入れる。

「いきますよ！」

イーリスの掛け声を受け、アキラはバックステップで距離を取るとトロペクルガンが火を噴いた。

連続した爆発がアグナコトルの胸部を覆うが、まだ溶岩がついたままである。

反動を耐えたイーリスは直ぐに引き金を引くが、溶岩の色が序々に変わり始め硬化し始めたのが分かった。

しかも、先ほどのアグナコトルの麻痺時間を考えるとこれが最後の一撃である。

「吹き飛ばす！」

2度目の爆発がアグナコトルの胸部を襲った瞬間、アグナコトルは麻痺と言う拘束から解放された。

そして、爆風が消えると全身を振わせるアグナコトルの胸部には、僅かな罅ひびの入った黒く冷えた溶岩だけがあった。

胸部の破壊を失敗し、イーリスは悔しげな表情を浮かべる。

「クツ……」

「うおおおおお!!」

後は地道に狙うしかないとイーリスは考え距離を取ろうとした時、後方からアキラが雄叫びと共にその姿を現した。

アグナコトルは未だに全身の確認をいっており動いてはいない。その隙にアキラは特攻とも言うべき突進を掛けたのである。

アキラが狙うのはイーリスが作り出した僅かな罅。そこをめがけ、アキラはランパートの切っ先をガツンと言う音と共に突き入れる。

「いつけええええ!!」

罅に突き入れるや否や、アキラは突進の残る勢いと共に全ての力を左腕に、ランパートへと伝えフィニッシュ突きをする。

ビシリ

何かが割れる音がすると、僅かに入っていた罅は一気に固まった溶岩全体へと広まる。

次の瞬間、アグナコトルは悲鳴様な鳴き声と共にのけぞり、胸部の溶岩がバラバラと血を身き散らせながらに砕け散った。

「やったあ!」

「よしっ!」

「油断しないで」

喜ぶアキラとルーメンをなだめるイーリスであるが、アグナコトルへの照準を合わせる彼女もまた笑みを浮かべていた。

そして、アキラはランパートを持ち直すとガラ空きの腹部に、ルーメンは頭部を目指し総攻撃を加えるべく行動を始める。



しかし、アグナコトルは不利を察してか、おもむろに潜行をしてエリア移動してしまった。

「まあ、後少しなのに！」

ペイント臭が遠ざかるのを感じながらルーメンは地団太を踏む。

しかし、その横顔には疲労の色が見えており、それはイーリスやアキラも同じであった。

「かなり応急薬や回復薬も使いましたね」

回復薬を飲み終えたアキラがイーリスに声を掛ける。

「ええ、ルーは多分もう残っていないと思います」

答えながらイーリスは未だに地団太を踏むルーメンにため息をつきながら近寄る。

そして、おそらく残り少ない回復薬を小言共に渡した。

ルーメンはそれを受け取ると、思い出したようにアキラに声を掛けしてきた。

「アキラさんは大丈夫ですか？」

「大丈夫です。それに次は捕獲を試します」

「それは……」

アキラはルーメンに答えながらペイント臭を追って歩き出すが、同じ様に歩きだしたルーメンが言葉を濁す。

確かにダメージは与えているだろうが、果たして捕獲できるまで弱っているか不安があった。

モンスターを捕獲するには拘束するための罠と、大人しくさせるための捕獲用麻酔薬を用いた捕獲用麻酔玉か捕獲用麻酔弾を使う必要がある。

しかも、麻酔の効果を発揮させるにはモンスターをある程度弱らせておく必要があった。

そんなルーメンの肩をイーリスが叩く。

「アグナコトルはだいぶ弱り始めたみたいだし、やってみる価値があると思うわ」

ここまで来たのだ、普段の狩りよりも長い今までの攻防を考えれば

弱っていると信じたい。

それに、万が一失敗しても予備の罾や捕獲用の麻酔はまだあるので再挑戦もできる。

「イーリス……うん！」

後ろから聞こえてくる二人の会話が終わったことを確認し、アキラは一息つくくと振り返る。

「では、ルーメンさんは罾を、イーリスさんは捕獲用睡眠弾をお願いします」

平然と言うアキラの発言に、僅かに喜びが見えていた二人の表情が一気に強張る。

「それじゃ、アキラさんは……」

「足止め、ですか？」

ルーメンが罾を仕掛け、イーリスが麻酔弾を撃つと言う事はアキラしかアグナコトルを相手することが出来ないことである。

「はい。自分ならアグナコトルにずっと張り付いていられますから」普通に話しているが、すでに全員が限界に近い事をアキラは感じ取っていた。

特に前衛でなおかつガードの出来ないルーメンの疲労はこの三人の中で一番ひどいだろう。

そのためアグナコトルを足止めさせるのはかなり難しいと考えた。

一番、楽なのはイーリスだろうが間合いの関係でアグナコトルが大きく動いてしまい、罾の設置の際に障害になる可能性があった。

そこで、普段からコンビを組んでいるルーメンに罾を設置させイーリスに麻酔弾を撃たせることにしたのである。

特にイーリスの場合ボウガンなので手投げの麻酔玉より麻酔弾を安定して当てる事の出来ると考えられた。

そうなるに残されたアキラの役目は罾を仕掛けるための足止め役……

…要は囷だけである。

アキラはその説明を一通りすると二人の反応を見ようとしますが、それよりも早くイーリスが口を開いた。

「分かりました」

「イーリス！」

予想以上の即決にアキラは呆然としたが、ルーメンは直ぐに声を上げた。

しかし、イーリスは気にする様子もなくルーメンに声を掛ける。

「ルー、貴方が罫をすぐに仕掛ければいいだけの話よ」

その言葉に不満な視線を向けるルーメンの頭を軽く叩きながらイーリスはアキラに僅かに鋭い視線を向ける。

その視線を受け、アキラは苦笑気味に答える。

「確かに、そうですね……って、何か少し冷たくありませんか？」

「気のせいですよ、気のせい」

そう言っただけイーリスはアキラを抜いて先を歩き始める。

一方、その背を見ながらアキラはフウと息をついた。

先ほどの視線は鋭かったが、その中にアキラにとって程遠いあるものが混じっているのを見逃さなかった。

そこへ、少し思いつめたルーメンが声を掛けてきた。

「……アキラさん。出来るだけ早くので頑張ってください」

「はい」

ルーメンの言葉にアキラは素直に答えると、ルーメンはイーリスを追って走り出した。

その様子を見送りながら、アキラは再びフウと息をついた。

「行きますよ」

アキラの掛け声を合図に3人はエリア7全体へと散ってゆく。

エリア7にきたアグナコトルは周囲を警戒していたが、すぐにアキラに気づくと迎撃の態勢に入る。

その隙にルーメンとイーリスはエリアのほぼ中央、若干北側の所に移動した。

「ルー！急いで！」

イーリスにせかされるようにルーメンは用意しておいた落とし穴の設置にかかる。

付属の小型シャベルで僅かに穴を掘り、その上にトラップツールを三角錐状に組み上げるだけであるがその時間をもどかしい。

ガリガリと赤くなって少し柔らかいところを重点的に掘り、何とか直径10センチ、深さが5センチほどの穴が出来た。

ルーメンは素早くトラップツールを組み立て、最後に今まで使った小型シャベルを頂点部に差し込んだ。

あとは点火用のひもを引くだけである。

喜んだルーメンが顔を上げてアキラを確認しようとする、隣のイーリスがジッと何かを見ているのに気づいた。

「イーリス？」

イーリスの視線を追ってルーメンがその方向を見るとそこには、アグナコトルを相手に攻勢に出ているアキラの姿があった。

アグナコトルが噛み付こうが、その巨体で押しつぶそうが、アキラはそれらを全てカウンターで返していた。

その様子を啞然と二人が見ているのも知らず、アキラは完全にアグナコトルに没頭していた。

実際、足止めの役割を受けたアキラであったが、それはアキラにとって最後のアグナコトルの観察のチャンスであった。

アグナコトルの全てを感じるようにアキラはアグナコトルに密着し、ランパートで体の肉質を確かめる。

溶岩の鎧が無くなった今、アキラにとっては調査のしやすい相手となっていた。

全身を突きながらそれぞれの肉質の違いを感じ記憶するのだが、アキラにとってそれは一種の楽しみとなっていた。こうして実際にアグナコトルの速さやその攻撃力を実際に体感できているのだから……

「すごい……」

ルーメンが思わず漏らした声にイーリスが我に返り、すぐに落とし

穴の状況を確認する。

「ルー、準備は良いわね」

「う、うん」

イーリスの声にルーメンは慌てて答えると、点火用の紐を一気に引っ張った。

すると、シュポン！と言う音とともにトラップツールの機構が作動する。

三角錐の中央に設けられた小型ドリルが掘った穴を起点に一気に掘削を始め僅かに溶岩が漏れる。

しかし、それでも機構は止まることなく、ある程度まで掘削すると今度は地面を内側から抉るように別の掘削機構が動く。

そして、最後に内蔵してある捕縛用のネットが広がって落とし穴が完成した。

「アキラさん！」

ルーメンの呼びかけに、アキラは直ぐに反応した。

アグナコトルの隙を見て、アキラはバックステップで距離を取ると素早くランパートをしまう。

「こつちだ！」

挑発するようにアキラはアグナコトルを誘導する。

アグナコトルもまた、散々張り付いていたアキラに気が立っているのか、そのまま追って来る。

そして、アキラはある場所でいきなり脇に飛びのけた。

その動きにアグナコトルはついて行けず、慣性のまま突き進み落とし穴の上へとその巨体を乗せてしまった。

次の瞬間、アグナコトルはうめき声と共に落とし穴に落下した。

パニックになりながらも、落とし穴から出ようと必死にもがくアグナコトルめがけイーリスが捕獲用麻酔弾の一発目を撃ち込む。

バスンと命中した部分から白い煙が上がるが、アグナコトルは動きを止めない。

捕獲用麻酔弾の効果を得るためには最低でも二発が必要だった。

『後、一発!』

アキラがそう思った時、アグナコトルが不意に暴れる事を止め後方を顧みたのである。

「えっ?」

アグナコトルの行動に驚くアキラであったが、そこに二発目の捕獲用麻酔弾が命中した。

その瞬間、アグナコトルは力が抜けたようにその場に倒れ伏し、エリア7は一気に静かになった。

「や、やったの?」

「やったみたいね」

不安げに聞くルーメンに対し、安堵した様子でボウガンをしまったイーリスが答えた。

表情こそ落ち着いているが、イーリスもまたルーメン同様、喜びを爆発させたい様であった。

そんなイーリスをよそにルーメンは「やったー!」と喜びまわる。確かに、よくよく考えればルーメンのハンターランクからすればアグナコトルの狩猟に参加できるのはまだまだ先である。

それを考えるとこれだけ喜ぶのも納得できるし、咎める理由もなかった。

一通りルーメンがはしゃぎ回ったのち、イーリスはアキラに視線を向けた。

普通の捕獲なら後はギルドが来るのを待つだけだが今回は依頼主がじかに居る。今後の事はアキラ自身に聞いた方がいいだろう。

そう思いイーリスが声を掛けようとした瞬間、エリア内に銃声が響いた。

「コッ!?!?」

いきなりの銃声に三人ともそれぞれの獲物に手を当てるが、再び銃声が響きその足元に土煙が舞った。

三人は咄嗟にエリア4の方に視線を向けると、そこには4人の大柄な男たちがいた。

その手にはハンターが使うハンマーや大剣、ボウガンが握られている。

しかし、一番後ろに居るガンナーの銃口は明らかにアキラ達三人に向けられており、その様子は普通のハンターとは明らかに違った。そして、先頭に居るハンマーを持った男が面白そうに口を開いた。

「その獲物俺<sup>アグナコトル</sup>たちに渡してもらおうか？」

## Quest 6 鎗斧銃乱(ソウフジユウラン)(後書き)

まえがきでも書きましたが、ぶっ飛ばしすぎたと改めて反省しております。

理由は完結後のあとがきに書きたいと思っております。

一応、これで狩猟パートは終りで残り2話はまとめの話ですかね。その残り2話は次話の骨組みはほぼ完成していて、現在は肉付け中。最終話は前半の骨組みを少し書いたくらいです。

話は変わりますが13日に仙台で行われたモンハンフェスタに行ってきました。

1/1の造詣や公式資料など見ものが多かったです。

ゲーム中ではほとんど映らない雷光虫の詳細スケッチと各パーツの細かい説明は皆さん足を止めていましたね。

撮影禁止の札がなかったので今後なんか使えるかなと撮りまくりました。

あと、開発陣の方々や初代芸人ハンターのアメリカザリガニを間近で見れてトークを聞いたのもよかったです(小嶋さん……ドンマイ！)

本当は辻本プロデューサーと藤岡ディレクターのサインが欲しかったのですが藤岡さんは会えず断念。

辻本さんはすれ違ったのに緊張して声を掛けられなかった……まあ、写真を撮られただけよしとします。

フェスタに言った以上、当然ながら気になる方も多いアレの体験版もやってまいりました。

結果は今回の看板モンスターにフルボッコにあって1落ち、一緒にパーティを組んだ人たちも落ちて10分も持たず見事に3落ち。

まだハードに慣れていないとはいえあそこまで一方的に攻められるとは……強い強いとは聞いていましたけど自慢のランスで歯が立た



なかったのが悔しかったです。

公式で『歴代看板モンスター最強』のアナウンスを流すだけのことはあります。

まあ、それ以上に一落ちもしなかったアメザリに負けたのが一番悔しかったです。

大人の事情もあつたのでしようが、まともによつたらクリアしていた気がします。

これらはいくまで体験版の設定なので何とも言えませんが、製品版でも同じ強さだったらその時こそリベンジを果たします！  
自分を屠つた左ストレートにカウンターを決めてやる！！

さて、フェスタの話が長くなりましたが今後の予定としては次話を11月中旬に、最終話は12月9日までにあげたいと思っております。最終話の更新予定を見れば何を基準に締め切りを設定したか分かると思いますがお許しく下さい。

#### 次回予告

無事にアグナコトルの捕獲をしたアキラ達であつたが、そこに突如としてあらわれた4人の男達。

アグナコトルと渡せという彼らの目的とそれに対するアキラ達の行動は……

Quest 7 破壊するモノ

## Quest 7 破壊するモノ(前書き)

今回の話は人によっては少々グロテスクな表現が出てきますので、ご注意ください。

## Quest 7 破壊するモノ

主が眠りについたトリニーサ火山。

その一角、主が眠るところで緊張が走っていた。

「その獲物俺たちアグナコトルに渡してもらおうか？」

4人組の1人、おそらくリーダーであろう男がアキラの後ろを指差しそう言う。

アキラが指差す先を見れば、そこには眠りについていてるアグナコトルがいた。

そして、アグナコトルの向こう側で驚きの表情を見せるルーメンが隣のイーリスにそつと声を掛ける。

「イーリス、あれって……」

「流れハンターグループ『四鬼』ですね」

「えっ!？」

意外なところからの返答にルーメンは思わず声を上げ、慌ててその口をふさぐ。

イーリスもまたアキラの発言に驚いたのか、視線をアキラに移した。

「ほう、俺達も随分と有名になったものだな」

そう言ってリーダーは満足げな笑顔を浮かべる。

流れハンター……ギルドに属さず狩りをおこなうハンターの総称である。

昔はただギルドに属さない普通のハンターもその中に入れる事があったが、近年はギルドに属さず無許可の狩りをおこなうハンターを指す言葉であるが、それらのグループの名前はそうそう流れる物ではない。

理由は多くのハンター達がその輩を嫌い、口を閉ざしている事と、たとえ出てきてもギルドの執行人であるギルドナイトの手にかけられるからである。

しかし、流れハンターグループの『四鬼』はギルドナイトの手を巧

みに逃れており、それ故、ロックラックのハンターの間では『会ってはいけない』などと言われるグループであった。

そのため、ルーメンとイーリスは一気に警戒色を強めるがリーダーはさほど気にする様子はなかった。

「分かっているなら話は早い。そいつをおとなしく渡してくれるなら何も危害は加えねえ」

そう言つてリーダーは後ろのメンバーに目配せをし、周囲の男たちをうなずかせる。

その様子にルーメンとイーリスは思わず視線を見合わせる。

四鬼と言えばハンターすらも殺すといわれている存在であり、まさかこうも分かりやすい相手だとは思っていなかった。

やっこのことで捕獲したアグナコトルであるが、疲れ果てた現状で四鬼を退けることはまず無理だろう。

もし、リーダーが言ったことが本当なら助かるにはアグナコトルを明け渡すしかない。

しかし、ルーメンとイーリスはあえて答えず、アキラに視線を向けた。

捕獲したのはアキラを含めた三人であるが、アグナコトルを捕獲して調査することを決めたのはアキラである。

そのため、捕獲をし終えた現在のアグナコトルの所有権はアキラにわたっていると云えた。

そのアキラはしばらく黙っていたが、ポツリとつぶやくように口を開いた。

「…………断ると言つたら？」

アキラの言葉にその場の空気が一気に強張る。

良く見ればアキラの手は腰の後ろに回されており、リーダーからすればあからさまな敵対行動であった。

リーダーは残念と言つた様子で片手を上げると、周りに居たメンバーがそれぞれの武器を構える。

「そんなときや…………あんた達を殺すまでだ」



その光景に一番離れた位置に居るルーメンとイーリスは体を振わせる。

「イ、イーリスあれって……」

声を震わせながら、ルーメンはイーリスにすがりつき、イーリスもルーメンを庇うようにして口を動かす。

「イビルジョー……でも」

実際にその姿を見るのは初めてであるが、その名前と特徴だけはイーリスも知っていた。

イビルジョー……この大陸にある様々な生態系の中で有一、例外が付けられる存在である。

その性格は非常に凶暴かつ食欲旺盛で、生傷が絶えないと言う。更に過去の記録では周辺の生命体を全て食して局所的であるが、生態系を破壊しかけたこともあった。

ルーメンもイーリスも、その食性も、凶暴性も……しかし、ただ一つ普通と違がかった。

「大きい……」

そう、イビルジョーの体長はせいぜい20m程度であるが、今ここに居る個体は背中が洞窟の天井を擦る程の巨体であった。

そして、その巨体が二人の大剣使いを捉えた。

「ぐあやつ」

「あ、あ、ああ……」

イビルジョーは風ぎ払うように二人の大剣使いに食らい付き、そのまま食事を開始する。

それを見て『後は時間の問題』とルーメンとイーリスがそう思い始めた時、アキラが叫んだ。

「エリア8へ走って！」

その声により二人はほぼ反射的にエリア8へと走り出した。

それと同時に、アキラは麻酔の効いているアグナコトルに何かを投げつけると、ルーメン達とは逆の方向へと走り出した。

すると、今まで眠っていたのがうそのようにアグナコトルが起き上

がった。

「えっ」

「アグナコトル!? どうして……」

置き上がったアグナコトルに驚き、二人は思わず立ち止まってしま  
う。

麻酔で眠らせていた以上、アグナコトルがそうそう起きるはずもな  
いはずであるがなぜ……

二人がそう考えている内にアグナコトルは完全に覚醒したらしく、  
周囲を見渡す。

そして、捕食をしているイビルジョーを見るや否やすぐさま潜行を  
開始する。が、その直後、イビルジョーはアグナコトルめがけ走り  
出した。

イビルジョーは潜行して僅かに残っていた尻尾に喰らいつくと、そ  
のままアグナコトルを引きずりだす。

無理やり引きずり出されたアグナコトルはその勢いのまま天井に叩  
きつけられる。

その衝撃で噛みつかれた尻尾を断ち切られるとアグナコトルはその  
まま落下。更に天井が崩れエリア8への道が分断されてしまった。

「アキラさん！」

緊迫した声でルーメンは叫ぶが、それを打ち消すようにアグナコト  
ルが咆哮を上げる。

どうやらこの距離で逃げるのを難しいと考えたらしく、アグナコト  
ルは無謀にもイビルジョーと対峙することを決めたらしい。

そして、二つの巨体がぶつかり合いを始める中、アキラがルーメン  
とイーリスに対して叫ぶ。

「早く行って！ 必ず合流します！」

アキラはそう言ってエリア5、6方面へと走ってゆくのが見えたが、  
それもすぐに絡み合う二頭の影に消えてしまった。

「アキラさん！」

「ルーッ！」

ルーメンは戻ろうと走り出すが、その肩を怒号と共にイーリスが引き止める。

今ルーメンが向かおうとした先ではアグナコトルとイビルジョーが死闘を繰り広げており、そこへ踏み込めばおそらく簡単に餌食になってしまう。

しかし、興奮しているのかルーメンはイーリスの手を振りほどこうともがく。

「イーリス放して！アキラさんが！」

確かにアキラの事は気になる。しかし……

イーリスはルーメンの肩を引いて無理やる正面を向かせると、思い切りルーメンの頬を叩いた。

「いい加減にしなさい！」

イーリスの一括にルーメンの表情が一気に強張った。

無理もない、イーリスがルーメンにここまで怒るのはそうそうないからだ。

しかし、イーリスはそれ以上何もいわず、すぐにエリア8に向きを変えルーメンの手を引っ張って走り出す。

「ウエナートルさんが大丈夫と言うなら……大丈夫よ」

ルーメンを諭すようにイーリスはそう言い、ルーメンは心配した様子で一度振り返る。

すでにアキラの姿を見ることはできないが、ルーメンはアキラなら大丈夫だと信じてイーリスとともに走り出した。

一方、四鬼のリーダーはアグナコトルとイビルジョーが組み合っている場所から少し離れた場所に縮こまるようにして居た。

イビルジョーと組み合うアグナコトルはかなりの大きさであるが、それでも巨大すぎるイビルジョーの前では刃が立たないらしく徐々に押されているようだった。



しかし、いまイビルジョーの意識は完全にアグナコトルに向いており、逃げる事の出来るチャンスであった。

「くっ……」

リーダーは意を決して走り出すが、その前に一人の影が立ちはだかつた。

「お前は……」

そこに居たのは先ほどアグナコトルを捉えたハンター達の一人……ランパートを構えたアキラであった。

何故この様な状況でこうも平然としていられるのである。リーダーにそのような疑問が湧いたと同時にアキラは何かを告げるように口を開いた。

「クレア・シートス」

その言葉に四鬼のリーダー、クレア・シートスの目が大きく見開かれた。

その背後ではイビルジョーとアグナコトルが暴れているが、アキラはまるでそれが当然のことのように話を続ける。

「流れハンターグループ『四鬼』のリーダー。かつてそれなりの手<sup>て</sup>練れハンターと名をはせるも複数回にわたって裏取引を行いハンターの資格を剥奪、その後は同じ様な仲間を集め他のハンターの獲物を強奪、時にはハンターを殺害……先ほど終われば殺す気でしたよね？」

まるで報告書を読むかのように話していたアキラであったが、最後に加えられた質問をアキラは明るい笑顔で聞く。

「な……」

アキラの言葉にリーダー、クレアは思わず後ずさりをする。

なぜ、こうも自分に詳しいのだろうか……いや、それ以前に何故ぞこいつはこうも殺気を振りまいているのだろうか。

「ルーメンさん達は気づいていないみたいですが、殺気は伝わっていましたよ」

笑顔で話すアキラであるが、その殺気は徐々に大きくなっている。

そして、その事からクレアはアキラの正体に一つだけ思い当たったが、それとは別の言葉を叫ぶ。

「な、何だ貴様は……」

震える声とともにクレアはハンマーの柄に手を当てる。

もし、この男がクレアの考えている男だとすれば彼の人生はここで終わることになる。

「はあ……」

アキラはクレアの様子を持って軽くため息をつくと表情が一変する。

そして、ゆっくりと答えた。

「……貴方を狩るモノです」

次の瞬間、クレアはアキラに向かって地を蹴りだした。

「な、なめるなあああああああ」

殺されてたまるか！その一心でクレアはハンマーを構え、力をためながらアキラに一気に近づき、ハンマー最大の攻撃である大スタンプを繰り出す。

その背後では完全にイビルジョーに馬乗りされたアグナコトルが、食いついてきた顔めがけ反撃の嘴を突き立てる。

しかし、双方の行動はそれまでで、洞窟内に『ガキンツ』と言う音が響いた。

ハンマーを振り下ろしたクレアはガキンと言う音を聞き、アキラをつぶした衝撃と頬をなでる風と感じた。

そして、次の瞬間何かが舞うのが目に入り、同時に肩から先の右腕が消えているのに気がついた。

「ぐあああああああああああああああ……」

形容しがたい激痛にのたうちまわり、肩からおびただしい量の血を噴き出すクレア。

さらにアキラはランパートを構えなおすと、のたうつクレアに狙いを定めるが不意に視線をイビルジョーへと向ける。

そこではアグナコトルが反撃の嘴をイビルジョーの強靱な顎で捉えられていた。

一見、拮抗しているように見えたそれは次の瞬間に嘴は無残に噛み砕かれ、アグナコトルはアキラ達が部位破壊した時よりも更に大きな悲鳴を上げる。

全身をくねらせようとしますが、その体にはイビルジョーの足の爪が深々と食い込んでおりびくともしない。

どうやら、あちらの方も決着がつくらしい。

視線を戻すと、逃げようとあがきうつ伏せになったクレアの姿があるがそれも最後である。

「では」

優しく囁いたアキラの声はクレアの耳に入った瞬間、背中からの突き抜ける痛みと共に消えた。

アキラはためらくことなくクレアの背中をランパートで突き通し、雑払いの要領でクレアの遺体を引き抜く。

ランパートから引き抜かれた遺体はそのまま、イビルジョーの方へと転がり後は彼の食料となるはずである。

そのイビルジョーは嘴の無くなったアグナコトルの頭部に喰らい付いていた。

僅かに見える尻尾が、ビクビクと動いていることからまだ生きていることが分かる。が、それも長くは無かった。

イビルジョーは更に頭部を強く噛むと無造作に引っ張り、胴体から頭部を引き千切り満足げにバリバリと口を動かし、かつてアグナコトルの頭だったものを胃へと送り込む。

口の中が空になると更に残る胴体に食いつこうとするが、それを止めこちらをジッと見つめるアキラの方に視線を向けた。

その視線に込められたのは敵意でも殺意でもなく、獲物を見つけた喜びだった。

しかし、アキラはそれ動ずることなく腰のポーチに手を伸ばす。

「またいずれ会いましょう……」 『アノンプレデター』

アキラの言葉を合図にイビルジョーはアキラに突撃するが、アキラはポーチから取り出した物を地面に叩きつけた。

するとボンツと言う音共に濃密な煙と特異な異臭が発生し、一気に洞窟内を覆い尽くす。  
さしものイビルジョーもそれらに驚いたのか、思わずひるんで立ち止まる。  
更にその後も複数回にわたって「ボンツ」と言う音が響き、様々な異臭が漂い始めイビルジョーは完全にアキラの姿を見失った。  
獲物を逃がした悔しさからか、イビルジョーは洞窟内を崩すかのような咆哮を周囲に響き渡らせた。

それから、数時間後……

エリア8へと抜けたルーメンとイーリスは無事にエリア5にたどり着いていた。

エリア内にはブナハブラすらおらず、アグナコトルの戦闘で更地となったそこはここ数週間内でも特に静かであった。

とはいってもエリア5の隣は先ほどイビルジョーと遭遇したエリア7である。

イーリスはいつも以上に周囲を警戒しているが、その隣のルーメンはどこか上の空であった。

「ルー……」

その様子にイーリスは気づいており、何度か励ましてみたものだめだった。

イーリス自身もアキラの事を全く心配していないわけではないが、さすがにあの状況を考えると半分諦めざるを得ない。

しかし、逆を言えば残り半分は期待が出来る存在であることを示していた。

「っ!？」

そこまで考えていたイーリスは気配を感じ、反射的にそちらに銃口を向ける。

イビルジョーでなくとも、四鬼のメンバーがいれば命が危ういのもまた事実である以上、油断はできない。が、銃口を向けた先で気配の主が慌てて声を上げた。

「ちよちよ! 待ってください! 自分ですよ!」

「アキラさん!？」

その声にルーメンが反応し、イーリスも驚いた様子で銃口を下げた。「無事だったんですか?」

「ええ、四鬼のメンバーは無理だったみたいですけど……」

そう言つてアキラはエリア7へと続く洞窟を指さし、ルーメンとイーリスは表情を曇らせる。

命を狙われたとはいえ、あの死に方を目の当たりにすれば素直に喜ぶことは出来なかった。

そんな二人の心情を察してか、アキラは話題を変える事にした。

「とりあえずキャンプに戻りましょう」

横に置いてあつた大量の荷物を手に取り、アキラは話を続ける。

「一応、予備も含めた全ての大タル爆弾Gを使って洞窟を爆破しましたが、どれだけ足止めできるか……」

その話イーリスは再びエリア7への洞窟を確認する。

一見すれば普段と変わらない様だが、よくよく見れば漏れ出ている煙の量が明らかに少なくなっている。

アキラの言う通りなら爆破による一時的な封鎖と餌となるアグナコトルの存在で、しばらくはこちらへは来ないだろうがそれも時間の問題である。

ちなみにアキラは爆破後、この周辺に隠しておいたアイテムを一通り集め遠回りしてくるであろうルーメンとイーリスを待っていたが、それもある程度の時間がたてば一人でベースキャンプに戻るつもりだった。

アキラの話にルーメンは「すみません」と謝り、イーリスも頭を下げる。

「あまり、気にしないでください。それにこれ以上は時間も……」その時、アキラの話を妨げるように、ズシンとエリア7へ続く洞窟が音を立てた。

三人の空気が一気に張り詰めるが、それ以上の変化は見られない。おそらく、たまたま岩が崩れただけなのだろうが、だからと言って問題がないと言っわけではない。

「急いでキャンプに……」

緊迫した表情で促すアキラに二人は頷くが、ルーメンが声を上げた。「あ、でも……迎えが来るのはまだ先ですよね？」

確かに、先日補給が来たことを考えればあと1〜2日は待たないといけない。

一応、連絡手段はあるがそれでも1日はかかるだろう。

あれほどのイビルジョーに対して、それまでベースキャンプが無事でいられるであろうか……

不安げな表情をするルーメンであったが、アキラはその肩を優しく叩いた。

「大丈夫ですよ、きっと」

「えっ？」

「時間がありません。急ぎますよ」

驚くルーメンをよそにアキラは歩き出し、イーリスも少し疑念を抱きつつルーメンを引っ張るように後に続く。

三人は周囲に気をつけつつ、途中でアグナコトル用に用意していた道具を回収してベースキャンプを目指す事にした。

もつとも、エリア5を抜けた後の道中は生き物という生き物とは合わず、せいぜいイビルジョーへの警戒だけで普段よりもずいぶん早く移動できた。

そして、無事にベースキャンプにたどり着いたアキラ達に聞きなれた声が聞こえた。

「おーい来たぞー！」

その声にルーメンとイーリスは驚きの表情を見せる。と言うのも、そこに居たのはいつも物資を運んできた船長だった。

更にその後ろでは乗組員たちが荷物をせつせと片付けている。

一方、アキラは驚くこともなくそのまま船長に挨拶をすませ、自分の荷物のチェックを始めた。

「あの……船長さん？」

「どうしてここに？」

すでに荷物のほとんどが片付けられてしまいつて、何もすることのないルーメンとイーリスは船長に質問をする。

すると、船長はアキラのテントの方に視線を向け指差した。

「あいつに頼まれてな」

船長の指差した方を見ると、アキラと話す一人の男性がいた。

その格好は船長達とは違い、正装の所々に金属性のアーマーがついており防具であることが分かる。

そして、その防具を着ている人物が何者かも……

「ギルドナイト……ですか？」

「ああ、あんた達に荷物を届けて戻った直後に会ってな」

「直後ですか？」

「ああ……」

イーリスはそのまま船長との話を続け、ルーメンは恐る恐るアキラとギルドナイトに近づく。

ギルドナイト……ギルドの直轄の凄腕ハンターのこと、アキラの様に様々な調査を行っている。

また、裏ではギルドと他の組織との交渉を行ったり、必要とあれば暗殺も行つらしい。

もっとも、後者はあくまで噂の域を出ない物で、ルーメンもさほど気にはしていなかった。

そのギルドナイトはアキラと何やら真剣な面持ちで話していたが、ルーメンが近づいてきたのに気づき話を止めた。

微妙な空気が流れ、ルーメンは近づくべきではなかったと悟った。

「では、これで……」

ギルドナイトは僅かに鋭い視線をルーメンに送ると、そのまま飛行船へと歩いてゆく。

僅かに視線があっただけであつたが、その視線にルーメンは思わず表情がこわばつた。

「大丈夫ですか？」

「あ、はい……ちょっと怖かつたけど……」

そう言つてルーメンは少しうなだれる。

割つて入つた自分が悪いのだが、やはりあの様な視線を向けられると改めてそれを感じてしまう。

そんな、ルーメンの様子にアキラは少し困惑して息をつくが、すぐにイーリスに視線を向ける。

船長と話していたイーリスはアキラの視線に気づき、同時にルーメンの様子にも気付いた。

イーリスは船長との話を止め、ルーメンの元に駆け寄り慰め始める。改めて姉妹の様な二人だなと思ひながら、アキラは事の状態を話す事にした。

「先ほどギルドからの正式な通知が来ました」

その言葉にルーメンとイーリスの視線はアキラに向けられ、表情も真剣になる。

アキラは二人の視線に、一息つくどゆつくりと続きを話し始めた。

「……アノンプレデターが現れたので今回の調査は中止と言つことになりました」

「アノ……」

「アノンプレデター……」

知らない単語にルーメンとイーリスは顔を合わせる。

その様子にアキラも仕方がないと言つた様子で話を更に続ける。

「さつき遭遇したイビルジョーのコードネームですよ」

「それってどういふことですか!？」



真つ先に反応したのはイーリスで、ルーメンはまだよくわかっていないようである。

反応の差はおそらくハンター歴の差だろうが、それでも何かものすごく危険な何かであるとい事は分かっているだろう。

「それは……」

「船長！来ましたー！！」

アキラの話は飛行船に居た一人の乗組員によってかき消された。

見張りをしていた乗組員の目には、ベースキャンプを目指してくる巨大なイビルジョーの姿がはつきりと見えていた。

「ちっ、積み込みは中止！直ぐに出るぞ！！」

船長はすぐさま作業を中断させ、全員を飛行船に乗るように誘導し始める。

残っている物資は勿体ないが命に代えられるものは無い。

それはアキラ達も例外ではなく、アキラも批難させるのは覚悟で「まずは飛行船に話はその後」と言って飛行船へと二人を誘導し走り出した。

全員が乗ったのを確認すると船長は、操舵わきのレバーを引いて気球に火を入れようとしますが、そこに一人の乗組員が声を掛ける。

「船長！ロープは……」

「切断してもいい！もたもたするな！」

乗組員を罵倒し、急いで固定していたロープを切断させる。そこにイビルジョーの巨体が見える場所に姿を現す。

その姿に乗組員の動きが恐怖で止まる。イーリスは咄嗟にボウガンを構えるが、それをギルドナイトが止めた。

「止める、下手に刺激するな」

「でもっ……」

抗議のまなざしをイーリスは送るが、ギルドナイトはその視線をある方向に向け顎をしゃくる。

イーリスがその視線の先に目をやると、乗組員をかき分けてロープを切断して回るアキラとルーメンの姿があった。

ルーメンはおそらくアキラの指示で動いているのだろうが、二人は手早く固定してあるロープを剥ぎ取りナイフで切断して行く。

そして、アキラがあるロープを切ると同時にギルドナイトが声を上げた。

「船長！」

「よし行くぞ、しっかりつかまつてる！」

船長がレバーを引くと炎が噴き出し、飛行船はいつきに上昇を開始した。

急上昇する飛行船の上からアキラが見下ろすと、体に枝が突き刺さるのも構わずこちらに近づいてくるイビルジョーの姿が見える。

イビルジョーは飛行船に喰らいつこうと、全身をバネにその巨体からは想像できない大ジャンプを行い上昇する飛行船に迫る。

強靱な顎で喰らいつこうとしたイビルジョーであるが、その顔面に何か投げつけられイビルジョーは大きくひるみバランスを崩す。

しかし、イビルジョーはすぐさま態勢を立て直すと地面に轟音を上げ着地をした。

顔面からは強烈な臭いが放たれ、うっとうしそうに頭を振るがなかなか取れない。

その正体はこやし玉であった。

モンスターのフンと素材玉を調合したそれは、ある条件下ならばどんな凶暴なモンスターでも嫌がるものであった。

それをイビルジョーが飛行船に喰らいつこうとした瞬間、アキラがその顔面めがけ投げつけたのである。

流石のイビルジョーも食事をしようとした瞬間、そんなものを顔面にぶつけられればひとたまりもない。

そのため、イビルジョーは地面に何度も顔をなすりつけ、こやし玉の匂いを取ろうと必死にもがくが、その間にも徐々に飛行船は離れて行く。

そして、何とか匂いを取ったイビルジョーが空を見上げた時にはその姿は無かった。

獲物を逃がしたイビルジョーはそのまま激怒にも近い咆哮を上げ、トリニーサ火山全体を大きく震わせたのだった。

## Quest 7 破壊するモノ（後書き）

イビルさん大暴れの回でしたがいかがだったでしょうか？

トライバージョンのイビルジョー（イビルさん）をイメージしたのですが、かなり脱線してしまいました。

まあ、3と3rdでのイビルジョーの違いを書こうとしてこうなってしまったのかもしれませんが。

3だとクエスト中にいきなり現れ、すべてを喰い尽くす+出会ったらまれ右のイメージでしたが、3rdだと終わった後にひょっこり出る+戦えたら戦うのイメージなので……10日のは前者を期待します（後、攻撃力も3のに戻すor並みにしてください）

ちなみに今回の個体は3のイベクエ『世界を喰らう者』がモデルで喰い意地を強調しました。

何故か最新PVのラストに出てきたアレの設定に近いですが違います。ただ、でかくて喰い意地が強いだけです。

ちなみにどのくらい大きいかはyourrubeやニコニコ動画など探してみてください。

前回は書きましたが次回は最終回で更新は12月9日までにはしたいと思います。

## 次回予告

何とか無事にトリニーサ火山より脱出したアキラ達。

しかし、アキラが話した『アノンプレデター』とはいったい。

そして、一応の調査を終えた事によりアキラとルーメンたちは別れの時もやってきた。

Q u e s t 8 夜の酒場 〱 報告 〱

Q u e s t 8 夜の酒場 〵報告〵 (前書き)

急いで書き上げたためおかしいかもしれません。

## Quest 8 夜の酒場 〱報告〱

天頂にあった月が沈み始め、賑やかだった酒場も僅かに人気が無くなっていた。

とはいってもまばらに居る客や酔いつぶれた客もあり、それはハンターも一般人も関係ない情景であった。

そんな酒場を砂漠の少し寒い風が吹いてゆく中、ナギはよいしょとカウンターの裏に愛用の『サメ』事、鮫型ランス『シャーキング』を立て掛ける。

強烈な水流をだすこの鮫は、熱くなった客の頭を冷やすには最適の一品だった。

そんな鮫も今晚のお勤めはこれまでである。

「今日もお疲れ様」

優しく労をねぎらう言葉を掛け、イーリスは他の受付嬢に交代を告げるとカウンター裏の扉に入ってゆく。

中は厨房や、食材の保存庫など様々な場所につながっているが、ナギは比較的すぐそばの扉を開けた。

すると夜の砂漠、独特の冷たい風が頬を叩き、白くなったギルドの砂上船及び飛行船の碇泊地が一望できた。

ここは一応、酒場の一部で主にギルドマスターの客人が利用する一種のVIP席である。

そのVIP席にはギルドマスターとある意味同僚のギルドナイトが一人、更にナギのよく知る2人のハンターと1人の調査員の姿が2人の前にあった。

ナギは月光だけが差し込む室内を見渡し終わるとギルドマスターに声を掛けた。

「マスター、もう問題ないかと……」

「すまないな、ナギくん」

ギルドマスターの礼にナギは首を振ると、そのまま出入口の扉の

前に立った。

その事を確認すると、マスターは正面に居る三人に視線を向ける。調査員で、レザー装備のアキラは普段とあまり変わらないようだが、ハンター二人の表情はいつもとは違った。

幼げな表情が僅かに見え隠れするレイア装備を纏うハンター、ルーメンは緊張した面持ちである。が、常にパーティを組んでいるガンキン装備のハンター、イーリスは不快感を表していた。

まあ、それもトリニーサ火山を脱出後はギルドの管理下に置かれ、普段よりも早くロックラックに帰ってきてからはここにほぼ一日軟禁されれば納得できる。

「この度はこのような措置を取ったことをまずは謝罪させていただきます」

マスターは頭を下げ心から謝罪を述べる。更にそのままその理由を話し始めた。

「この様な措置を取った理由ですが、それはあなた方がトリニーサ火山で見たあのイビルジョーに関係しております」

そこでマスターが一息つくくと、部屋の中の空気が僅かに変わる。

この空気は互いに心情を探り合う時のものに似ている、いや、その空気そのものである。

視線をそつと向ければ、イーリスはマスターの隣に居るギルドナイトと火花を散らしている。

おおかたイーリスのきつい視線にギルドナイトが反応し、現在の状況になったのだろう。

現にルーメンはもちろん、今までただ聞いていたアキラも二人の様子に注意を向けている。

これ以上の緊張はいい物ではないので、マスターは周囲にもわかるようにギルドナイトに視線を向ける。

ギルドナイトはしばし悩んだものの、マスターの視線に負けその警戒心を収めた。

周囲の空気が一段落したのを確認すると、マスターは一度咳払いを



して話しを再開する。

「さて、話の続きですが……」

「すいません、マスター」

再開した話を早々に中断させた人物に部屋に居る全員の視線が注がれる。

その人物……アキラは一度頭を下げると口を開いた。

「アノンプレデターの話はヒュエトスさん達に大体話したので要点だけでいいと思います」

「……そうですか」

アキラの発言にマスターは一度と口を閉じ、深呼吸をする。

すでに話してあるのであればそれほど詳しく話す事はないが、ある程度の確認は必要であろう。

「では、少々話しが被るかもしれませんが改めて説明をいたします」  
アノンプレデター……ギルドがその正体を確認したのは約一年前で丁度、未開の地の調査を複数の部隊で行った際に初めて確認された。とはいっても、当初は『巨大な謎のモンスターがありとあらゆる生物を捕食した形跡がある』と言うものだけだった。

なぜそうなったかと言うと、捕食された対象にイビルジョーが含まれていたためである。

しかも、残っていた爪などから比較的大型に当たる個体であったためにギルドでは『イビルジョー同士の共食い』の線が薄いと考えたのである。

そこで、新種のモンスターであると考えた調査部隊は暫定的に『未知の捕食者』と名付けた。  
アノンプレデター

しかし、それは数日後に最悪な形で覆された。

アノンプレデターの痕跡を発見した部隊と交代した別の調査部隊が、突如として消息を絶つたのである。

「この後の話も聞きましたかな？」

「ええ、その後の部隊が全て消息を絶つたことも……」

マスターの問いに答えたのはイーリスで、ルーメンは完全に頭を下

げてしまっている。

イーリスの言った通り、調査部隊の消息が立ったのを受け、ギルドは捜索部隊を向かわせたがその部隊も全て消息を絶ったのである。当然、未開の地での消息不明と言うこともあって、ギルドはギルドナイト共に腕利きのハンターも護衛に付けていた。

「しかし、どこの部隊も帰って来なかった……」

ただ事でない状況にギルドは地上からの捜索を中止し、飛行船による空からの偵察を行うことにした。

そして、一隻の飛行船がアノンプレデターの姿を初めて確認した。

「それが、君たちを送ってきてくれた船長の飛行船でした」

その飛行船からの情報は伝書鳩を通じ、すぐにギルドに届けられそこからギルドによる監視が始まったのである。

マスターはその事を伝えるとフウと息をつき、小さな背中を背もたれに寄り掛かせた。

それから約一年。ギルドはずっとアノンプレデターの同行を追ってきたのである。

しかし、その対応にルーメンが疑問を投げかけた。

「どうして危険と分かっている、放っておくんですか？」

ルーメンの問いに、マスターを始めギルドナイトとナギの表情が曇る。

その様子にアキラはため息をつき、口を開かない三人の代わりにルーメンに答えた。

「当然、ギルドは有志のハンターやギルドナイトによってアノンプレデターの討伐を幾度か行いました。しかし……」

「全て失敗した。と言うわけですね」

アキラの話に続けてイーリスが話しをかぶせたが、誰もそれを咎めはしなかった。

そう、ギルドは幾度も有志を募りアノンプレデターの狩猟を試みたが、全て失敗したのである。

「あそこまで来るともはや古龍級のモンスター……そのためギルド

は対策を講じつつ、その間は徹底監視をすることを決めました」  
幸い、アノンプレデターは未開の地の更に奥地に生息域を持っていたので、人目につくことはまずなかった。

しかし、下手に公表すれば命知らずがその命を本当に落とし、更に人々の住む生活圏にやってくる可能性もあった。

そこで、ギルドは徹底的に緘口令を行い、更に狩猟せず観察をこまめに行いアノンプレデターの行動を監視することにしたのである。  
もし何かあればすぐに避難できるようにと……

「しかし、最近アノンプレデターの行動範囲が大きくなってきましてな……」

ただでさえ、イビルジョーは食欲が旺盛であるのに、あれだけの巨体を維持する事となれば通常よりも大量のえさが必要である。

その餌も、決まった範囲に入れば無くなって来るのは当然であり、新たな餌を求めアノンプレデターは活動範囲を広げつつあった。

「そして、運悪く今回の調査地域であるトリニーサ火山にきてしまったわけですね」

「はい」

トリニーサ火山はギルドが認めている狩場の中でもかなりの僻地に位置しており、人の出入りも少ない。ある意味、自然な状態での調査を目的とするアキラの調査場所として選ばれた理由もそこにあった。

もつとも、今回は運悪くこの様な結果になってはしまったが……

「実は……今回の件は今後一切、誰にも話さないでほしいので  
す」

「……」

「……」

ギルドマスターの言葉にルーメンとイーリスは顔を合わせる。

つまり、今日一日ここに閉じ込められたのは他の誰にも話させないためだけであった。

それだけギルドがアノンプレデターを公表したくないわけであるが、

それにしても呆れるくらい徹底した規制である。

しかし、その理由も良くわかる。実際にアノンプレデターを目の当たりしたからこそ落ち着いているのであって。

もしその姿を見ていないならば、ハンターとして狩猟に向かおうとしただろう。

そして、民間人からすればその噂が広まるだけで大きな不安に包まれ、交易にも影響が出る。

そう考えれば、今はまだそっとしておいた方がいいのかもしれない。その時点で二人の答えはもう決まっている。が、イーリスはマスターに一つだけ質問した。

「マスター、もしアノンプレデターが奥地から出た場合には？」

「……その時は非常事態としてハンターおよび市民に公表するつもりです」

マスターとて今のままでいいとは思っていないが、腕の立つハンターはそうそういるわけではない。

また、今までの結果を見れば少しでもハンターの質がそろつのを待っていたのが本音であった。

もっとも、最近アキラの来たシュレイド大陸からのハンターの流れが多く、腕の立つハンターを探すよりもそちらに手間取っている感もある。

「分かりました。ちゃんと公表するのであれば誰にも喋りません」

「ありがとうございます」

「あの……」

イーリスに頭を下げるマスターにルーメンが恐る恐る声を掛けると、イーリスが驚いた様子でルーメンを見る。

それにはアキラも驚いたようでもルーメンに視線を向けた。

周囲が驚くのに対し、マスターは優しく声を掛ける。

「なんですかルーメンさん？」

「話さないでいれば今後の生活は……」

「……カッカッカッ」

ルーメンの話を途中まで聞いてマスターは面白そうに笑い始めた。マスターがいきなり笑い出したのに驚いたのかルーメンの肩が狭くなる。

「おっと、これはすみません」

その様子にマスターは謝ると大きくうなずいた。

「大丈夫です。その事についてはこのギルドマスターである私が保証しましょう」

しばらくは監視が入るかもしれないが、監視が大丈夫と断定すれば今までどおりの生活が送れるはずである。

マスターの話を聞いて安心したのか、今まで強張っていたルーメンは小さな笑みを浮かべる。

その笑みにつられ、イーリスの表情も多少は柔らかくなった。

その事に気づいたアキラがマスターに目配せをすると、マスターは扉の方に居るナギに声を掛けた。

「では……ナギくん、アレを」

マスターの指示を受け、ナギは扉近くの棚から何やら大きな袋を二つ取り出した。

それは大人一人が入る様な大きな袋であったが、ナギはそれを平然と二つ持ってルーメンとイーリスの前に置いた。

「これは……」

「今回の報酬です」

驚きた様子の二人にナギが優しく答えると二人は更に驚いた様子を見せる。

ルーメンがナギに許可をもらって中を見ると、そこにはかなりの数の赤い鱗や甲殻、爪、更には尻尾などの大型部位の交換券が入っていた。

その交換券を見ればアグナコトルの素材であることが書いてある。更に袋の中を確認しようとするルーメンとたしなめつつ、イーリスがナギとマスターに申し訳なさそうに話す。

「でも、私達は何も……」

「これはアキラさんからの物です」

ナギの返答に二人は先ほどからずっと二人を見ているアキラに視線を向ける。

「自分の我儘に付き合ってくれましたので……一応、今回の調査の護衛報酬と言うことで」

アキラは照れ臭そうにそう言うと、マスターに確認の視線を送る。

するとマスターは大きくうなずき、報酬について注意事項を述べた。「アキラ君からの頼みで用意したもので、普通のアグナコトルの素材のほか特別に上位素材の交換券も入れてある」

「えっ!？」

「いいんですか？」

上位素材はルーメンはもとより、イーリスですらまだ手に入れたことない素材である。

まして、アグナコトルの上位素材となれば更に貴重なものである。

そのようなものを行くならんでももらっていい物なのだろうか？

そんな二人の疑問にマスターが構わないと言った様子で答えた。

「今回は色々ありましたしな。まあ、口止め料とでも思ってください」

それに、この交換券はハンターランクが41以上で利用可能なので下位の二人はまだ使うことは出来ない。

いきなり強力な物を作る事は出来ないのです、表面に出る事はまずない。

二人は当初、困惑していたが、マスターとアキラ、更にはナギとギルドナイトまでが視線を向けてきたので受け取ることにした。

「では」

「ありがとうございます」

二人が報酬を受け取ったのを確認するとマスターはナギに声を掛ける。

「ナギくん、彼女たちをゲストハウスに連れて行ってくれ。ついでに細かい話しも頼むよ」

「はい」

二人はそのままナギの後について部屋を後にしようとするが、ルーメンが立ち止まり振り返った。

「アキラさんは？」

ルーメンの声にイーリスも気が付きアキラを見る。

アキラは少し困った様子で頭をかくと、少し答えづらそうに口を開いた。

「まだ、調査時の報告があるので……失礼ですがここでお別れです」「えっ？」

いきなりの別れを告げられ、ルーメンは啞然とする。

イーリスも最初は軽く目を見開いたものの、ギルドナイトの雰囲気が変わったのに気づいた。

アキラもイーリスがその事に気付いたこと感じ取り、声には出さず視線だけで謝罪の意思を伝える。

トリニーサ火山で説明すると言って置きながら、結局のところ出来なかったのである。

アキラは厳しい視線か言葉を言われるつもりであったが、イーリスはゆっくりと頭を下げた。

「ウエナートルさん……ありがとうございます」

「……こちらこそ、ヒュエトスさんも今後も気を付けてください」「はい」

予想と違う反応にアキラは僅かに戸惑ったものの何とか言葉を返す。すると今度は、ルーメンが少しだけ気迫の満ちた様子で声を掛けてきた。

「あの……アキラさん！」

「はい？」

「多分、無理だと思うんですけど……その……」  
ルーメンの言葉にアキラは心構えをするが、次に出た言葉にそれはむなしくも崩れた。

「アキラさんの所に遊びに行ってもいいですか!？」

「へっ？」

「あ、その……アキラさんが忙しくなければの話であってその……」

「……………」

そのままルーメンの声は小さくなってしまいモゴモゴと口元だけが動く。

一方、アキラの方はこれまた予想外の言葉に、完全に言葉を失ってしまい無言で二人の空気は固まってしまった。

しばらくの間その状態が続いたが、堪えきれなくなったルーメンは顔を真っ赤にすると扉へと駆けだした。

「ごめんなさい！」

「ルーッ！」

「あ、二人とも待って！」

謝って出て行ったルーメンを追いかけイリスが、更にその二人を追ってナギが部屋から飛び出して行った。

その様子にマスターは面白そうに見ていたが、未だに呆然として固まっているアキラに声を掛けた。

「……………どうしましたかな？アキラ殿」

マスターの言葉にアキラはハツとして答える。

「あ、いえ。初めて言われたのでつい」

「初めて？」

「はい。『遊びに行つていい？』と……………」

そう言つて、アキラは三人が出て行った扉を少し寂しそうに見つめた。

今、アキラが言ったのは嘘ではない。普通ならば何気ない言葉であるが、アキラにとっては何よりも意外な言葉だったのである。

その経緯を伝え聞いていたマスターは同情するように深く息をついた。

「アキラ殿」

静かになった二人の間に、今まで黙っていたギルドナイトが割って入って来た。



その口調は明らかにアキラを非難している。

「例の物はどうした？まさか趣味にかまけて忘れていたと言っわけでは……」

「ゴホンッ！」

ギルドナイトはそのままアキラに詰め寄ろうとしたが、それをマスターは咳払いで止めさせた。

アキラはギルドナイトの行動をさほど気にはしていなかったが、どうやらマスターは耐えられなかったらしい。

マスターからの無言の制止にギルドナイトは一步下がる。

その間にアキラは荷物の中から、剥ぎ取ったモンスターの素材を入れておく袋を取り出した。

「ここに」

そう言つてアキラが袋の口を開くと、人の手が無造作に出てきた。

「クレア・シートスの右腕です」

その光景にギルドナイトは眉間にしわを寄せる。どうやら証拠を持つてきたことが気にくわないらしい。

しかし、アキラはその事に構わずマスターに仕事の成否について聞いた。

「これで、仕事はいいですね？」

「はい」

マスターは頷くとアキラにしまう様に指示を出す。

実はこれがアキラの今回の本当の仕事であった。

近年、この大陸の技術はシュレイド大陸との交易を期に一気に進歩していた。

それに伴いギルドの管理する狩り場やハンターも増えたが、同時に流れハンターなどの厄介な相手も増えていた。

本来ならばギルドナイトなどが相手をするのだが、問題はギルドナイトだけでは追いつけずにいた。

そこで、ロックラックのギルドマスターはドンドルマの大長老に助っ人の申請をしたのである。そして、大長老がアキラをここに使わ

せたわけであった。

「とりあえず報酬は確認後と言うことでよろしいですか？」

「構いません」

マスターの言葉にアキラは苦笑気味にうなずく。報酬の確認と言ってもアキラにとってはさほど気にはしていなかった。

アキラにとつての本当の報酬は、先ほどギルドナイトが『趣味』と言い張った生態観察なのだから。

「キミ、これを持って行ってくれ」

マスターは腕の入った袋を差し、ギルドナイトに持って行くように言った。

ギルドナイトはアキラを一睨みすると袋を持って部屋を出て行く。後は指紋などを調べ、一致すれば本当の仕事の終わりである。

残っていた個人的な荷物を手に取り帰り支度をアキラは始めたが、ふと窓から大砂漠に視線を移した。

手前のギルドの施設を除けば、白い砂の砂漠が地平線の向こうまで広がるその光景に思わずつぶやく。

「……アノンプレデターですか」

「懐かしいのですかな？」

マスターはアキラの近くまで来ると、視線を合わせるために視覚のテーブルに飛び乗った。

アキラは大砂漠を見ながら素直に答える。

「ええ、まさかこの大陸に来てその名前を聞くとは思っていませんでした」

そう言つてアキラは遠くを見るように目を細める。

その正体は違えど、彼もまたアノンプレデターによって人生に大きな影響を受けていた。

もし、アノンプレデターがいなければアキラはここにはいなかっただろう。

アキラとマスターはそのまま無言で大砂漠を見つめる。寒々しい光景であるが、そこには確実に人々の暮らしがあるのである。

「……次の依頼よろしいですか？」

静かに問うマスターにアキラは苦笑した。

「生憎、自分には断る権利はありません」

今、アキラの身はギルドマスターに預けられている。

一応、依頼をするにあたり生態観察を含む条件が付いているが、それは必ず必要なわけではない。

つまり、マスターが望めばアキラには依頼を拒否する権利はまったく無かった。

アキラの答えにマスターは頷くとアキラと視線を合わせる。

「今しばらくは期間を解けません……アノンプレデターの狩猟をお願いできますか？」

マスターの問いにアキラは表情を変えることなく静かに頭を下げ、荷物を持って部屋を出ていく。

そして自分以外、誰もいなくなった部屋でマスターは沈みゆく月を見上げた。

「これでよかったですかな……大長老」

アキラをよこした巨大な竜人を思い浮かべマスターは大きく息をついた。

そう言えば、アキラが来てまだ半年と経ってはいないのである。

アノンプレデターを始め、火山で多発する飛行船の消息事故、攻撃と同時に爆発を起こす未確認生物の調査などまだまだ彼には頼みたい事があった。

それは辛い依頼であるが、アキラはきつと喜んで引き受けるだろうが、他のハンター同様今はゆっくり準備をさせた方がいいかもしれない。

と、そこでマスターは彼と初めて出会った時の事を思い出した。

『依頼は受けませんが自分はハンターではないと言っただけ注意してください』

そう、彼はハンターではない。あえて言うなら……

「エコロジストマスターの生態学者ですな」

マスターは満足げにうなずくと、ふと思い出し愛用の筆と短冊を取り出すとすらすらと一句を仕上げた。

『新天地 歩みを止めぬ 青年は』

アキラ・ウエナートル。彼の新大陸での生態学者としての生活はまだ始まったばかりであった。

## Quest 8 夜の酒場 ～報告～（後書き）

どうも、最後まで『MONSTER ECOLOGIST 新たな大地と生命～火の国の住人達～』を読んでいただきありがとうございました。ございました。

当初はモンスターハンターポータブル3rdの発売前の景気づけに『トライのモンハンはこうだ！』と思って書き始めたのですが、気がつけば季節が一周してモンスターハンター3Gの発売前になってしまいました。

相変わらず自分の執筆速度は遅いです（笑）

私生活が忙しかったのもそうですが、後半は3G発売前を目指したため荒くなってしまったのが少々心残りでした。

一応、『MONSTER ECOLOGIST 新たな大地と生命～火の国の住人達～』は完結をしますが4人目の仲間、アキラ達の過去など設定があります。

機会があればこの話の修正をしつつ、シリーズとしてそれらの話につなげたいと思っています（その時は3rdや3Gの要素も少しずつ入れてみたいです）

まあ、未だに執筆中の連載がある&就職先が決まっていないので多分無理ですね（泣）

では、最初にも書きましたが本当にこの作品を最後まで読んでいただきありがとうございます。

些細なことでもいいので良ければ感想をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9008o/>

---

MONSTER ECOLOGIST 新たなる大地と生命～火の国の住人達～

2011年12月9日02時49分発行